

無から

「支持政党なし」時代
の選挙

有への挑戦

参加民主主義をめざす市民の会・編

日本の政治風土への挑戦の書

私は政治学者でありながら、現実の政治からはなるべく遠ざかっていたいと思う。政治はけがれたものだという考え方から、まだ抜けきっていないのだ。ところが、この若者のグループは、市民運動として、このけがれもの視されている政治に体当りする。権力志向とか、市民運動でなくなったとかいう批判がむけられがちだが、そういう見方をするもの自体、政治侮蔑觀に汚染されている。そういう意味で、この行動する市民のグループは、日本の政治風土に果敢な挑戦をしている。この本は一つの挑戦の書である。

東京七区での菅君の立候補は、私にも無謀な企てのように思われた。しかし、この若者たちは専門家の判断があやまっていることを示した。運動の過程だけでなく、結果もまたすばらしかった。可能性の限界をつねに打ち破っていくのがこのグループの特色らしい。この若者たちの軌跡をすることによって、われわれ市民も政治の中に可能性を求めたいと思う。



篠原 一（東京大学教授）

無から

「支持政党なし」時代
の選挙

有への挑戦

参加民主主義をめざす市民の会・編

無から有への挑戦／目次

「支持政党なし」時代の選挙

第一章 七万一・三六八票の記録

たたかいは終わりに近づいていた

"指定席" 東京七区に立つ 21

名もなく組織も金もなく 36

政治に市民常識を! 60

素人だけのプロダクション 73

毎日が遠足のような二十日間 88

雰囲気が変わってきた 113

しばらく自分の生活に戻りたい 128

第二章 草の根で挑んだ国政

私たちの履歴書 142

それぞれの個人史

女性活動家たち 171
教室から街頭へ 181

さまざまな支持者たち 196
内部の "傍観者" たち 192

Plan, Do, See 203

161

171

181

192

196

第三章 参加民主主義をめざして

第一部 政治を市民の手に

一、市民の国政からの疎外

二、政治への市民参加とは

三、市民運動と政治

四、社会党に代わる市民型政党を

215 212

221

224

第一部 市民運動の論理からの提言

- 一、社会参加を拡げる制度 232
二、市民福祉をめざす政策の方向 243

あとがき

252

第一章 七万一、三六八票の記録

たたかいは終わりに近づいていた

いよいよ最終日

「政治に市民常識を！」の合言葉でたたかってきた二十日間の選挙戦も、徐々に終わりに近づいていた。昭和五十一年十二月四日、土曜日。選挙戦の最終日である。朝のうち薄ぐもりだつた天気も、午後、国立駅頭で街頭演説をするころから陽がさしはじめ、ますますの選挙戦最終日となつた。

「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」推薦、革新無所属候補菅直人（三十歳）を乗せた選挙カーは、中央線三鷹駅北口の街頭演説を終え、選対一の名ドライバー小桜一利（三十五歳）の安定した運転で、武藏野市の閑静な住宅街を東へ、吉祥寺駅北口へと向かっていた。最終日のこの日、「東上作戦」なる特別スケジュールが組まれていた。午後一時、中央線立川駅北口の街頭演説をかわきりに、国立、国分寺、武藏小金井、武藏境、三鷹と中央線を東上しつつ、駅頭での街頭演説を繰り返してきたのである。午後六時半、冬の太陽はとっくに西の空に没し、服の下に入れたカイロがありがたい時間になっていた。

「一昨年市川房枝さんを参院選にかつぎ出したグループに推されて今回の衆議院議員選挙に立候補した菅直人です」私たちの選挙では、内容の伴わない『連呼』は一切やらない方針になっていた。

選挙カーは、何度も停車を繰り返し、終盤戦のウグイス嬢佐野ゆかり（二十歳）が、一回三十秒から三分位のスポットを流していく。



武藏野市の団地で第一声をあげた。

十月二十三日の「草の根千円パーティ」から、私たちのたたかいは始まつた。それから約四十日間、サラリーマン、学生、主婦、O.L、学者、教師、その他多くの人間が、運動の仲間に加わってきいていた。選挙戦の終盤には、候補者の菅さえ名前も知らないような連中が、電話の応待やハガキの宛名書き、ビラ撒きなどをやつて、という具合になつていて。議論し、決定し、スケジュールをつくり、担当を決め、実行し、反省と検討を加えていく、という毎日であった。決してすべてが予定通りにすんできたわけではない。むしろ、毎日が予定外のことのくり返しだつたといつていい。予想以上にうまくいったこともあります。しかし、それでもうまくはこばなかつたこともある。しかし、参加した一人ひとりが、それぞれの持ち場で、それぞれに工夫しながら、しんどい毎日を、楽しげにこなしていた。この運動（及び運動グループ）を卒論のテーマにし、期間中連日、菅の自宅に泊りこんだ藤岡郁子（二十二歳）の表現を借りれば、「毎日がまるで修学旅行のような」選挙戦であった。

三台の伴走車を引きつながら、選挙カーは吉

祥寺駅北口に近づきつつあった。運動の参謀役であり、最終日の街頭演説の司会を担当している片岡勝（三十歳）は、「東上作戦」のしめくくり地点、吉祥寺に向かう伴走車の一台を運転しながら、ある種の感慨が心の内に拡がっていくのを感じていた。「終わっちゃうんだな」——自分たちが必ずしも十全な力を持ち合わせていたとは思えないが、ともかく十二分に力を出しつくしたという満足感と、状況の歯車を少しでも納得のいく方向に動かしたという確信と、そして一つの運動の終盤にはいつも感じる「なんとなく、ちょっと寂しい感じ」とがいりまじった、不思議な気分であった。一方、候補者の菅は、「東上作戦」の途中から、のどが少しかれてきたのを感じていた。だが、疲れてはいない。もうひとふんばかりだ。

市民運動から政治運動へ

菅が弁理士として特許事務所に勤めながら、片岡をはじめとする仲間たちと、住宅問題、食品公害問題、医療問題、企業の政治献金禁止運動など、次々に市民運動を組んできて、もう六年になる。昭和四十九年の参院選には、「金権、企業ぐるみ選挙打倒」を旗じるしに、市川房枝女史をくどきにくどいて、むりやり全国区にかつぎ出し、菅はその選挙事務長をつとめた。

翌五十年の統一地方選では、各地の市民運動グループと連絡をとりつつ、武藏野市議選に仲間の田中栄（二十八歳）を推し出したが、わずか一票差で惜敗した。そして今回の衆議院選挙である。一つひとつ運動が、自分たちにとってのトレーニングであった。一步一步の前進が、仲間を増やし、グループの力を強めていった。

今回の選挙も、これまでと同じ「地盤・看板・カバン（金）——三パン」なしの「三無選挙」である。まして、この東京七区は、自・社・公・共四党の「指定席」、「無風選挙区」といわれていたところである。序盤戦ではたしかに、人手もカンバもいまひとつ、選挙区内での手応えもほとんど感じとれなかつた。

しかし、八万枚のビラ、三万五千通のハガキ、三台の電話での呼びかけ、千七百二十三か所のポスター、マスコミの報道、選挙公報、政見放送、立会演説会、毎朝毎夕の駅頭演説、一日平均二十回の街頭演説と百回のスポットなど、一つひとつ運動が着実に積み重なっていく中で、様相は一変していった。

中盤からは、運動員の一人ひとりが、確実な手応えを感じとれるようになつた。手伝いを申し出てくれる人、激励の電話をくれる人、立ちどまつて演説をきいてくれる人、電車の中で熱心にビラを読んでくれている人、カンバをしてくれる人、事務所をたずねてくれる人……。決して爆発的ではないが、人の輪が日々大きなものになつていくのが感じられた。カンバも十二月二日、ついに目標額の四百五十五万円を突破した。

食品公害問題など、それぞれのテーマを軸に、いろいろな場を通じてたたかいを組んでいく市民運動は、リーグ戦に似ている。一方、選挙は明らかに政治運動である。その意味で、選挙はトーナメント戦に似ている。一つひとつの戦いに確実に勝つしていくことが至上命題である。それは状況に対する私たちの責任である。

今回の選挙戦に突入する際、候補者菅直人にとって、このトーナメント戦に勝ち残れるかどうか

が最大の関心事であった。もちろん、この場合の“勝つ”は、“当選”だけを意味しない。今回の運動には三通りの結果が考えられた。第一は、運動が大きな拡張をもち、結果として当選が獲得される場合である。これは、すばらしいことではあるが、その責任の大きさ、その後にやるべきとの多さ重大さを考えると、身のひきしめる思いがする。第二は、当選は果たしえないが、私たちの運動の趣旨がかなり多くの人に伝わり、共感の輪も大きく拓がり、これまで続けてきた運動をさらに大きくなうことができる場合である。そして、何としても避けなければならないのは第三の、選挙に大敗を喫した場合である。この場合は、これまで着実に石を積んできた運動にも明らかな支障が生じることになる。トーナメント戦に勝ち残るとは、第三の場合を除く、第一、第二の場合を指している。

中盤戦からの急激な盛り上がりを生々しく実感することができた菅は、吉祥寺に向かう選挙カーに揺られながら、確実にそのトーナメント戦に勝ち残ったことを確信していた。

午後七時、選挙カーは吉祥寺駅北口に到着した。

最後の街頭演説

中央線吉祥寺駅周辺は、この数年間に大きな変貌をとげ、新宿副都心にならつて副都心と呼ばれている。駅前が再開発され、いくつかのデパートが新規出店したほか、ロック文化発祥の地として、若者たちから“ジョージ”という愛称で呼ばれる、活気にあふれた街である。師走の土曜日午後七時、雜踏する副都心の駅頭に、選挙カーと三台の伴走車は到着した。ここで一時間にわたった。

選挙戦最後の街頭演説をするのである。

吉祥寺駅北口には、勤め帰りの人たちと、商店街からあふれてくる人々が入りまじり、人の流れの渦をつくっている。一人でも多くの人に立ち止まって欲しい、一人でも多くの人にビラを受けとつてもらいたい、一人でも多くの人に耳をかたむけてもらいたい。泣いても笑ってもあと一時間なのだ。

選挙カーと伴走車に分乗してきた十五人の運動員が、近くの商店にあいさつに走る。「お騒がせしますが、よろしくお願ひします」

選挙カーの上には、この期間中ずっと私たちの運動を積極的に支援してくれた全国サラリーマン同盟代表の青木茂氏と、菅候補が並ぶ。選挙カーの前に机が置かれ、「カンにカンバを！」とかかれたカンバ用のアキカンがセットされる。近所へのあいさつを終えた運動員たちが、残り少なくなつたビラを手にして、バス停に並ぶ人たちや、買物帰りの人の渦の中へ散っていく。

司会の片岡がマイクを握り、選挙カーの脇に立つ。この二十日間、片岡も菅と同様、幾度となくこうして有権者の前に立ち、人々に語りかけてきた。やっと最近、聴衆の様子をみながら語るべき



内容の力点を変えてみたり、候補者や応援弁士の演説をききながら、それに対する人々の反応を冷静に判断できるようになってきていた。そうした判断を通じて、演説者の時間を調節したり、順番を入れ替えたり、内容に注文を出したりしてきた。「司会役というのは、よくいえばディレクター、悪くいえば敵役だな」と、片岡は笑う。

「ある新聞のサンプリング調査によれば、菅直人に対する支持票は大きく拡がりつつあり、菅の推定得票のマキンマムと、最下位当選者の推定得票のミニマムとは完全に交差しているそうです。この二十日間の選挙戦を通じて菅は確実に当選圏内に入ってきてます。一人ひとりの市民の意志的な投票行動によって、市民政治勢力が誕生するのも決して夢ではありません」と訴える片岡の呼びかけで、最後の街頭演説は始まった。

菅がマイクを握る。

「……ロツキード事件は、私たちの前に、あまりにもみにくい現実政治の実態を明らかにしました。五億円という大金が、車から車へいとも簡単に手渡される。このような、私たちの市民常識では考えられないような行為が平然と行なわれ、政策をねじまげていく。……ロツキード事件を契機に、こうした自民党への批判は、その極に達しています。しかし、それにもかかわらず、野党に対する市民の期待感が沸き起こらないところに、今日の政治不信の根の深さを見ることができます。……いま新潟では、田中角栄が、あの橋も、あのトンネルも、みんな俺がつくった、と有権者の前で自らの地元利益還元能力を誇示しています。明日の投票日、越山会の人たちはおそらく棄権をすることもなく、田中角栄に一票を投じるでしょう。一方、都市におけるいわゆるインテリ層と呼ば

れる人たちは、「あれは悪い、その原因は××にある」といった認識をもちながら、政治不信に傾斜しつつあります。

しかし、皆さん、否定論理からは何も生まれません。……国政分野、特に衆議院においては、政党政治という枠に妨げられて、私たち市民は、身近に参加の場をもてないでいます。私たちはいつも、政党が提示したメニュー、すなわち候補者の中からそのいずれかを選ぶという投票行為に限定されてきました。私たちがいま展開しているこの選挙は、選挙運動自体に市民が参加する“市民選挙方式”です。私たちの選挙事務所には、日一日、たずねてくる市民の方たちが増えてきました。私たち、この運動を通じて、大きな拡張を感じています」

菅候補の最後の演説はつづく。「市民選挙」のもつ意味の大きさを語り、「市民運動と自治行政との連動」「地方分権の推進」を述べ、いまひとつこの政策として、「都市化社会におけるシビルミニマム策定の重要性」「企業献金の禁止」の必要性について説いていた。足をとめて聴いてくれる人が目立つ。

「明日の投票日、皆さんの意志表示のチャンスとして、ぜひ投票所に足を運んでください。私たち一人ひとりの市民の意志表示が、腐敗し、硬直化した現在の政治を転換する第一歩です」

菅は演説を終えた。

その日、事務所では

この日朝六時、選挙事務長の田上等（二十六歳）は、連日泊り込んでいる選挙事務所で目覚めた。

選対ですっかり有名になってしまった、例のシマシマパンツ姿である。

選挙事務所は、この数年、菅たちが学習塾をやっているマンションの一室である。作業台に机、簡単な応接セット、それに三台の電話が事務所の什器である。どことなく、大学のクラブ室然としたこの部屋に、連日四～五人が寝泊りをした。菅の自宅に三～五人、結婚相談所をやっている西川信枝女史（六十六歳）宅に三人、この三か所が運動員の宿泊所である。

すべての情報を集中させておくこと、それが事務長田上の仕事である。そのため、田上は、この事務所で毎晩最後の一人までつき合はねになり、連日の睡眠時間が、四時間弱になってしまふ。毎朝モーニング・コールが入るのだが、受話器はとつていながら、「おでんがあるからだいじょうぶ」などと、支離滅裂なことを口走ることもしばしばだった。選対でのそれぞれの仕事は、各人に分担され、ほぼ自動的に進行していく。そうした中で、田上の一日は、人と会い、喋りつづけることで終始した。

朝六時半、標旗や腕章などの選挙七つの道具、ビラ、カンバ用のカン、カンバ帳、カンバ用の小机、自主開発したライトと発電機、候補者用造花、地図、スケジュール表、弁当、お茶、アメ、毛布、カイロなど一式を積み込んで、選挙カーが出発する。ここまでが、事務所の早朝作業である。この日までに、三万五千通のハガキの宛名書きなどの活動はすべて終了していた。だから、最終日の選挙カーを送り出してしまうと、ホーッとした雰囲気が流れた。

さて、この日、事務所の三台の電話は、一日中鳴りっぱなしになってしまった。運動員の友人たち、あちこちで私たちの運動を支援してくれている人たち、そして、未知の人々からの激励の電話

みんな散っていった

午後八時半、すべての運動日程を終えた選挙カーが事務所前に戻ってきた。

二か月間にわたる寝泊り態勢からやっと解放される田上は、早々と荷物を片付けはじめている。候補者の菅には、二本の取材が入っていた。候補者は、よく語った。「運動として拡がった」「とも直接に知らないところでも、こうして人の輪が拡がりつつあることが実感された。



マスコミの取材に対しては、わかつてもらうままで徹底的に話した。

である。「きっと、当選しますよ」「むすこにも電話をしてやってください」「私も応援してますよ」「おふくろががんばってます」「友だちにビラを渡したいんですけど」といった具合である。私たちが直接に知らないところでも、こうして人の輪が拡がりつつあることが実感された。

みんな散っていった

午後八時半、すべての運動日程を終えた選挙カーが事務所前に戻ってきた。

二か月間にわたる寝泊り態勢からやっと解放される田上は、早々と荷物を片付けはじめている。候補者の菅には、二本の取材が入っていた。候補者は、よく語った。「運動として拡がった」「とも直接に知らないところでも、こうして人の輪が拡がりつつあることが実感された。

上だった」「自分たちもびっくりするほど積極的に動いてくれた人がいる」「みんな、決してシラケてはいない」「人々の間に、自分で判断しようとする雰囲気が感じられた」「運動として、次につないでいる自信がもてた」

選対最後の運動として、十時半まで電話作戦を展開する予定でいたのだが、「最後の夜間電話は印象がよくないのではないか」という意見が多く、九時半をもって、すべての運動を打ち切ること

とした。私たちの選挙事務所は、午後九時半に解散した。

菅は自宅に帰り、二十日間禁酒していたウイスキーを飲み、そして寝た。運動員は、三々五々、飲みに行ったり、マージャンをしに散つていった。おそらく、こんなにあけらかんと、早い時間に解散した選対は、どこにもなかつたにちがいない。

準備期間を含めてこの二か月間、選対にはたくさんの人間が出入りした。昔からの運動の仲間、今度の選挙ではじめて出会つた人たち、それぞれの人間のパーソナリティが重なり合いながら、一つの雰囲気が選対の中にできあがつてゐた。運動員一人ひとりが、人間について、人間同士のつながりについて、政治的状況に主体として参加するということについて、いま、ひとつの大好きな「納得」や「認識」をもつことができたよう思う。

選挙という“非日常”は終止符を打ち、明日からは、みんなそれぞれに、自分の“日常”の中に戻つていく。ともかく、私たちのたたかいは終わつたのである。

投票日

十二月五日、日曜日。投票日である。運動期間中は、日曜日に一番たくさんの人間が事務所に集まつてゐたのだが、この日、選挙事務所はまつたく閑散としていた。

運動にかかわつた者にとって、久しぶりにめぐつてきた“自由な日曜日”である。ともかく、みんな十二分に朝寝を満喫した。中には（昨晩から明け方にかけて）酒を飲みすぎて、二日酔いになつた者もいた。自宅で本を読んだり、彼女とデートを楽しんだり、各自が自由に、選挙期間中やり

残していた、ささやかで日常的なことに時間をつかった。期間中あれほど忙しかつた事務長の田上も、「一応、この日から終戦処理態勢に入った。仕事がたくさんあるのはわかっているが、ボケツとしていたかった。何か、ボケツとしている日のようにさえ思えた」と語つてゐる。

候補者の菅は、昼過ぎに起きだした。期間中同様、菅の自宅には学生連中が泊り込んでいた。みんなとにぎやかな昼食をとり、妻伸子（三十一歳）と一人息子の源太郎（四歳）と共に投票所へ向かう。ほとんどの有権者が、菅直人を知らないように思われた。割に落ち着いた気分の中で、自分の名前を投票用紙に書いた。

夕方五時、選挙事務所にボツボツ人が集まつてきた。三十人の運動員が集まつて「座談会」が開

かれた。みんな、久しぶりに自由な時間をもつたせいか、たいそうリラックスした雰囲気の中で座談会はすすめられた。



打ち上げコンパ。インターナショナルから人生歌のレパートリーは広い。

運動部隊の中核的な役割をになつた早稲田大学雄弁会の連中は、「会の仲間の中には、新自由クラブの応援を行つた者もたくさんいるが、自分はこの選対にきてよかつた。これからもここで活動をやつていける確信がもてた」と述べた。「これで会社に戻つて、いままでにやれなかつた部分や、少しだえた関係を復元していかなくては」とい

うサラリーマンの感想も述べられた。

この運動に関する反省点も数多く語られた。「たしかに何度も議論は繰り返してきたが、まだツメの足りない点も多かった」「自分は少し考えが異なつており、そうした点を運動の中ではつきりさせたかったが、忙しすぎてそのひまがなかつた」

座談会のあとで、ささやかな打ち上げパーティがもたれた。

投票日のこの日、話題の中心は、今度の選挙のことであり、期間中にあつたエピソードの交換であつたのだが、不思議と菅直人の「当落」については、ほとんど語られなかつた。おそらく、みんなに「当落」への関心がないわけではなかつた。しかし、この運動が「菅直人の選挙」ではなく、構成員一人ひとりにとっての「政治参加」であり、「運動」であつたということなのだろう。

七万一、三六八票——次点

十二月六日、月曜日。開票日である。候補者の菅は、朝十時半に一回目の開票速報を自宅のテレビでみた。開票率四%，菅直人一、八〇〇票、得票率七・五%，三位との差が大きく離れており、「こんなものかな」「きびしいものだな」と、ちょっとがっかりしたという。一人で事務所に向かう。

選挙事務所では、事務長の田上をはじめ数人のメンバーが、昨晩の打ち上げパーティの残りもののおでんをつつきながら開票速報をみていた。票の伸びはいまひとつなのだが、事務所の中に悲愴感はない。開票率と得票をにらみ合わせて各自が頭の中で推定得票をはじいてはいるのだが、その

数字は口をついてでない。どこかあつけらかんとして、何ということもない冗談と笑い声がたえない。参謀の片岡も、「不思議と開票結果はあまり気にならなかつた」という。

開票率が徐々にあがっていく中で、供託金没収をうけないで済む票数は突破した。得票率が次第に上がるのをみて「明日の昼頃には当選するな」という菅の冗談に、事務所中が湧いた。片岡は、この選挙に際してお世話になつた人たちに次から次へと電話を入れている。電話の相手はみんな開票速報をみていた。みんなが語りたがつた。一人ひとりの中で、この運動が大きく根づいていることを、片岡は感じとつていた。

この日、東京七区の十五開票所に、十五人の開票立会人が選対から派遣されていた。立会人のすべてが一様に感じたのは、「菅直人」の得票の伸びぶりに他の候補者の開票立会人が驚き、興奮していたことだという。

三鷹市の開票立会人をひきうけてくれていた岩附茂氏（二十四歳）は、昼頃までずっと「菅」がトップで、票数がたるたびに開票場全体がワーッと湧いて「痛快だった」という。保谷市で剣道の先生をしている高倉巖氏（四十四歳）は、投票用紙に書かれた字を他候補のものと比較して、「菅直人」の場合、非常にていねいに書かれているも

開票速報(5.00)班	
1. 福田篤泰(自)	確
2. 長谷川正三(社)	確
3. 大野きよし(公)	確
4. 工藤あきら(共)	確
5. 菅直人(獨)	
6. 川田章(國)	
7. 早川輝道(國)	

次点——しかし勝利の造花が飾られた。

附茂氏（二十四歳）は、昼頃までずっと「菅」がトップで、票数がたるたびに開票場全体がワーッと湧いて「痛快だった」という。保谷市で剣道の先生をしている高倉巖氏（四十四歳）は、投票用紙に書かれた字を他候補のものと比較して、「菅直人」の場合、非常にていねいに書かれているも

のが多かった、という。

「政治に市民常識を！」をスローガンに戦った今回の衆院選であった。すべての運動が自分たちの手でおこなわれた。未知の人たちからの多くの支援と運動参加があつた。こうした中で、私たちは終始、運動姿勢をくすすことなく、政策を述べ、有権者に判断を迫つていった。私たちの運動が、市民運動から明らかな政治運動に転化した今回の衆院選であるが、私たちは「トーナメント戦」に勝ち残り得たと確信している。今回の選挙が一つの結節点として、次なる状況下での次なる運動につながっていく。私たちにとって、この二か月間は、長くもあり、そして短くもあつた。ともあれ、一つの節は終えたのである。

東京七区、有権者総数百万二、一三一人 投票率六一・八四%、「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」推薦革新無所属候補、菅直人（三〇）、七万一、三六八票（得票率一一・七%）――次点。

私たちは、敗北した。

“指定席” 東京七区に立つ

“東京七区から菅直人氏出馬へ”

東京武藏野市の市民グループ「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」は十五日、今度の衆院選で東京七区から菅直人氏（三〇）を出馬させることを明らかにした。菅氏は二十三日正式に立候補表明するが、一昨年の参院選で市川参院議員を“かつぎ出した”市民運動グループのリーダー。

（毎日新聞 五十一年十月十六日）

ロックード政治を許すな

五十一年二月六日に表面化したロックード事件の衝撃は、私たちを今回の総選挙に向かわせる大きな力となつた。それは、一方では、長期にわたり政権を独占してきた自民党が国家権力を私物化し、カネと人事権を駆使して、政策決定を金もうけの道具化してきた構造を国民の前に明らかにした。そして、他方では、長期単独政権という原因づくりに文字通り加担してきた既成野党の問題性が浮き彫りにされたのである。

国会やマスコミが精力的に事件の究明を進める中で、私たちのグループでも、何人かが個々にロッキード事件糾弾の運動に取り組んでいた。三月頃から「理想選挙推進市民の会」はロッキード糾弾キャラバンを全国に繰り出した。五月末からこのキャンペーンに参加した朝倉剛一は、私たちの機関紙『シビルミニマム』同年七月号に、こう記している。

二十か所に及ぶ青空演説会、福島、山形における地元青年団との懇談を通して我々が得たものは、積極的にチラシを受け取る姿勢にみられる関心の高さと、「ロッキード事件は確かに重要な国政の問題であるが、ロッキード問題は地元にある。それを肅正するには、義理人情と金で縛られる村の選挙をかえることが第一だと思うが、それができない」というもどかしさであった。しかし、我々の中にもあるこの種のもどかしさを共有することにより、連帯感を深めることができた――。

また何人かは、『週刊ピーナッツ』、日韓連帯連絡会議などの集会、デモに参加し、あるいは自分の住んでいる町で、「事件糾明に国会頑張れ!」、という請願の署名運動などに取り組む者もいた。

五月のある日、菅直人と片岡勝は、日高六郎氏に会った。その際、ロッキード後の衆院選挙の話題の中で、日高氏は次のような提案をした。

「フランスでは、インドシナ戦争末期に、急進社会党という一、二議席しか持たぬ党からマンデス・フランスが首相に立候補した。そして、自分が首相になれば、何週間かのうちに必ず戦争をやめる。それが出来なければ、首相を辞任する」という公約のもとに当選した。この例から考えたのだが、

かなり著名で市民派的な人を、野党の統一候補者にするために立候補させられないだろうか」とこの話を、菅らは二院クラブの市川房枝氏、青島幸男氏らに伝えたが、「野党各党にそのようなコンセンサスを作らせるることは無理であろう」ということで、そのまま立ち消えとなつた。

投票の「受け皿」を

さまざまな事件糾弾の運動は、それが展開するにつれて、年内には必ず行なわれる総選挙に向けて、自民党に大きなダメージを与えることこそ最も有効な批判を構成する、という論点を次第に強めていった。

そのような状況の中で、菅はこう考えていた。



選挙区を離れ新宿へ。東京7区だけではなく、田中角栄との戦いでもあった。

「ロッキード事件糾弾集会などに出席したりする」と、その発想の仕方に異和感をおぼえる。彼らの発想は、「自民党をつぶす」というものだ。しかし「つぶす」手段を明確にしないデモや集会をいくらやつても、実際につぶれるものではないだろう。選挙で何らかの対案を示さなければいけないのではないか」

八月にはいり、彼は各種の集会でこの趣旨を呼びかけた。しかし、その反応は必ずしも積極的な

ものではなかつた。これに関連して、『シビルミニマム』五十一年九月号で、彼はこう述べている。

世論、マスコミ、市民運動などのこうした激しい追求に対し、自民党は国民の支持という免罪符を得ることにより、全てを解消しようと、選挙体制作りにやつきになつてゐる。しかし、自民党の内紛がどういう形で收拾されるにしろ、ロッキード事件の原因が自民党に長期単独政権を許してきたことにあるとすれば、今度の総選挙では、自民党を政権の座から引きずり降ろさなくてはならない。

政党サイドの総選挙準備が進む中で、ロッキード事件に怒りを感じている人が圧倒的に多いにもかかわらず、市民運動の中では、総選挙自体への提案はまだ明確な形をとつてない。これは本来、自民党にとって代わるべき既存の野党に信頼が持てないこと、「選挙」に対し「権力志向」を感じてためらう市民運動が多いことによると思われる。しかし、「選挙」を、政党候補者が票を集めの運動でなく、二年前の市川房枝さんを推した参議院選で一部実現したように、市民が自己の政治的意志を表現する場として積極的に再生してゆくことが、これから市民運動においては必要である。

こうした観点から、ロッキード事件に強い憤りを覚えてはいるものの、既存の野党には投票する気になれないという多くの市民が、投票という行為でその意志を表現し、運動に参加できる場を作るため、"投票の受け皿"となる候補者を各選挙区で推薦し、立候補させること、すなわち「ロッキード事件に怒り、かつ既存野党に信頼を持てない市民の"投票の受け皿"を作ること

を提案したい。

単なるアンチか、新しい運動か

このようなことを考えはじめた私たちに、青島幸男氏秘書の青野氏から次のようなアドバイスがあつた。

「君たちは、こうした行動を、ロッキード事件とそれを起こした自民党への怒りの表現として起こうとするのか、それとも君たちをも含めた新しい市民政治勢力の旗上げととらえるのか、それをはっきりさせたほうがよい」

私たちのグループの中でも、前者をより重視するもの、後者を強調するものがいて、議論になつたが、結論は、二つは矛盾するものではないこと、そして戦後の"保革体制"の構造汚職として明らかになつたロッキード事件に対し、後者のようなとらえ方をしなければ、建設的な対案とはなりえない、ということであつた。

私たちの手で

いろいろな集会の席上で、また、大阪・京都・神奈川のいくつかの市民運動グループに会つて、菅、片岡、田上らは、"受け皿構想"——市民選挙の呼びかけを続けた。そんな呼びかけに対し、多くの人は、「もっと具体的な話にしてから持つて来てほしい」という反応を示した。たしかに"やるべきだ"というだけでは説得力を持たない。いよいよ私たち自身がそのための具体的行動を起こ

すかどうかの決断を迫られるときが来た。

市川房枝氏の選挙の体験から、私たちは心理的に国政レベルの選挙に対する距離感が少なかったのだろう。そして、市川選と昭和五十年の武藏野市議選の二つをくぐり抜けて来たメンバーも多く、片岡勝のように「選挙が楽しくてしようがない」などと公言してはばかりない男もいる。春以降、「この絶好の状況の中で何もしない手はない」とはやる心を押さえてウズウズしていた青木守は、「この辺で一発デカイ事をやらん」と、菅たちをおおり続けた。

大阪の堺市で、仲間と『こんにちは新聞』という地域新聞を作っている長谷川氏は、こういつて私たちを励ました。「選挙の話は、おもしろいし、趣旨には同意するが、自分たちの力量や運動の現状から考えて、自分たちの手で候補者を立てるのは無理だ。それに、そのような運動は東京の方がやりやすいのではないか。もし東京でやるのなら協力する」

私たちが呼びかけた他のグループも、おおむね事情は似かよっていて、自分たちはやらない（あるいは出来ない）が、「全体の流れとしては君たちのような動きは必要なだから期待しているよ」という声が多くた。こんなことなどから、田上は、「私たちは望まれているんだな、という確信を深めた」という。

私たちが自ら総選挙にかかる決心を固めたのは、夏も盛りを過ぎた八月下旬のことだった。

仲間から候補者を

「誰を候補者にしようか」。"ヤル"ことを決意した私たちの次の問題はそれだった。

もちろん、市民運動グループへの呼びかけと並行して、それまでも候補者のことは考えてきた。片岡はこう語る。

「あまり有名な人をかつごうという発想はなかった。とにかく全国各地から多くの人に立つて欲しかった。そしてそれは、ロツキード事件の構造と戦う人であることと、既成政党と関係がないという意味で純粹であることを大前提にしていた」

青木茂・全国サラリーマン同盟代表委員は、相談に行つた私たちにこう答えた。

「社会的な地位や業績のある人間が、今回のロツキードに対決して出馬する、という状況ではない。むしろ処女性を持つた候補者が出て行くべきだ」

また市川房枝氏からは、「若い人から一人、著名の人から一人立てる、ということを考えたらどうか」というアドバイスがあつた。

グループの仲間から候補者を立てる、という大それた話が、急に現実味を帯びてきた。そうなると、いろいろな条件から考えて、衆院選の候補者になりうる者が、私たちの中にそう何人もいるわけではない。誰の胸の内にも、菅直人や朝倉剛一の名前が浮かんでいた。二人とも、候補者としての適格性は充たしていると思われ、また菅は弁理



士として特許事務所に勤務、朝倉は市川房枝議員の秘書という身分であり、終身雇用制の中のサラリーマンよりは、自由のきく身であった。

九月十五日、これまで選挙の話にはあまり加わって来なかつたメンバーも含めて二十数名が集まり、ミーティングを持った。その時の経緯を、『シビルミニマム』五十一年十月号は次のようにレポートしている。

今の政治状況に対し、出席者の全員から何かをやらなければいけない、という発言が出され、選挙が最も有効かどうかについて、まず議論があつた。他にも意見広告などの案が出されたが、単なる否定型の運動から参加型の運動にしなければならないとの意見が強く、選挙によつて政治を我々市民の手に取り戻すことを呼びかけようと決めた。

しかし、有機農業班のメンバーからは、稻刈りなどの援農や、無公害石けんの販売などのスケジュールが一杯で忙しく、手の空いてる時にしか手伝えないとの主張があつた。これは個別テーマを中心とした市民運動と、国政レベルの運動を共に必要とは考えるものの、順序としては、やはり個別のテーマや地域の問題を優先し、継続していくことが肝要であるという認識によるものだつた。だが、多くのメンバーからは、やはり現在の状況において、この衆院選で市民から候補を立てる必要ではないか、との意見が出され、結局、選挙を“やる”ことでグループ内のコンセンサスが得られた。

これは敬老の日の休日、調布市に住むグループの一人、吉田光孝（二十八歳）の家で、真っ昼間、四、五時間かけて行なつた討論の結果であつた。

そして、複数の候補者を立てること、具体的には東京七区に菅直人、四区ないしは十区に朝倉剛一を立てるのを同時に決定した。「複数の候補者を」というのは、単に一人の人間、たとえば菅なら菅を国会議員にするための運動ではなく、もっと大きな市民政治勢力をめざした運動の一環であること示したかったためであり、また物理的な運動の拡がりをねらつたためでもあつた。

力量的に大丈夫なのか、という点は誰もが考え込んだところだが、それをいえば、たとえ候補者が一人であつても、衆院選を戦うだけの力量すらも、選挙の常識論でいえば、今の私たちにあるわけではない。テーマが共感を呼べるもので仕事があれば人は集まる、というのは、これまでの運動で経験したところである。私たち得意の楽観論で「走り出してから考えりやいい」とばかりに、考えて仕方のないことは考えないことにした。

ところが残念なことに、候補者“候補”的朝倉剛一は、十月三日、個人的な理由から「候補者というかたちでこの運動に参加することは出来ない」との意志を明らかにした。

この日のうちに、あくまで複数の候補者を立てるために他のグループに呼びかけを続ける。しかし、もし適当な人が見つからなくて、結局、菅一人といふことになつたら趣旨をまつとうできない。その場合はどうするかについて議論を続けた。その結果、呼びかけを統けると共に、たとえ一人だけでもやろう、という方針を固めたのであつた。

全国で市民選挙を

必要なのは、私たちと同じような市民選挙で戦う候補者を、全国に一人でも多く立てる事である。「田中」の居直りに対決するため、今こそ全国で市民選挙に立ち上がるう！」という次のようなビラを、全国五十余の市民運動グループに送ると共に、スケジュールの可能なグループには、直接話をするために出かけて行つた。

今回の選挙が「既成政党のいずれかを選ぶだけの選挙」となれば、市民の意志表示の場となり得ず、ますますシラケが深まり、拡大するだけである。選ぶべき政党を持たない市民運動グループが選挙に積極的に参加して自分達の仲間を立候補させることこそが、こうした状況を打破するため、今必要なではないだろうか。

こうした観点から、一昨年市川房枝さんを参議院選にかつぎ出し、その後もそれぞれのテーマについて市民運動を続けて来た我々のグループは、仲間の中から候補者を推薦し、東京第七区で闘うべく準備を進めていく。我々だけでなく、全国の多くの市民グループが、自民党に対決する市民選挙に起ち上がる事を強く期待する。

こうした市民選挙の拡がりが、これまでの個別テーマ毎の市民運動や自治体における直接的市民参加にとどまらず、国政選挙においても市民参加による新しい政治状況を生み出す第一歩となることを確信する。

あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会

しかし、本当に残念なことであつたが、以前に「具体的な話になってから持ってきて欲しい」といったグループも含めて、候補者を立てて衆院選に臨もうというグループは、ついに現われなかつた。

私たちは、名もなき菅直人一人をかついで衆院選という大きな戦場に切り込むことになつたのである。

どうする？ どうなる？

およそロッキード事件が表面化したあとの数か月間ほど新聞が面白かったことは、かつてなかつたといつていだらう。青野氏は「みんなが茶の間でのすごい関心をもつて、テレビ・新聞・雑誌を見ながら判断しようとしている」といつた。

そのような状況の下で、みんなの判断に耐えうるもの提示することができれば、ある程度のところまで運動が拡がり、支持が得られる、という確信を私たちは持っていた。逆にいえば、私たちが惨敗するというケースは、運動の趣旨そのものが、その状況に全く適合していないとき以外には考えられなかつた。

菅はこう語る。

「以前、より良い住まいを求める市民の会で、市街化農地の宅地並み課税推進の運動をしていたと

きに、講演会を企画したことがあった。そうしたら、都留重人氏、市川房枝氏、青島幸男氏、青木茂氏といった鋤々たるメンバーが参加してくれた。このとき、テーマが適切であれば共感が得られる、ということを痛感した」

四十九年の市川房枝氏の選挙でも、あの状況の中で打ち出したテーマが適切だったからこそ、人も金も集まり、そしてマスコミの協力も得られた。またこのとき、「自分たちの感覚を信じて行動を起こしても通じるんだ、という確信をもつことができた」と田上はいう。

三万票、そして供託金

とはいものの、私たちの運動が、限られた選挙運動期間の中で、どれだけの人々に理解され、それが何票に結びつくのか、ということになると、まったく雲をつかむような話であった。

青木茂氏は私たちにこういった。

「立候補しようと思うがどうだろう、という相談なら、無理だからやめろといっただらう。立候補を決めてから相談に来たので、がんばれ、出来るだけ協力しよう、というほかなかった」

また、「基礎票もゼロに等しく、カネも無し、では五百票しかとれないぞ」という人もいた。実際、私たちとしても、選挙戦中盤までの最大の関心事は、『 $(\text{得票数} \times 1/5) \times 1/(\text{倍数})$ 』の供託金没収点——（七区の場合、投票率六〇%で約三万票）を超えられるかどうかであった。当落を云々するどころではなく、いかに泡沫候補扱いを、特にマスコミからそうされることを避けるか、ということを、マジメに心配したものである。

この新聞、どの雑誌の選挙予想を読んでみても、東京七区には、「自社公共の指定席選挙区」「全国有数の無風選挙区」といった見出しがついて回っていた。それは十月中旬、菅が立候補を明らかにした後もまったく変わらず、四候補の名前の上には当選確実を示す二重丸がきれいに並ぶのが常だった。

市民運動から国会へ

私たちは、「市民運動から代議士を送り出す」という明確な論理を、最初から持っていたわけではなかった。自治体、特に市町村レベルの議員選挙なら、市民運動の要求を掲げて立候補する、という論理が通りやすいし、実際にそうした経験もしてきた。だが、国政というのは、市民参加を実現する“場”としてはきわめて遠いところに位置している。私たち市民の感覚でとらえた問題意識や要求を国政に伝えようとすると、そのルートがきわめて貧弱なものしか用意されていないことを知って唖然とする。マスコミが記事として取り上げるのを期待するとか、政党、議員に陳情するとかの方法しかないものである。

ところが、マスコミが必ず取り上げるという保証はない。記事として面白い場合に限られてしまう。それに、市民運動の記事は社会面扱いだ。政治面、つまり政策決定過程の動きの一つとして取り扱われることは皆無であろう。政党議員ルートも、市民感覚から問題性をとらえる体質が欠如しているのが実状であり、これこそ私たちの問題とするところである。

こうした事情が国政を遠いものにしてしまっており、市民運動グループが直接国政に参加する

いう発想を持ちにくくしている。それには運動グループ側の事情も関係している。

地域性の強い住民運動のグループが、自分たちの地域を越えて運動を拡げていくのは難しい。これは市議選を行なったことのあるグループに共通の実感のようだ。もう一つ、市民運動と選挙の、運動としての性格の違いも無視できない。市民運動というのは、コツコツと、自分の生活の範囲内で、やれるだけのことをやるという側面が強い。しかし、選挙はそうはいかない。何か月かの間、自らを燃えたたせ、やるべきときには日常的な生活範囲を越えてでもやらなければならない。

多くの市民運動は、専従など持たない、純粹なアマチュア集団である。そして市民運動が個別のテーマを深く追求するのに対し、選挙、特に国政選挙では、国政全般にわたる態度を表明することが要求されるので、市民運動に決してなじみやすいものではないだろう。

既成のパターンを打ち破ろう

候補者選びの過程で、現在の政治がいかに特殊化しているか、ということに、私たちは改めて気づかされた。どの政党の候補者も、政党組織の内部や主要な圧力団体の出身者で占められている。どちらにしろ、市民感覚にあふれた政党や圧力団体など存在しないのだから、候補者の資質がかたよってしまうのは目に見えている。

「政治家の質がきわめて悪い。おれは議員になるより社長になる方がたいへんだと思っている」と片岡はいう。

どちらがたいへんかは別として、誰もが経営者と同様に、いや、むしろそれ以上に、政治家には

優秀な人材が必要だと考えるだろう。しかし、政治家となるパターンが特定化されることによつて、優秀な人材が政治家になる可能性は少なくなるし、かりに有能だとしても、ある領域に偏つた能力をもつた議員ばかりが生まれることになる。しかも、恐ろしいのはそれだけではない。政治が特殊化され、一部の人間のものとなるということは、他の大部分の人間たちを“観客”に追いやりうることもある。その結果、政治は“あいつら”がやるもので、“おれ”は関知しない、といいう態度を生む。いくら能力があり、知識が豊富であっても、観客である限り有効な力とは成りえない。民主主義は機能しえない。

市民運動は、まさに“観客”であることを拒否した市民の運動である。そして、運動への参加者は決して特殊化していない。問題意識と運動のための物理的時間さえあれば、誰でもやれるものだ。そうした運動の中から候補者を出す、そして代議士を国会に送るというのは、きわめて意義深いことであるに違いない。

今回の衆院選を、そのための“足がかり”にしよう。既成のパターンを打ち破り、政治状況を変えるための運動の一つの過程にしよう。選挙を通じて、私たちの運動の趣旨を拡めたい。それには当選したい。準備のおくれで当選がかなわない場合でも、一応の成果をあげなくてはならぬ——これが選挙戦直前の私たちの姿勢であった。

名もなく組織も金もなく

独自に態勢が作れるか

さて、菅直人を候補者として衆院選を戦うことに腹を決めたものの、前途は不安に満ちていた。「国政選挙」については二年前（昭和四十九年）の市川房枝選挙の経験があるとはいっても、今回の選挙は、それとはかなり質の違うものである。『市川房枝大明神』のもとにみこしをついて突っ走った前回と、私たち自身の仲間を候補者にした今回とでは。

少なくとも、前回は名前があった。その名前のもとに、金も人も集まるだろうという予感があつたし、また実際に集まりもした。ところが、今回の選挙ときたら、まず名前（看板・知名度）が、そして組織（地盤）が、金（カバン）が、いわゆる選挙に必要といわれる『三バン』のすべてが、初めから欠落していた。

それが私たちの手にないのなら、そして、どうしても必要なものならば、私たち自身でそれを作り出して行くほかはない。あるいは、それなしにでもやって行けるような、別の方法を考え出さなくてはならない。

背後に不安感を引きずりながら、それでも持ち前の楽天的な思いに助けられて、とにかく市民選

挙への挑戦は、五十一年九月下旬、その胎動を始めようとしていた。

名前をどうしよう

私たちには、候補者の知名度云々を問う以前に、運動母体となるグループそのものの名前がなかつた。

九月十五日のグループの集会で、今回の衆議院選挙を市民運動の延長線上に置いて行なおうとう同意が得られたあと、全国の市民運動グループに、その趣旨を訴えるための「呼びかけ文」を送つた。

九月の下旬、菅、片岡、田上、朝倉の四人が頭を突き合わせて「呼びかけ文」に載せるスローガンを考えている時に、突然、誰かがこうつぶやいた。「あれっ、グループの名前がない！」

そうだ、私たちのグループには、定常的な名前がなかった。仲間うちで話すときには、いつも「このグループはねえ」といった調子で事は足りており、マスコミが扱う場合の呼び名も、「青年グループ」「草の根市民運動グループ」「参院選で市川房枝氏をかつぎ出した若者たち」などと、特に定まつたものはなかつた。

何か大きなイベントがあつて、手続き上、あるいは見てくれ上、名称が必要になつたときに、そのつど「市川房枝さんを勝手に推薦する会」「だから私達は田中栄さんを推薦します市民の会」などという、どこかのテレビ局も顔負けの長い名前を、みんなで考えていたのである。したがつて、今回も今回なりのイメージを反映した名称を、急いで作り出さねばならなかつた。

こんなとき、私たちがいつもとっている方法がある。それは、「今度の運動を、なんでお前さんはやるんだ」という質問を、お互いにぶつけ合い、その中から出てきたエッセンスをつなぎ合わせて行くというものだ。

今回、他の市民運動グループに訴えるに足るスローガンを掲げるために、名称の設定には少なからず気をつかった。それはまた、この運動の動機の再確認であるといつてもよかつた。なぜ、私たちは力量的な無理と準備不足を承知していながらも仲間を推し出し、今回の衆院選をたたかおうとしているのだろうか。

さまざま、それこそ玉石混淆の答が飛びかかった。それらは、あますことなく、小さな紙片に書き出され、机の上に並べられた。そこでふるいにかけられ、最後に残つたのは、「あきらめないで」と「参加」という二つの言葉。

前者は、無党派層の中に充満している一種のシラケ状態に対し、決してあきらめではないんだ、という悲願にも似た願いから、そして後者は、ではどうしたらよいのかと問われた場合に、自分たちで自分たちの信頼しうるものを作つていけばよいではないか、という積極的な発想から生まれたものである。あとは、この二つの言葉を中心に、うまく言葉をつなぎ合わせることを考えればよかつた。

九月二十九日、こうして私たちは、次のような看板を今回の運動について掲げることになったのである。

『あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会』

何から手をつけよう

さあ、これで運動の先頭に立てるの、ぼりの文字だけは出来上がつた。次はいよいよ実際の選挙態勢を組み立てる番である。

ここで、なぜ私たちが、今回の選挙をやろうとしたのかをふり返つてみよう。

出発点は、ロッキード事件であった。それに対するアンチテーゼとして、私たちは立ち上がり、としていた。しかし、もう一步踏み込んで考えてみると、ロッキード事件の背後には、戦後三十年にわたる日本の政治体質というものが横たわつており、それへの眞の意味でのアンチを唱えるつもりなら、ロッキードだけにこだわらず、市民政治勢力を打ち立てることにこそ力を注ぐべきなのではないか、というところに行きついた。私たちは、その勢力を拡げていくための一つのきっかけになれないものだらうかという発想のもとに、今回の中選挙を決意したのだ。

それならば、当選に必要な一定の票数に達するためには、すでにある人間関係などを頼りに一票一票を確実に固めていくという従来の選挙運動の発想は、私たちとは相いれないものである。私たちが一石を投じることによって、周囲に波紋が拡がつていかねばならない。そのためには、選挙態勢



新しいメンバーがふえて、名札が必要になつた。

の組み立て準備も、"運動の拡がり" ということを念頭に置いてやらなければならない。

こうした発想から、十月三日の、菅直人ひとりを候補者とするという決定のあと、私たちがやるうとしたことは、次のようなことであった。

(一) 学者などの著名人、地域の活動家に会って、私たちの運動の趣旨を理解してもらい、できれば支持、推薦をしてもらう。

(二) (一)の前段階として、選挙区を調査し、どんな市民運動グループがどのような活動をしているか、その内容を知り、私たちの趣旨を呼びかける。

(三)

学生などに向けて、参加を呼びかけるビラをまく。

(四) マスコミに今回の運動の趣旨を訴えることによって、その背後にいる膨大な数の読者に判断の材料を提供する。

ここまでが、「趣旨を拡げる運動」である。一方、実体的な組み立て準備の面では、

(五) 予算を組み、それにしたがって、金の集め方を考える。

(六) 選挙事務所を開く場所を捜し、事務態勢を整える。

(七) 「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」の規約を設定し、政治団体として届け出る。

(八) 選挙で訴える具体的な政策を立案する。

の四項目があった。

これらのことと、すべて、迅速かつ確実に処理しなければならなかつた。公示日の十一月十五日までは、あと約六週間しか残されていない。しかも、運動員のほとんどが仕事をもつていていたため、

とにかく、私たちには時間がなかつた。選挙態勢組み立ての基礎工事完了目標は、十月二十三日。この日、「草の根千円パーティ」の開催が予定されていた。今から振り返ると、それまでの期間は、まさに手さぐりと焦燥感の連続であつた。
この時のようを、菅は次のように回想している。

「田上、片岡、朝倉と私の四人が中心となつてスタートしたが、初めのころは昼間の事務局がないため、連絡が不十分になりがちだつた。日常的な人間関係と情報の共有がないと、思つたとおりに進まない。学生時代からの友人である田辺孝則が、選挙準備を使つていた渋谷の事務所に來たのは、そんなときだつた。

この日は、朝倉の立候補中止に加えて田中栄氏など青空テント・グループの中心メンバーの選挙非協力表明など、いくつかのトラブルが重なつた。進めるべきことが、なかなか進まなかつた。運動のエネルギーが、急速にしぶんでもよく感じられた。田辺は『今となつては、もう立候補はとりやめられないのか』といつて私の顔をのぞき込んだ。いまが一番しんどい時だな、とそのとき思つた」

このように、態勢の組み立ては、内部で予想した以上に困難の連続であつた。が、なんとか乗り切ることができた。以下その経緯を順にみてゆこう。

著名人への呼びかけ

私たちの周辺には、これまでの運動を通じて知り合ったさまざまの著名人がいた。その中で、私たちの運動の趣旨に賛同してくれそうな人、または私たちと近い発想を持っていると思われる人に直接会って、今回の選挙を行なう趣旨を話した。

手ごたえは、全般に好意的であった。運動の趣旨そのものを否定する人はほとんどなく、実際に参加はできないが頑張ってくれ、という反応が多かった。具体的には、篠原一、都留重人、伊東光晴、松原治郎、秋山ちえ子らの諸氏である。その中の一人、松下圭一氏の言葉を借りれば、「これは、市民運動から国政への最初の挑戦である。ぜひとも頑張ってほしい」ということであり、氏は後日、「やっと自分の言つてきたような状況、すなわち、市民の国政への自発的参加という状況が出てきた」と語つた。

賛同の意志を表明するだけではなく、実際に積極的に動いてくれた人も少なくなかった。全国サラリーマン同盟代表委員の青木茂氏は、サラ同をあげての全面支持を約束し、社会学者の日高六郎氏、保健同人主筆の大渡順二氏、慶應大学教授の内山秀夫氏らは、次のような推薦文を寄せてくれた。

青木氏「参議院の二院クラブは、ユニークな政治活動をやつております。衆議院にも一院クラブがあつていいと思う。衆議院に一院クラブをつくり、やがては市民党にまで大きく展開する第一歩として、菅君に期待します」

大渡氏「菅君たちの青年運動の芽は、ぜひ、何としても伸ばしたいと思う。今は、市川房枝先生

は元気いっぱいだが、私たちは市川先生のあとに一日も早くヤング勢力を育てあげて、正義の政治布陣を整えなければならぬ」

日高氏「名もなく、金もなく、組織もない、一人の青年の立候補に注目します。市民運動としての選挙運動の新しい出発を期待します」

内山氏「わが国の政党政治は壊滅している。それはなにも自民党ばかりの問題ではない。市民運動から代表が出ないのはおかしい」

推薦できません（市川房枝氏とのやりとり）

読者の中には、私たちと市川房枝氏とのやりとりを、新聞などで読まれた方も多いことだろう。

たしかに私たちは昭和四十九年の参議院選舉に市川房枝氏をかつぎ出した青年グループだ。今回の候補者、菅直人は、その推薦人三人のなかの一人（他是田上、朝倉）であり、選挙事務長でもあった。選挙後もいろいろな運動を通して協力関係にあつた。今回の運動の場合も漠然とした話の段階から何度も相談に行っており、その時の感触から候補者が具体化した場合には、彼女の推薦を期待していた。

そこで、候補者が決まつた段階で何度も話し合うとともに、参院選立候補要請の時と同様に、グループの十八人の連名による、次のような申し入れ書を昭和五十一年九月二十四日に市川氏に手渡した。

衆議院選挙に際してのお願い

市川先生に候補者となつていただき参議院選挙を共に闘つてから、早や二年余が経ちました。その間、以前にも増してお元気でご活躍のご様子に接するにつけ、「やはり出ていただいてよかつた」とよろこんでおります。

「ロッキード汚職とその原因」

さて私達は、今年二月、ロッキード汚職が暴露されて以来、個人的にデモや集会に出席するとともに、この問題について話しあってきました。ロ事件の解明が進む中で、政治による金もうけと、その金による政治力の拡大という「拡大再生産」が、あれほどまでに露骨に行なわれていることを知つて驚くとともに、自民党を介しての黒幕支配が今でも根強く残つてることに強い憤りを覚えています。

骨の髓まで浸み込んだ自民党の金権体質＝構造汚職を生んだ原因を考えると、やはりそれは自民党に長期単独政権を許してきたことにあります。いかなるチェック制度があつたとしても、長期間一党内で同じような顔ぶれによる政権が維持されていれば、その腐敗をチェックすることはずかしいからです。

こうした自民党の強大な長期政権は、他方で「アンチ自民党」としてのみ成立、しうる社会党の体質を固定化させ、自民党の絶対的強さが失われ相対化しつつある今日、社会党は自己の存在意義を見出せなくなっています。

「国民の反応」

いうまでもなく国民の多くはロ事件＝構造汚職に対し、強い関心と憤りを感じています。しかし、同時に「結局今度の総選挙でも自民党はたいして負けはせず、何も変わらないだろう」といふ、あきらめに似た不満、不信を抱き、傍観者のシラケ気分をますます強くしています。

こうした状況下で総選挙が行なわれれば、多くの市民にとって投票する対象が見出せず、大量棄権による投票率の低下が予想されます。そして、投票率の低下は、自民党の現状維持を許す結果を招くことになると思います。

「市民運動」

ロ事件に対しても、『週刊ピーナッツ』を軸に、旧べ平連系のグループ、婦人有権者同盟、がまんならん隊の老人など、多くの市民運動グループが活動に活動を展開しています。また多くの学者、評論家も新聞、雑誌などを通じて、「戦後政治体制終焉の時であり、市民は今こそ観客席から舞台の上に出て何らかの行動を起こすべきだ」と訴えています。

しかし、今度の衆議院選挙に対して、自民党に打撃を与えるため、意見広告、アピール、集会、



45 7万1,368票の記録

デモといった運動は数多く提起されていますが、衆議院選挙に直接市民グループから候補者を立てるという提案はどこからも提起されていません。「自民党をつぶす」には、まさに選挙戦を通して自民党を糾弾し自民党の議席を減らすことが最も効果的であるばかりでなく、選挙を単なる「投票の機会」としてではなく、市民の意思表現の運動の場として捉え、自分たちの仲間から候補者を立てて闘うことが多くの市民の共感と参加を生む上でも必要なはずです。そしてこうした選挙の中から初めて単なる「アンチ体制」でない市民政治勢力が生まれてくる可能性があると思います。

〔衆議院選に対する取り組み〕

以上のような考えにもとづき、他のグループに呼びかけるとともに、私たち青年グループとしても話し合った結果、東京七区から菅直人さんを推薦立候補させて闘ってゆこうという方針を固めました。

〔選挙戦に対する考え方〕

選挙戦では、政治体質の問題を中心に「政治資金のあり方」と「行政権力の私物化に対するチエック制度」について具体的提案を行なうつもりです。また、これまでのテーマ別の市民運動や、地方自治における市民参加に加えて、国政選挙に対する市民の積極的参加が日本の民主主義再生にとって必要であることも併せて訴えてゆきたいと考えています。

〔市川先生へのお願い〕

市川先生にも、今回の衆院選に関していろいろなお考えや、ご都合がおありだとは思いますが、これまで述べました運動の趣旨及び方針をご理解いただき、ぜひこの運動に積極的な参加、ご支援をいただきたくお願いするものです。

昭和五十一年九月二十四日

青年グループ

これに対し、十月十二日に次のような趣旨の返事が直接、片岡、田上、菅、朝倉に手渡された。その返事は「運動の趣旨は理解できるが、衆議院選挙は政党を選ぶもので、無所属の自分としては推薦応援はしない。しかし、協力の意味で五十万円寄付をする」という趣旨のものであった。

市川氏の「衆議院は政党、参議院・地方選は無所属が望ましい」という考え方には、前からの彼女の主張でもあり、よく理解できた。

しかし、既存の革新政党にも期待を持てない市民が、新しい市民政治勢力をめざして「革新無所属」の候補者を推す運動は、彼女の主張とも必ずしも矛盾しないだけでなく、衆議院選挙においてもボランティアによる選挙が可能であることを示すことは、政党に対しても大きな刺激を与えることになるはずだと私たちを考えた。こうした点から彼女に再考を求めたが、参議院選立候補要請の時のように彼女の決心を変えることは最後までできなかつた。

カンパなど市川氏の間接的な協力は非常にありがたかったが、参議院選挙などを通して人間関係のオーバーラップも多く、社会的にも市川氏に近いグループと見られているだけに、その後、市川氏の推薦がもらえない理由をあちらこちらで問われて、その経緯説明が大変であった。

地域内市民運動グループへの呼びかけ

東京七区内には、多数の市民運動グループがある。これらのグループが私たちの趣旨を理解し、協力してくれることは、非常に大きな“力”を得ることにつながる。

そこで、私たちは、七区内の運動グループと、無所属の市議会議員を対象に「呼びかけ文」を発送し、さらに電話で連絡をとった。その結果、後述する佐野氏（小金井市）、佐田氏（武藏野市）などの協力を得ることができたのである。

マスコミに対する姿勢

昭和四十九年の参院選や昭和五十年の武藏野市議選などを通じて学んだ、私たちのマスコミに対する一つの姿勢のようなものがある。それは、すべてのマスコミに対して、常に真摯な態度でのぞむということである。

マスコミは、その背後に厖大な読者をかかえている。そして読者は、それを通じてさまざまな情報を見みとるだけでなく、ちょっとした情報の中から実際の姿を正確に読みとる力を身につける。

私たちの伝えたいこと、都合のよいことだけを、スポーツマン的にいかにカッコよく伝えようとしても、おそらくそのまま伝わりはしないだろう。また、インチキ情報をうまくマスコミに乗せようとしても、必ずどこかで本音がのぞき、それがどんなに小さな部分だとしても、受け手の側には、はつきりとウソが見えてしまう。と同時に、マスコミとの対応は、自分たちの運動はどういうものであるかを私たち自身が客観的に知るよい判断材料ともなる。それだけに、気の抜けないものなのであった。

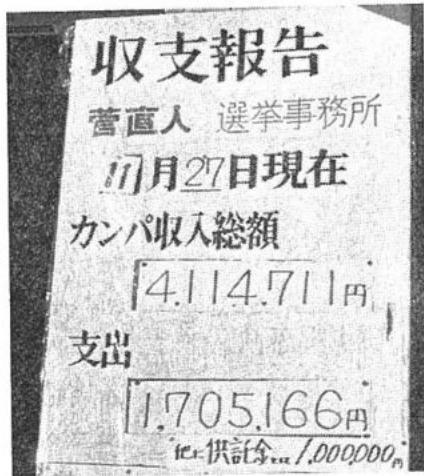
ほんものであれば、必ず伝わる。一人の記者に平均五時間、長いときには十時間、話すというよりも、むしろ訴えるといったほうがいいような姿勢で、私たちは取材記者に対応した。初めは、泡沫候補的扱い、あるいは“話題提供者”的に私たちを見ていた記者の姿勢も、時がたつにつれて次第に真剣になってきた。

カンパ目標四百五十五万円

選挙とは金のかかるものだ、という常識がある。さらに、金をバラまけば票につながる、という意味のことが、あたりまえのことのように話されている現実がある。

たしかに、選挙には金がかかる。事務所を借りるにしても、ポスターを印刷するにしても、選挙カーを走らせるにしても、準備期間を含めてわずか二か月余りの支出とはいえ——二か月というのは、選挙の常識からすれば極端に短い期間なのだが——一サラリーマンの貯金程度では、とうていまかないきれるものではない。

しかし、また、選挙とは、一般にいわれているほど金のかかるものではないともいえる。アルバイトの日給八千円にみられるような、べらぼうに高い人件費、見も知らぬ人に出されるハガキや電話の料金、それに大量の印刷物、広告費など、私たち市民の感覚からすれば、まさに湯水のごとく金が使われている、という実感がある。ましてや、うわざされるような裏金が動いているとすれば



毎日、街頭で収支報告をした。

私たちの大ざっぱなカンパ計画は、およそ次の
るのだが……。

カンパ目標額、四百五十五万円。そのうち供託金の百万円などを除くと、選挙費用の総予算は、二百四十六万二千円。法定選挙費用千二百万円の約五分の一である。

予算を組むにあたっては、市川選挙の際の選挙費用収支報告がたいへん役に立った。費用項目は、その時と同じものにし、費用の見積りも、それとほぼ同様に計算した。違うのは、市川選の際には張らなかつたポスターの費用と、今回の選挙から認められることになつたビラの費用が、印刷費に加算されたことぐらいである。

しかし、結果的には、この予算はたいへんきつかつた。昭和四十九年からの物価上昇率、特に郵便代と印刷代の値上がりをうかつにも計算に入れてなかつたからである。

このようにして、なんとか予算は立つたものの、次に、どこからどのようにして金をかき集めるかという問題が残つていた。いくらカンパで集めるといつても、ただ黙つて坐つていれば、ひとりでにどんどん集まつてくるという性質のものではない。ある程度の計画性と、それに応じた呼びかけが、不可欠である。

市川選挙では、法定費用の九分の二、武藏野市議選では三分の一。選挙は法定費用の中で十分にやれる。これが、二度の選挙を経験した私たちの確信であつた。もちろん、十分とはいつても、それはムダ使いをしないという条件つきのことである。

「手作り・草の根選挙」を目指す私たちは、選挙費用もすべて運動への賛同者のカンパでまかなう。したがつて、候補者自身は一銭も出す必要はないという仕組みになつていて。もつとも、この選挙は、菅という候補者を推し出すためのものでなく、市民運動グループから新しい市民政治勢力を打ち立てようとする運動なのだから、候補者も当然運動の一員であり、その意味からすれば、候補者もカンパをすることはまったく当然ともいえ

私たちの選挙予算一覧

単位千円

内 容		選挙費用	準備・残務費用
人 件 費	事務員2名	80	70
事務所賃借料	家賃・電話設置料 机のリース代等	130	100
通 信 費	電話代・切手代	750	110
交 通 費	ガソリン代・定期代他	132	52
印 刷 費	ポスター・ビラ・ハガキの 印刷	700	100
広 告 費	カンバン代金	10	—
事 務 用 品 費	地図・ノート・鉛筆・封筒 代、その他	50	70
食 粧 費	一食400円として	360	180
休 泊 費		50	—
雜 費	電気・ガス・水道料を含む	200	200
合 計		2462	812

『シビルミニマム』 昭51.10.20号(第28号)

ようなものであった。仲間うち（運動員）から百万円、私たち機関紙であるの『シビルミニマム』の購読者や、これまで交流のあった人々、グループなど、比較的近い部分から百五十万円、新聞などを見て、あるいは選挙中に知つて、などという、選挙運動前にはまったく見知らぬ人から百万円、つきあいのある著名人から百万円、そして、大学祭での焼きソバ・オモチャ売りや、十月二十三日に予定されている「草の根千円パーティ」（56ページ参照）などから残り五万円、計四百五十五万円。

仲間うちはよいとしても、他人や他グループには、私たちの趣旨を訴えると同時に、カンパをお願いする、次のような呼びかけ文を、ハガキなどで送ることにした。

ごぶさたしておりますが、お元気ですか。

49年参院選の際、市川房枝さんを勝手に推薦し運動に参加した私達青年グループはその後も「政治を市民の手に」と訴えて活動を続けております。

しかし、現在の政治状況は決して市民本位のものとは思えません。

そこで、政治を市民の手に取り戻すため、今回の総選挙に、全国各地で市民が選挙に起ち上がるようよびかけていますが、まだまだ大きな潮流にはなっておりません。

私達は、このよびかけを続けると同時に東京7区で菅直人さんを推薦、彼を候補者として市民選挙に起ち上がることにきめ、そのための政治団体を発足させました。

この政治団体は規約にもあります通り、今回の選挙に限つてのものですが、私達の運動が広く大きな運動にしたいと望んでいます。

支持をうけることができるならば、新しい政治勢力として成長していくたいと考えております。
私達はこの政治団体の目的を達成するため別表（50ページ参照）のような予算をたてました。

私達の運動は、いつものように手作りの草の根運動ですが、供託金の100万円をはじめどうしても必要と思われる費用が55万円にのぼります。ひとりでも多くの方のご協力を得て、多数の市民の大きな運動にしたいと望んでいます。

同封致しました趣意書、候補者・グループ紹介、規約等をお読みいただき微意ご了解下さるようお願い致します。

一九七六年十月

あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会

代表 田 上 等

〒180

武藏野市境南町二の二七の五 プレジデント武藏野一〇一

TEL ○四二二一三二一六九〇三

なおカンパをお送りいただく場合には、振込先を銀行口座と郵便振替口座を用意致しましたのでご利用下さい。

○銀行振込先 第一勧業銀行三鷹支店普通預金口座 二六五一一三七九九一四

○郵便振替口座 東京 八一五五七九〇

なお本会へのカンパで一万円をこえる金額については、法律により寄附金控除（無税扱い）の対象になります。

このようにして、カンパを募ったものの、所詮、打つべき手を打つたあとは待つしかない身である。金が集まるかどうか、実際にはかなり不安であった。もし目標額に遠く及ばなかつたらとか、法定得票数を超えられずに供託金を没収されてしまつたらとか——供託金は没収されないことを希望的前提出しておいた——さまざまの想いが胸中を駆けめぐり、最悪の場合にはどうするかも真剣に考えざるをえなかつた。

まったく、金の心配ほど、無意味に神経を消耗するものはない。確実に集まるという保証は、仲間の誰にもなかつた。

これは後日談になるが、選挙戦の中盤ごろ、周囲の反応が日増しによくなってきたにもかかわらず、カンパの合計が二百五十万円台でストップしたまま、約一週間、ほとんど動かないということがあつた。このときの不安と、やつと三百万円に達したときの安堵感を察していただきたい。ともかく最終的には、目標を五十万円超えて、五百万円が集まつた。

ゼロからのスタート

九月十五日の話し合いで、今回の衆院選をやることに決定はしたもの、一ヶ月後の十月十五日まで、実態面では、ほとんど何も進展しなかつたといつてよい。

まず“人間”、そして事務所。人間といえば、この間、新しいメンバーは、ほとんど参加していない。これは、この段階ではまだ、今回の選挙をなぜやるのかというイメージが固まつていなかつたため、具体的に動こうにも、歯車が空まわりしていたせいだと思われる。実際に、新しい人が運動に加わつても、すぐに出来る仕事というものが、この段階では、まだ用意できていなかつた。

つまり、私たちの運動は、ほかの選挙組織とは運営の方向が逆向きなのである。ふつう、選挙をやろうとするとき、ほかのところならば、目的がはつきりしている。候補者を当選させるということがである。まず、人と金ができるだけ集める。ところが、私たちの場合には、まず最初に納得のいく目的のようなもの、何のために選挙をやるか、どのような方法でやるかを参加者全員が認めないと、一步も動けないところがある。これを趣意書などの形ではつきりと表わす、文章化するということなどがかなりむずかしく、また一番、難波するところもある。

しかし、いつたんできあがつてしまえば、あとはそのイメージに沿つて無限に仕事をつくればよい。この、無限に仕事を作るというのが、私たちの特色の一つであり、それが運動の拡大へとつながるものだと思う。人も金も、大義名分さえ本物であれば、自然に集まつてくるものだし、集まつてきた人をつなぎとめるのは、その人々にできる仕事なのである。

今述べたような理由で、ほんとうに人間の参加が本格的になり始めたのは、事務所の態勢も整い、今回の選挙のイメージがメンバーの間で共有可能になり始めた十月下旬ぐらいからであった。しかし、十月二十三日の「草の根千円パーティ」によるデモンストレーション、大学での、学生に参加を呼びかけるビラまきなどを行なつたにもかかわらず、選挙戦に突入するまで、なかなか人は増えず、実際に動いている人間にとつては気がかりな日々が続いた。

仕事の“場”である事務所の手当でも、スムーズにいったとはいひ難い。政治的な色彩の強い事務所は、それでなくとも借りにくいのに、今回のような選挙ともなると、商店街などの相互規制も

あり、それに借用期間が短いことも手伝つてますます借りにくくなる。しかも、私たちの運動は、お金ではなく多くの人の協力によつて動くものだから、多勢の人が同時に仕事ができるようにある程度のスペースが必要になる。運動員の誰かの家の一室を仮事務所に、という案もあつたが、それでは狭くて少々無理である。

事務所がそんな状態であつても、選挙準備はどんどん進行させなくては間に合わない。とりあえず市川氏主宰の「民主政治を立てなおす市民センター」に勤務中の田上等を選挙事務長と決めた。それ以降は、市民センターを連絡場所とし、中心となつていた田上、菅、片岡、朝倉らが、夕方、仕事が終わつたあとに集まつては、物事を進行させていった。

さういわい、公示の一ヶ月前になつて、私たちが小中学生相手の塾を開いていたマンショニンの隣の部屋の持ち主が、その部屋を借してくれることになった。

事務態勢の方は、十月十日、片岡の要請が功を奏して、藤本ふみ子（二十四歳・刺しゅう家）が事務所にはいることを同意、次いで佐藤淳（二十二歳・中央大生）が自発的に参加した。その後、

十月二十日になつて、田上は市民センターを辞職し、事務所の専従になつた。
十月十四日夜、それまで私たちの運動の事務所であつた渋谷プロジェクト・センターから物を運び込み、一応の格好が整い、選挙事務所がスタートした。

草の根千円パーティ

草の根とは、一対一の関係を拡大していくことである。人と人のつながり、「助けたい」とい

う気持ち、それを大切にしたい。草の根はしんどく、時間もかかるが、私たちはそれでいく。三万円を一人からもらうより、三十人から千円ずつもらうことをすばらしいと思い、私たちは草の根千円パーティを企画した。

私たちの今後とも展開する草の根運動に、皆様が参加されることを期待します。

（『シビルミニマム』第三〇号）

昭和五十一年十月二十三日、土曜日、午後六時三十分、東急吉祥寺店九階のレストランで「草の根千円パーティ」が始まつた。

田上代表による「市民選挙で政治をわれわれ市民の手に」という決意表明のあと、菅の立候補受諾演説、次いで全国サラリーマン同盟代表委員青木茂氏による推薦演説がつづいた。

この日の収入は、会費一千円と参加者からのカンパも含め、しめて二十八万九千円。支出、九万二千九百円。その差額十九万六千円は、市民の会のカンパ収入とした。これをもつて、ついにカンパ総額は百万円の大台をこえ、供託金をそろえることができた。



57 7万1,368票の記録

市川選挙との相似と相違

すでに述べたように私たちのグループは、市川房枝氏の「理想選挙」に参加したメンバーを母体としている。四十九年参院選の総括パンフレットの中で、市川氏はこういっている。

根本的には、議会制民主主義を有権者の手に取り戻すという目的がある。有権者が自らの手で出した候補者を拽し、立候補を頼み、金を持ちより自分達の手で選挙を行なう。だから推薦した方が主人公となり、候補者より真剣にやる選挙、そんな有権者の選挙が理想選挙だと思う。もちろん、立候補届け出を推薦制で行なうとか、金をかけないとか、法律が許しても好ましくないことはやらない、などという手続き論、技術論も、私の主張する理想選挙には不可欠だ。

今回の私たちの選挙も、この理想選挙の条件はすべて満たしている。しかし、あえて「市民選挙」という言葉を使つたのは、市民政治勢力の拡大ということを念頭においたからであった。具体的には、政策よりも政治姿勢を前面に出した市川選の戦い方から、既成政党に対する本質的な対案となる主張を盛り込んだ選挙戦へ、さらに腐敗に対して単にこちらが清潔である、ということだけではなく、腐敗構造をたたきつぶし、私たちが自らの手で新しい参加型政治構造をつくり出すんだという志向を明らかにしたものだった。

もう一つの市川選との違いは、候補者の無名性にあつた。市川選では、多数の協力が得られるか、金が集まるかどうか、ということなど、誰も心配しなかつたが、今回の場合は、候補者の無名性ゆえに、まさにそれらのことが懸念された。

ともあれ、四十九年の参院選が「市川さんだからできた理想選挙だ」という声に対し、私たちの選挙が事実をもって、社会的に市民選挙のポテンシャルが存在しているのだということを明示しえたことは大きな収穫であった。

政治に市民常識を！

「保革対立」の風化

どの世論調査をみても、支持政党なしのいわゆる無党派層が増え続けている。しかも無党派層は、政党支持率一位の自民党をも上まわっているのが現状だ。ロッキード事件により、あれだけ「自民党的腐敗・堕落」が明らかになつたにもかかわらず、支持率を上げた革新政党は皆無である。自民党は悪いと誰もがいいながら、しかし同時に、革新政党にも期待していない。

革新政党は、最近「保革逆転」などという文句を使い始めている。しかし、その実態は、無党派層の増大に助けられた与野党接近でしかない。自民党の支持率が低くなつたその分だけ、相対的に接近してきたにすぎないのだ。

すべての既成政党は、なぜ無党派層が増えているのかという問題を真剣に考えていない。というより、問題意識さえ持ち合わせていない。無党派層を簡単に無関心層におきかえて、あいかわらず同じことをいつている。政党の綱領など、どの党も変わらない。中味でちがいがないから外見で「ちがい」を演出しているにすぎない。「若さと情熱」「豊かさと安定」「あすの日本をになう〇〇党」など、まったく人をバカにしたようなスローガンをかけている。これら意味のない既成政党の戦術

は、市民の判断する能力をまったく無視してかかっているものである。

「政治に市民常識を！」という、保守的であたりまえの私たちのスローガンが革新に見えるほど、既成の政治図式はおかしくなっているのだ。

なぜ、既成政党は私たちからかけ離れてしまつたのか。そして、私たちにピンとこないところで、すでに風化してしまつた対立をくり返しているのか。それは「選挙」を政党にとられてしまつたからだ。自民党の「三バン選挙」はもちろんのこと、革新政党も、人手と金をすべて組織に依存している。組織さえ大事にすればという考え方、そして、私たち市民を「票田」としかみなさない傲慢さが根づいてしまつていて。

それに、既成政党の候補者のキャリアも画一化しており、私たち投票する側と同じ体験を持つた人が候補者にななくなつていている。自民党の候補者は、高級官僚と議員秘書と世襲の二世とタレント、社会党は労組幹部、共産党は民青、公明党は創価学会と決まっている。

こうして既成政党は、私たち市民からかけ離れた特殊社会をつくっている。その特殊社会の外堀を構成するのが「選挙」である。この外堀にあたる選挙を、いわれのない「選挙常識」で武装し、私たちを「票田」としかみなさないことによつて、特殊社会の温存を図つてゐるのだ。それを超えて彼らに影響力を及ぼす手段を、私たちはほとんど持ち合はせていない。時に市民の側からパイプを延ばしても、特定の圧力団体、労組などに顔の向ききつてゐる彼らの側には、それを受けとめる用意がない。

とすれば、市民運動がとらえたテーマは、その運動をやつてゐる者自身が新しいパイプを政治の

場に延ばさなければなるまい。つまり「支持政党なし」層の輩出に象徴される、革新政党にさえ相手にされない（票田ではあっても政策立案の対象になかなかされない）私たち市民は、自らの手で議員を送り出すことによってしか、国政を身近なものにすることはできないのだ。そのためには、投票する側とされる側という区別をなくすこと、そして、具体的な判断材料としての政策を提供することが必要となつてくる。

片岡はいう。

「今回の選挙は、既成の革新の内容対、俺たちの内容だったと思う。だからこそ、政治姿勢を示すだけではなく、政策を掲げることが必要だった」

スローガンをどうする

既成の体制に独自の戦いを挑んでいく私たちにとって、どのような内容、イメージを掲げるかは、きわめて重要なものであり、慎重な議論を要する問題であった。

とくに、私たちの運動を一言で適確に表現するスローガンづくりに、多くの労力を費やした。何人かがどんどんアイディアを出し合い、批判しあう、というブレーンストーミングを何度も繰り返した。最終的に残つたのは次のようなものである。

「政治に市民常識を」

「市民の国政参加への足がかりを」

「参加・共和・分権・自治」

私たちのイメージと志向をあらわすことばとしては、グループの名前である「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」があり、それと重ならないで、しかも使いやすいスローガンを、このなかから選ぶのである。

「足がかりを」というのは、運動の現況を適切に表現してはいるものの、スローガンとしては少し長いうえ、あまり積極的な発想とはいえないということで、ボツとなつた。「感覚」か「常識」かについては、候補者菅の、

「おまえは市民常識を持つてはいるか、と聞かれれば、まあ持っている、と答えられるが、市民感覚となると定義もむずかしいし、答えるのがシンドイな」

というつぶやきで、「常識」の方が採択された。



立て看板も自分たちでつくった。

結局最後に残つたのが、「政治に市民常識を」と、「参加・共和・分権・自治」の二つであつた。ここで議論の末、後者には、字面から受ける新鮮さとことばのひびきの面白さがあつて捨てがない、という声が多かったのだが、結局、スローガンとしては、『常識』的な前者が選ばれたのである。現在の政治には、『常識』のかけらも見られな

い、ということへの私たちの怒りをこめて。

これが、私たちのスローガンを決めるまでのいきさつである。ここで出されたさまざまなことばは、やがてビラ、選挙公報のキーワードとして生かされてくる。

政治に市民常識を

主張の内容は、単なる政治姿勢ではなく、政策につながるものでなければならぬ。こうした認識のもとに、十月初旬から、私たちは主張すべき政策をまとめはじめた。私たちは毎日やっている市民セミナーをはじめ、医療問題やネーダーグループなどの研究会を何種類か持ち、また「理想選挙推進市民の会」や「民主政治をたてなおす市民センター」などの研究会にも参加していた。その中でさまざまな問題点に触れ、さらにいくつかは運動という形でとり上げてきている。

そうしたものを整理するための政策研究会が、小山泰夫をチーフとしてスタートした。そこで主として調べ直したものは、次のようなものであった。

- 行政の公開の制度
- 行政監査制度の各国の現状
- 企業への住民参加の例
- アメリカのSEC（証券取引所委員会）
- 独占禁止法
- 医療問題
- 化学物質の安全性
- 土地税制
- 選挙制度

このほかにも、私たちがこれまでいろいろな場所で知り合い、連絡をとり合っている各地の市民運動グループから「こういう要求を入れる」という形で政策の提言があった。たとえば、全国サラリーマン同盟からは、サラリーマン減税を税の不公正という視点から取り上げてほしいとの要望が出された。

四〇%のアテンティップ・パブリックをねらえ

私たちの考えに共感してくれそうな人々はどんな人か、どのような層の人々を対象に訴えてゆくかを「イメージ」しないと、具体的な表現のスタイルが決定できない。私たちの描く、市民政治勢力の母体となってくれるのはどんな人々か。無党派層とは何なのか。私たちのいう市民感覚をもつた人々、市民とは、現在の状況でどう把握したらいいのか。これは大きな問題であった。対象の性格をハッキリ把握していないと、主張がピンボケになってしまふ。

菅、片岡、宮城健一（二十九歳）を中心に、この問題について何回か会合をもつた。ある日、宮城が一つの調査結果をもってきた。その内容は次のようなものであった。

地域開発問題や物価問題など、多くの市民運動グループが取りあげているテーマに関する政策決定とコミュニケーションの実態を分析すると、五つのグループに分けてみることができる。

一、制度上の指導者グループ (official policy leader)——政策の立案・計画に係わる部署に所属し、実際的にそれを担当している「役人」と、少数の「議員」で構成される。……有権者の約一%

二、政策・意見エリートグループ (opinion elite)——いわゆる「委員会」の委員を構成するグループ、大学、その他の研究機関における研究者、つまり学識経験者と、官公庁の役人、および企業の実務的指導者のうちの若干、いいかえれば指導的実務経験者が含まれる。……有権者の約二%

三、ローカル・オピニオン・サブミッター・グループ (local opinion submitter)——政策決定プロセスには関与していないが、マスメディア、その他のコミュニケーションチャネルに接近可能であり、それらを通じて意見の表明の機会のある人々で構成される。マスコミ関係者、その他諸団体、市民団体などのリーダー層などが相当する。……有権者の約七%

四、関心をもつ公衆 (the attentive public)——それらの「問題」に関心（不満）と知識をもつており、日頃、マスコミに対し注意をはらっている。そして前に述べた、政策・意見エリートグループやローカル・オピニオン・サブミッター・グループの間でかわされる議論の聴衆を構成する。自分の意見をもつておらず、その表明の機会を望んでいるが、実際には「代弁者」の出現にそれを託している層である。……有権者の約四〇%

五、一般大衆 (the mass public)——それらの「問題」について、漠然とした不満、不安を抱いているが、それをとりたてて話題にすることもないし、また、外部に伝えたいと積極的には思つ

ていないグループである。

この話を聞いていて、昔は「わかった。私たちの対象とする層は、四番目のアテンティップ・パブリックの層だ。マスコミを通じて、問題を判断する知識があり、自分の意見をもっているのに、表明の機会のない層。これは、私たちの問題意識にピッタリではないか。それに、有権者の四〇%というのも、無党派層の四〇%とダブっていて、なんとなく実感に合っている」

対象となる層をイメージできたあとの作業は順調に進んだ。それを頭に描きながら、主張の表現のトーンやスタイルを決めてゆくことは容易である。オーソドックスに、そして表現のスタイルは多少かたくても内容を明確に打ち出す、これが、その時の結論であった。

主張の内容

こうしたさまざまな材料をもとに、私たちには議論を重ねた。そして、主張を三点に分けて整理していった。

〔立候補の理由〕

なぜ立候補したのか、を語ることは、私たちの場合、特に重要であった。この立候補の理由の中にも、今回私たちが選挙にいどんだ基本的姿勢があるのであるのだ。



67 7万1,368票の記録

それから「革新無所属」というのは何党の公認もれですか」などという質問に対し、私たちの運動の意味をしっかりと認識してもらわねばならない。私たちは、以下のように立候補の理由をまとめた。

「市民常識のかけらえない現在の政治を“唾棄すべきもの”とかたずけるのではなく、私たちの努力で変えていかねばならない。既成の政党に期待できないならば、私たち市民の手で市民感覚を持つた政治勢力をつくることが必要だ。それが既成政党に体質変革の刺激を与え、政治に市民常識を取り戻す道である。市民運動の中から仲間を立候補させて、それを支援するという形で積極的に選挙に参加していく市民選挙の拡がりが、国政においても、市民参加による政治状況を生みだすことを確信する。市民選挙による市民感覚を持つた政治勢力をつくる足がかりとして、私は立候補した」

「当選して努力すること」

現段階で自らの力量を客観的に考えれば、国政全般にわたる政策を「公約」という形で主張することは軽々しくひびくだろう。私たちにできる範囲のことを素直に表わしたい。そこで、政策については、「努力すること」という表現を用いた。今回の選挙で主張したことは、次のとおりである。

- 企業の政治献金の禁止止
- 企業献金に政治が依存することによって金権体質が生まれ、政治の企業支配につながる。この根を断ち切るために、企業の政治献金を禁止すべきである。
- 地方分権の推進

地方自治体の財政と権限の自立を図るなど、地方分権化を進めることにより、利権と結びついた“地元利益還元型議員”を不必要なものとし、市民参加の領域を拡げる。

○市民運動の主張するテーマへのとりくみ

たとえば、医療制度・食品公害・税の不公正・住宅問題などのテーマを、企業集団や団体の利害からでなく、市民の健康とくらしを重視する立場から追求する。

「無所属で一人でも必ずすること」

たった一人の無所属議員が衆議院の中でどれだけの仕事ができるのか。「無所属」と聞いたときに誰もが持つ疑問だろう。私たちは無所属の絶対性をいうつもりはないが、しかし、無所属でもできることはたくさんある。無所属とは、一人一党のことだ。

政党に所属し、採決の際の党の方針にそった“起立要員”でしかない議員よりも、一人でもやれることを必ずやることの方が、より大きな成果を挙げができる、と私たちは考えた。そして、そのための具体的な方法を明記することによって、そのことを訴えることにした。

私たちの生活が直面する矛盾や諸問題を、市民のなかから、専門的な知識を持った人々がスタッフを組み、市民の論理で政策として立案し、提言していく。

政府は議員からの文書による質問（質問主意書）に対し、文書で返答する義務がある。これを活用し、市民の感覚でとらえた問題を政府に持ち込み、その回答を私たちのグループの機関誌やマスコミを通じて公開していく。

このようにして、国政レベルの政治の進め方や行政のやり方を市民の前に公開する、というオー

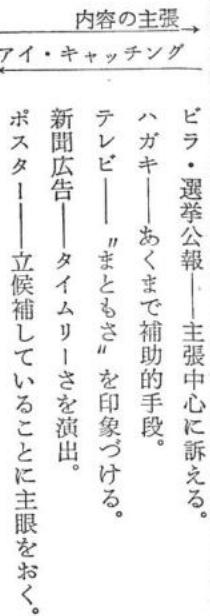
メディアの位置づけ——基本的戦略構想

衆院選挙で利用できる運動手段は、公報・ビラ・ハガキ・テレビ・新聞広告・ポスター、それに直接訴えることのできる街頭演説と立会演説がある。

前に述べたように、私たちは主張の内容を、なぜ立候補したか、無所属一人でもできること、当選したら努力することの三つをポイントにつくりあげた。その中では、できるかぎり「政策」を打ち出し、これまでの政治姿勢を前面に出した選挙を乗りこえようと意図したのである。

しかし、候補者膏は決して“名”があるとはいがたい。少なくとも、「膏」という男が立候補していること、それを知つてもらうことが先決であり、また「膏」の主張する内容と結びつけて判断してもらわなければならない。

そこで私たちが考えたのは、選挙用の各手段をアイ・キャッチングと内容の主張という二つの目的を満たすために、どのように使いわけるか、ということだった。この点を検討した結果、私たちが与えた各手段の基本的性格づけは、次のようなことである。



このような性格づけのもとに、私たち“らしさ”を加味し、新鮮さを盛りこむこと、これが具体化の方向であった。直接訴える街頭演説は、いいたいことを時間をかけていうこと。そうすれば、わかつてもらえるし、わかつてくれるという思想でつらぬいた。

選挙する側もされる側も同じだ

ここで強調したいのは、私たちは選挙する側もされる側も同じだという姿勢で運動を開いたことである。私たちは、選挙を運動の一環として位置づけた。私たちの運動は、市民参加による選挙という状況を拡げることにある。一緒にやろうという発想である。

他の政党候補のように有権者を“投票者”として位置づけることを極力回避した。それは有権者を、観客としての投票者におしやることにつながる。今回の選挙あたりからずいぶん改善されたものの、現行の公選法には選挙する側とされる側という区別が厳然として残っている。候補者と投票者を区別し、候補者を特別の存在としてみなした上で成り立っている。

私たちには、この区別を乗り越えることが必要だ。そこに、私たちの主張する市民選挙の可能性がある。

素人だけのプロダクション

“べからず”から“しない”へ

こうしているうちに、公示日は急速に近づいてきた。基本方針は決まったものの、具体的には何もできていない。「選挙の常識をくつがえそう」というスローガンは、立候補の経緯だけでなく、選挙戦術にも具體化しなければならない。

どうすればよいのか。

昭和五十一年十一月五日、武蔵境の事務所で戦術会議をもつた。午後六時、みんなが仕事を終えて集まってきた。道々考えながら来たらしく、初めからいろいろなアイディアが出てきた。このとき、私たちがさまざまなアイディアを戦術として採用するかどうかを判断したのは、次のような基準によつてであった。

- 一、草の根選挙という運動の趣旨を素直に、しかも効果的に伝えていること。
- 二、「理想選挙」の流れにそるものであること。
- 三、市民常識の枠をこえていないこと。
- 四、新鮮であること。つまり、これまでの選挙の常識をくつがえすこと。

日本の公選法には、かなり細かな規定がある。それも「べからず」ばかりで成りたっているようなものだ。だから、「今選挙法の枠内で、何がどれだけできるか」「これは選挙法に抵触していないか」といった発想で戦術がつくれられてゆく場合が多い。そうすると、どの候補者の運動も同じようなものになってしまう。

そこで、われわれは、選挙法に抵触しないというのは無論のこと、むしろ積極的に「やらない」という発想で戦術を考えた。

選挙というものを、単なる「議員になるための、あるいは議員を送り出すための手続き」ではなく、ある主張が検証を受ける機会であるというふうにとらえてみたとき、一般に選挙戦術として使われているもののなかには、目立つことだけに焦点をあてたものが多い。「そんなことはやめよう」という精神で、次のような戦術が採用された。

○連呼はしない

走りながら名前だけを呼び続ける連呼で、いったい何を訴えることができるだろうか。連呼を聞いた人は、どんな反応を示すだろう。「うるさい」「しつこい」だけではないか。これでは相手をばかりにしているようなものではないか。意味のあることをやろうという私たちの方針からすれば、当然「連呼はやめよう」ということになる。これは三年前の市川選でも同じだった。

それでは、選挙カーの移動中は何もしないのか。連呼に替わるものはないか、と考えたすえに「スポット」と名づけた作戦をあみだした。これは、信号待ちなどで選挙カーが停止したとき、三〇一六〇秒単位で、短くとも何かまとまつたことを訴えようとするとものであつた。この役に当たつ

た運動員を、私たちは「スポット係」と呼んだ。

○たとえば、その一人藤岡郁子の場合

「皆様、こちらは今回の衆議院議員選挙に革新無所属で立候補いたしました菅直人でございます。菅直人は、一昨年の参議院選挙において市川房枝さんをかつぎ出した市民運動のグループに推されて立候補を決意いたしました。ロッキー事件に代表される自民党の腐敗しきった金権体質に憤りを感じつゝも、既成の野党にも期待できない。そう考えた菅直人は、『政治に市民常識を』というスローガンのもとに、今回の選挙戦をたたかっております。

○菅直人、革新無所属菅直人に、皆様の積極的なご支援をよろしくお願ひいたします

○"たすき"や"白手袋"をしない

普通の市民として、あたりまえのかつこうで選挙をしよう。通常の生活感覚にそぐわない"たすき"や"白手袋"はやめよう。それに揃いの衣装もよろしくない。これらはどう考えてても意味のあるものではない。有権者に媚びる行為のように思えたからである。

毎日、街頭演説を終えてから議論しながら方針



か、ということで、白いバラの造花を胸につけることにした。

○おじぎはしない。手を振らない。

私たちは、お願いをするのではない。参加を呼びかけるのだ。したがって、わけのわからないペコペコおじぎはやめよう。演説の初めと終わりには礼儀としてのおじぎをする。それから手を振るものやめよう。あれも意味がない。

長時間の議論の末に、このような「〇〇しない」戦術を決めた。話し合いを終えたのは、午後十一時十分前。みんなそれぞれ帰宅を急ぐ。外は寒風、コートの襟を立てて、誰かがポツンとつぶやいた。「もう冬か……」

捨てられないビラを作ろう

今回の選挙から候補者個人のビラが使えるようになった。東京七区の場合、八万枚である。選挙法で許されているメディアのうち、一番まとまった内容を主張できるものは、ビラと選挙公報であると位置づけた。では、それをどのように作つたらいいか。

他の候補者のビラは、きっと顔写真が半分以上を占め、"豊かさ"とか"信頼"といったあたりまえの標語を使ったイメージ戦術でくるだろう。

私たちは、候補者の顔写真は紙面の三分の一にとどめ、内容をなるべく多く盛り込む方向にもつていった。ビラについては、菅、片岡、青木守、宮城の四人が、仕事のあと、吉祥寺で食事をしながら話し合つた。すでに立候補決定の時点から大幅な遅れをとつていたために、印刷が間に合うか

どうかぎりぎりの線であった。

そうしたあわただしさの中で、私たちの次の関心は、「捨てられないビラを作ろう」「家に持ち帰つてももらえるビラにしよう」ということであった。そのための一つの方策は、内容のあるものにするということである。これは当初の方針と軌を一にする。それにはどんな工夫があるだろうか。

「ビラをもらった場合、自分たちならどうするか」片岡は、そうつぶやきながら、「薄手の紙ならもみくちゃにしてしまう。厚手の紙ならそうはいかない。しかし、折りが大きすぎるとわずらわしい。ポケットにはいるぐらいだとちょうどいい。それに、何か役に立つことでも書いてあれば、一応は家に持つて帰る」と続けた。

三つ折りにすること、紙は厚手のものを使うことは、すぐ意見がまとまった。「受けとった人に役に立つ」ためには、どんなものが考えられるだろうか。「選挙区内の施設の一覧表はどうだ。みんな意外に知らないはずだ」「しかし、数が多くてビラには載せきれない」「じゃ、投票所の地図はどうだ」「それも多すぎる」というように、さまざまなアイディアが続出したが、結局、スペースの関係で、公示日から投票日までのカレンダーに私たちの運動スケジュールを組みこんだものと、七区の人口を示したものを入れることにした。

デザインはどうするか。片岡は「カラーにするのもいいが、お金がかかる割りに安っぽく見える」。そこで青木が「一色がいいのではないか」というと、「かなり硬派なものになるかもしれないが、黒一色でトーンをえて表現するのはどうか」。「しかし、"読んでみたい"、"読もう"と思われるには、一色ではさみしいのではないか」という議論も出たが、「目を見はるようなものよりも、

かえって、その方がいいかもしれない」と菅も青木に賛成した。

○ “渡し方”と“ビラ”的ドッキング

まあにもいったように、個人ビラは今回の選挙法改正で初めて使えるメディアだったので、どのように使えば効果的なのか、まるで見当がつかなかった。

選挙法で許されている配布の方法は、

一、新聞折り込み

二、立会演説会場の入口

三、選挙事務所内

四、個人演説会場

五、街頭演説会

の五つであった。その中で、不特定多数の人間に大量に配ることができるのは、新聞折り込みと街頭演説の場だろう。他の候補者は新聞折り込みを使うにちがいない。私たちは、新聞折り込みはいつさいやらなかつた。費用がかかるということでもちろんだが、それ以上に、戦略的な意味をもつ手段として、「みんなに語りかけるものとして使っていこう」と思ったからである。換言すれば、ビラだけが独立したものとして存在するのではなく、他の運動と常に関連づけたものとして利用してゆこうと思ったのである。それが、結果的に受け取ったビラを投票日まで保管してもらうことにつながるだろう。

こうしたことが前提となつてゐるので、渡すときにも無言で渡すのではなく、「市民常識で立候

補した菅直人です」とか、「ぜひ読んでみて下さい」と語りかけることにした。

これは後日談だが、他の候補者の陣営から「八万枚のビラをどうしました?」と聞かれ、「まあ、どうにか全部まけました」といつたところ、「全部? よくまけましたね」といわれた。たしかに、最終日までかかったのは事実だが、これまでの経験から私たちにとって、「ビラまき」は運動のイロハであると思つてゐる。

ポスターを貼りかえよう

選挙用のポスターは、たて四十三センチ、よこ四十センチのものである。ポスターをつくる段



「実物よりいい」という評判もあった。

なつて、菅は一人の友人を思い出して電話をかけた。「鈴木君? 久しぶりだな」「やあ、菅君か?」ではじまり、つまる話も程々におさえて、「実はポスター作成に協力して欲しいんだ」「ああ、聞いたよ。東京七区から立候補するらしいな。いいよ、おれも何か役に立てないかと思つていたところなんだ」

鈴木氏は、快く承諾してくれた。持つべきものは友だちである。彼は菅の高校時代の友人で、現在プロのカメラマンとして売り出し中である。

私たちにはポスターの使い方についてのブレーンストーミングを行なつた。「ポスターを壁新聞として使えないだろうか。何回も貼りかえて主張を訴えるものにできないだろうか」というアイディアが出された。「それはおもしろい」ということで、さっそくアイディアの具体化にはいった。原案ができあがつた。「遠く離れると見えにくくな」とか、「通りすがりの人が、わざわざ立ち止まつて読むだろうか。関心のある人なら別だが……」とか、あまり評判がよくない。それに、考えてみると七区のポスター掲示場所は、千七百二十三か所もある。それだけの枚数を何回も貼りかえることが、私たちの力量でやれるかどうかも問題だつた。「千七百二十三か。それは無理だな」ということで、何枚かつくつてはいたが、実際には貼らなかつた。

今度は、顔写真と名前を入れたメインポスターの作成である。写真撮影の前に、候補者の菅は、石川しのぶ（二十二歳、事務員）の指示により「前髪三センチ、両横二センチ、後二センチ……」と書いた紙きれを持って床屋へいった。そして、帰ってきて、スーツに着替え、カメラを前に椅子にすわつた。これから先是、プロカメラマン鈴木氏の腕の見せどころである。

彼はやはりプロだつた。たつた一枚の顔写真のために、二百枚も写真をとつた。その中から、みんなで手分けして一番よく写つたのを探し出し、決定したのが、前ページのポスターである。

ただし、これが菅直人の“いつもの顔”でないことは確かである。やはり二百枚もの写真の中から選び出した一枚は、实物よりよく写つているものなのだ、という声もグループの一部にはあつた。実は、この選挙運動ではもう一つ、推薦会用のポスターが使えることになつっていた。これは、選挙法改正後、今回はじめて適用されるものだつた。よく注意していかつたせいか、かなり準備が

進むまで“推薦会ポスター”が許されているとは知らず、その作成にとりかかったのは、公示日直前になつてからだつた。

選挙法の規定にある推薦会ポスターの内容は、「候補者をもつ政治団体は、一人四回まで推薦演説会を開催することができ、一回の演説会には五百枚のポスターが使える」というものだが、そのポスターには、候補者の氏名、写真を入れたり、明らかに候補者を示す用語を使うことは禁じられていた。

つまり、これまで候補者二十五人以上の政党だけに許されていたポスターを、無所属にも使えるようにしたものだが、いくら候補者と直接結びつけてはならないといつても、候補者をまったく連想できないものでは意味がない。

ポスターを見た人に、候補者のポスターと推薦会のポスターをイメージの上で一致させてもらいたい。「これは、菅直人を推薦したグループのものだ」ということが、見た目にも、読んでみてもすぐわかるよう工夫をこらした。

たとえば、推薦会の名前である「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」や、スローガンの字体や色を統一したり、枠は赤く、地は白に統一するといった具合である。



新聞広告に收支を出そう

新聞広告は五回出せることになっていた。私たちは、なるべくニュース性のあるものを、その中に盛り込むことにした。どの新聞にするか、曜日はいつがいいかなど、かなり難しい判断が要求される。新聞社の人と話し合った上、朝日一回、読売二回、毎日二回ということにした。

朝夕刊どちらにするかについては、「確実に読む可能性はあるのは朝刊だ。出勤前に読んでいく人が多いだろう」ということで、朝刊にし、紙面は一番読者の目につきやすいということで、社会面に出すことになった。曜日は「落ちついて読める」ので土・日曜に各二回ずつ載せることにした。残りの一回は、最後の決め手として投票日の前日に出した。

当初、カンペ目標額とその時点でのカンペ総額、それに支出総額を報告しようと考へた。しかし、新聞社の人から「公費でカンペの要請をすることになるので、目標額は入れられない」といわれ、結局、その時点での收支だけを報告することになった。新聞の広告の規定も、なかなかやつかいなものである。

ハガキには運動員の署名を入れる

ハガキを選挙戦術として効果的に使うのは、かなり難しい。ハガキは相手を特定したコミュニケーション・メディアである。それも、差出人と受取人が相互に知り合っているという前提で成り立つコミュニケーションである。

ところが、今までの選挙ハガキの使い方は、まるで商品のダイレクトメールのようなものばかり

だ。ハガキを受け取る人のうち、候補者と直接面識のある人は少ないはずである。これでは、ハガキを受け取っても、そのままゴミ箱行きというのがオチだらう。

そこで私たちは、「知人（多少の面識がある人も含む）からのハガキなら、読んでくれるだろう」と考へ、運動に参加した人々から名簿を持ちよつてもらい、ハガキの最後に“私の推薦”という形でその人の署名を入れてもらうことにした。三万五千枚のハガキのうち、できるだけこの方法を使い、残りのハガキについては、地域的には田地などの密集地域、年齢的には二十代の若い有権者と明治生まれの層、六〇年安保を経験したであろう人たち、というプライオリティをつけることにした。

デザインも、顔写真はごく小さくし、内容を中心黒だけで印刷した。それに、「受け取る相手が当然、菅直人を知っているという書き方は失礼だ」と考へ、「私は“あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会”から推されて立候補した菅直人です」という自己紹介から始めるスタイルをとつた。

しかし、投票へのキッカケをつくる選挙戦術という点では、その効果をあまり期待していなかつた。せいぜい私たちのイメージを強化するという程度である。

宛名書きは、かなりの大仕事だった。

「もう間に合わないのでないか！」というところまで追い込まれて、投票日二～三日前にのべ五十人ぐらいを動員し、二日間徹夜でやつと出し終えた。「ハガキ書きはもうこりごりだ」「ペンを見るのもいやだ！」という悲鳴があがつた。私製ハガキを使って選挙前から用意しておけば、時間的

にも余裕があつたのだろうが、僕約のために公示になつてから選管で受けとつた官製ハガキを印刷屋に回したものだから、こんなことになつた。

TVは難しい

「この候補者に投票しようと決めたのは、何によつてですか」という質問に対し、「テレビ」と答える人が非常に多い。テレビの政見放送での候補者のイメージというものは、かなり重要である。そこで、テレビになれていない菅のために十一月十二日、青木守がビデオレコード式を借りてきて、リハーサルを行なつた。青木は映画作りをしており、私たちは「監督」と呼んでいる。

まず手初めに、原稿を見ながら強弱、速度の調整をした。これは「それじや演説でなく朗読だ」といわれ、次には「トクトクと話す」方法でやつてみた。監督は時計をにらみながら「六分十秒。遅い、もう少し早く」などと指示を出す。二回目は四十分で「早すぎる」。しかし、これも「情念がこもつてない。主張の迫力に欠ける」と監督から注文が出る。「今度こそは」と何度も挑戦したが、「強くするとアジ演説調になるし、弱くすると説明調になる。どうもその調整がうまくでききない」とやや弱気。

リハーサルは何度も繰り返された。しかし、候補者もなかなか納得がいかない様子。「テレビは難しい」私たちはしみじみと思った。

選挙カーの回り方

選挙カーは、選挙の一つの“顔”である。今回の選挙で使えるのは一台。それなのに、東京七区はかなり広い。“選挙カー”づくりと“回り方”的研究が並行して進められた。

選挙カーに必要なのは、看板、たれ幕、スピーカー、マイクなどである。私たちの場合、“なるべくお金のかからない方法”ということで、十一月八日から“手製の選挙カー”づくりを開始した。

まず車を手に入れなければならない。乗用車を持つ仲間はたくさんいるが、私たちのイメージにある選挙カー、すなわち候補者が車の上に乗つて演説ができるものとなると、どうしても「パン」が必要になる。これを持ち合わせる者は、残念ながらいなかつた。

片岡が「パン」を求めて中古自動車の販売会社を歩き、ようやく「ハイエース」を手に入れた。これを小桜一利と青木監督の共同名義で登録した。費用は五十万円也。

次は選挙カーへの儀装である。まず宮道寿一（大学助手。通称“ドクター”）が池田勝代さん（武蔵野市議）のところへ行つて、彼女が選挙の時に使つた看板の材料をもらひうけてきた。普通ならば、七、八万円かけてカンバン屋に注文するところだが、彼は毎日、昼休みと夜を利用して看板を書き、結局、四〇五千円でつくつてしまつた。

十一月十日、田上と宮道が一日中かかつて、車につけるキャラリアを探し回り、夕方になつてやつと立川で見つけてきた。十一月十四日、つまり公示日の前日、小桜がキャラリアと看板を車につけ、宗像がマイクの調整をし、吉田がスピーカーをとりつけて、やつと選挙カーが仕上がつた。その出

来ればえは、読売新聞の記者が取材にきて、「出来がよすぎて記事にならない」と引き返したほどである。

しかし、一つだけ思わぬ見込み違いがあった。照明は、初めはケチって、無しでいこうと思ったが、実際に、夕方暗くなつてから車の上で演説をはじめてみると、「音はすれども姿が見えぬ」。そこで、急遽、携帯用発電機を使ってライトを取りつけることにした。次はソフトウェアの検討、つまり、どこをどのように回るか、乗員編成はどうするか、そして一日のタイムスケジュールの作成である。

七区内を最も効果的に回るには、どう回ればいいのか。七区の地図をにらんで考えても、なかなかいい案が浮かんでこない。「七区は広すぎる」。ある日、志田徳子（三十歳、OL）の知人で、偶然菅の住むマンションに仕事場を持つている大学の先生が、この方面にくわしいと聞き、十一月十二日になつて、菅と片岡が会いに出かけた。

彼のアドバイスは、「七区は10キロ×20キロで約二百平方キロメートルある。1キロ×1キロを一ポイントとして、そのポイントを毎日一回ずつ回るようなシステムは組めないか」「中央線と武藏野線とが西国分寺でクロスしている。この線路によつて区分される四つの地域内にポイントを設定して、それを毎日回る」というものであった。いずれも適切な意見ではあつたけれども、実際に検討してみると、一台の車で、きびしい交通事情の中を回るのは不可能のようだ。

そこで、この考え方を生かしながら、人口密度を基準にして大雑把に回り方を決めるにとどめた。具体的には「点・面作戦」というものである。

面作戦というのは、住宅集中地域（三鷹・小金井・武蔵野・国立など）ではどのくらいの時間を使うかということ。点作戦は、東村山・東大和など、少し離れた団地群を点から点に結んでそこを何回まわるかということである。

このように、作戦だけはスムーズに作られていくが、実際に行動を始めてみなければ判断できないことだけに「果たしてこれでいいのか」という不安は常につきまとつていた。



七区は広い。選挙前に現地調査。

選挙カーでの演説は、午前七時～午後八時の十三時間許されている。候補者は、できるだけ選挙カーとともに行動したいが、十三時間べつたり車に乗つてしまふと、疲労のために演説の質が落ち、二十日間の運動が続かないというので、「午前七時～九時は駅前で演説と同時にピラミック、九時～十二時は候補者抜きで、スポットを流しながら住宅地域を回る。十二時～十六時は団地などで小さな演説会をやり、十六時～十八時は商店街、十八時～二十時は、会社を終えて帰宅するサラリーマン・OLなどを対象に、駅前で演説して一日の総仕上げをする」というスケジュールを組んだ。

毎日が遠足のような二十日間

届け出番号は「四」

ついに十一月十五日の公示日がやってきた。準備はどうにかこうにか間に合った。いよいよ本格的な選挙戦に突入するのだ。

この日、午前中に都選管への立候補届け出をすませ、それから運動が開始される。「出たい人より出したい人を」という精神で、私たちは推薦立候補の方針をとった。推薦立候補とは、選挙区内の有権者が候補者本人の承諾書をそえて、立候補を届け出る方法である。市川選の時も、この方法を採用した。

一般の候補者は、ほとんどこの手続きを知らない。しかし、あとで田中角栄がこの方法で立候補を届け出たと聞いて、私たちはあらためて闘志をかきたてられたものだ。今回は国立市に住む藤本ふみ子を推薦人とした。

届け出には、選管関係の文書すべてを担当した小山泰夫があたり、それに山田喜平が同行した。あらかじめ文書の審査をすませていてるので、この日は届け出順位の抽選を行ない、文書を提出するだけである。

都選管に到着した二人は、まず本抽選の順位を決める抽選を行なった。六候補の関係者が出そろつたところで、本抽選である。

番号のついた箸をひく。「四」番であった。山田は赤電話にとびついた。事務所や選挙区内のほうまで、ポスター貼り部隊が首を長くして知らせを待っていたのである。掲示板の四番のところに、一斉にポスターを貼っていく。

この日届け出をしたのは、次の六候補である。

福田篤泰（自民）

長谷川正三（社会）

大野きよし（公明）

工藤あきら（共産）

菅直人（無所属）

川田章（無所属）

福田氏は自民党水田派に所属し、現職の郵政大臣、社会党の長谷川氏は都教組出身で勝間田派に所属している。大野氏は公明党の国会対策委員長、工藤氏は新人ながら共産党の経済政策委員長をつとめる。川田氏は元鎌倉市議で、椎名悦三郎自民党副総裁の秘書をつとめ、分区で十一区にまわった小山省二氏の後継者を名のつている。

菅はこの日、事務所からの届け出番号を知らせる電話で目覚めた。前夜は準備の仕上げで深夜まで打ち合わせがつづいた。

「四番か。七区の定数は四。なんとか四位で当選したいものだ」と考える。
そのころ、事務所でも、部屋中に「四」と書いた紙片を貼りつけ、戦いに立ち向かう決意を新たにしていた。

第一声は団地で

「私が今回、衆議院議員に立候補した菅直人です。桜堤団地のこの場所をお借りして、第一回目の演説会を行ないたいと思います」

武蔵野市の桜堤団地に、私たちの第一声が流れた。ここは五十年の武蔵野市議選のときにも何度か来ており、私たちには身近な場所である。政党の候補者の場合は、駅前など人出の多いところに支持者の動員をかけて第一声をやるのだが、私たちはまだその力がない。夕食時に話題になることを願って、私たちは第一声の場所にここを選んだ。

第一日目はポスター貼りに人手をとられたため、菅は司会者も兼ねる。彼に紹介されて、初めに青木茂氏がマイクを握った。

「参議院の二院クラブはユニークな政治活動をやっておりますが、私は衆議院に一院クラブがあるともいいと思う。今こそ市民が政治に切り込み、やがては市民党にまで大きく展開する。その第一歩として、菅君の立候補に御支援を」と訴える。

次に武蔵野市議の池田勝代さんが応援演説に立った。池田さんは革新無所属を名のり、有害食品の問題など、私たちと共に通するテーマを追っている人だ。そうした地元での活動を織り込んで、た

いへん迫力のある演説であった。

最後に菅が演説を始めた。取材に来ている記者たちが一齊にペンを走らせる。主張の三本柱、すなわち「なぜ立候補したか」、「無所属で一人でも必ずやること」「当選して努力すること」を順に話していく。まだ調子がでないようだ。冬空は晴れ上がって、風もない。団地内に人影はまばらであった。

「しかし、窓の内ではきっと聞いてくれているだろう」菅は、そう考えながら演説をつづけた。

ポスターはせめて二日で貼り終えよう

一方、ポスター貼り部隊は、届け出番号を確認するといつせいに動きはじめた。公営掲示板の「四」の区画に貼るのである。

ポスター貼りは、人手がかかる。何日も前からあらゆる方法で車を手配し、実にさまざまな人に作業をお願いした。事務所に出入りしていた学生、協力を申し出た主婦、地元の住民運動グループの人たち、休暇をとったサラリーマンなどが手伝ってくれる。ポスター、ノリ、ハケ、バケツ、ボロ布、ゴム手袋、ホッチキス、それに選管から配られた地図を持って、二、三人で組をつくって広い選挙区に散つていった。

東京七区は十五市を含み、ポスター掲示板は約千七百か所もある。組織やカネのある政党は、さすがに早く、十五日の午前中にはすべてのポスターを貼り終わっていたようだ。ポスター部隊の実感としては、政党と競争で貼つていけたのは、最初の三十分ぐらい。あとは、私たちの「四」番だ

けが取り残されていた。

本格的なポスター貼りは、夕方からだった。暗くなつてから、仕事をすませたサラリーマンたちが加わつて、部隊も増えた。十数台の車が寒風の中に散つた。暗い道ばたで、水でポスターの紙を伸ばし、ノリで貼り、ホツチキスでとめる、という作業を繰り返す。深夜、作業をしていたら、警戒中のパトカーがしばらく見つめていた、という報告もあつた。選挙妨害とまちがえられたのであらう。

二日間でポスターを貼り終えよう、というのが私たちの目標だった。そのため、事務所に残ったポスター担当者の安江満雄は、五十枚貼れたという電話を受けては喜び、小平市はまだ三割しか貼れていないと聞いては、あせるのであつた。夜十時を過ぎると、

「今、あまり寒いので、お茶を飲んでるんですが、まだやらなければいけませんか」

などという電話が、しきりに入つてくる。それに対し安江は、

「たいへんですが、できればもう少しがんばって下さい」と心を鬼にして答えながへならなかつた。

結局、二日間とも、作業は深夜二時ごろまでに及び、ついに目標を達成することができた。二日間で延べ百名の人間が動いた。

知らない顔ぶれが増えてきた

仕事さえあれば人は集まる、という確信を私たちは持つてはいたが、実際にはそう都合よく、適

当なときに適当な人材が集まつてくるものではない。とくにポスター貼りに延べ百人が動いてくれた直後は、動員力がにぶつた。とくにサラリーマンが動けない。昼間の、選挙カーを中心とする街頭戦では、人手不足に悩んだ。選挙戦三日目の十七日になつて、法定ビラもやつと刷り上がり、これをお配布する人員も必要となつてきた。

昼間動ける学生、主婦、それに比較的時間が自由になる仕事をしている人たちに向けて、田上事務長を先頭に必死の人集めが続いた。呼びかけに応じて、学生を中心にボチボチ人が集まり出した。そのなかの大口の参加者に、早稲田大学雄弁会の学生たちがいた。

昭和四十九年の市川選挙のときに、六、七人の雄弁会の学生が参加した。そのとき一年生だった安江は、その後も私たちのグループの一員として活動を続けてきた。彼はこう語る。

「雄弁会は、弁論、研究、実践を三本柱としている政治サークルだ。日常活動は研究会が主だが、会員には、右は自民党青嵐会のシンペから左はトロツキストまでいるし、先輩にも職業として政治にかかわっている人が多く、政治的な刺激が多い。今回の選挙でも、十数人が新自由クラブの方で働いている。こちらの選挙に参加した七、八人の会員も、政治的な主張に共感を覚えて、という側面よりも、どこの選挙を手伝おうかと考えて、いちばん気軽に参加できるところにきた、という要素が強いようだ。

しかし、保守系の候補者から八千円とか一万円の日当で誘いかかる雄弁会の学生なのに、これだけの人数がただ働きをした、ということは、私たちの運動の主張形態にそれだけのものがあつたということだろう」

その他にも、小金井の佐野浩さんのグループ、菅のいとこの赤木壮吉・茂兄弟、中央大学佐竹寛教授のゼミの学生たち、雄弁会の北村純の高校時代の友人など、いろいろな関係で参加する学生の数があえてきた。

こうして、お互に知らない顔が増えると、コミュニケーションを図る必要が出てくる。その日の仕事が終わってからみんなでとる夕食や、その後、毎晩行なわれるミーティングが、そのための役割を果たした。

眠い眠い

選挙期間中、フルタイムで事務所につめていたのは五、六人であった。

選挙事務長は、田上等がつとめた。彼は二十六歳、慶應大学で法律を専攻し、この選挙のために辞職するまで、市川房枝氏の主宰する「民主政治をたてなおす市民センター」で事務を執っていた。会計事務は藤本ふみ子が担当した。元銀行員で二十四歳。現在は自宅で日本刺繡をやっている。

この二人に加えて、小山泰夫（二十七歳）安江満雄（二十二歳）それに選挙が始まってからは鈴木和夫（二十四歳）玉置春仁（二十一歳）などが事務所につめるようになつた。

事務所の朝は六時過ぎにはじまる。前夜から泊り込んだ連中は、七時から始まる街頭演説の準備に忙しい。外で働く運動員のためには、カイロを用意しておく。ドライバーの小桜や、"ウグイス・ボーカイ"の竹内利寿などが眠そうな顔で出ていくのを見送る。車長は、その日の選挙カーの動きを、七十分おきに電話で報告してくれる。

八時から九時になると、候補者の自宅や、宿舎として使わせてもらつた小金井の西川さん宅から運動員が集まつてくる。ここで再度、この日の人員配置をチェックする。授業に出たがる学生も多く、その調整がたいへんである。

松木康純などは、朝、カイロに火をつけると、毎日の収支報告を事務所の看板に張り出し、朝の駅頭の演説にビラまき要員としてかけつける。九時頃それが終わると大学に向かい、授業が終わると選挙カーを追いかける。夜、事務所に帰り、夕食とミーティング、それがすんでからビラ折り、証紙貼りなどの作業をし、翌日の語学の予習をして、寝袋にくるまつてねる、という超人的スケジュールをみごとにこなしていた。

すべての運動員がボランティアなので、行動を強制することはできない。このため、田上らは毎日スケジュールの調整に大汗をかくことになる。

十時前後になると、お客様が訪れる。じつにさまざまな人が来る。昼になると運動員が集まつてきて、昼間の事務所での作業、選挙ハガキの名簿整理・宛名書き・電話による協力要請・投票依頼・法定ビラのビラ折り・証紙貼り・推薦会ポスターのベニヤ板への貼りつけなどを行なう。昼食は近所の仕出し弁当屋からとる。一食三百円。事務所に泊つたメンバーは、前夜の残りものでもないと朝食抜きなので、うますぎに食べる。昼食後も作業が続く。私たちの仕事は、いつも「どろなわ式」だ。しりに火がついてからあわてて始めるくせがある。たとえば、法定ビラは公示日をすぎること三日目になつて、やっと刷り上がつた。

ビラは三つ折りにする形式になっている。私たちの依頼した印刷屋も忙しいのか、毎日少しづつしか刷り上げてこない。これを機械折りの業者に頼むと、さらに丸一日よけいにかかってしまう。朝夕の駅頭と昼間の団地などで手渡す分が二千枚必要だ。「折り」を業者にたのむと、次の日の分がなくなる恐れがある。そこで、余裕ができるまでは手で折ってしまおう、ということになった。

厚い紙を使ったので、折るのに手間がかかる。証紙のシールも、一枚一枚貼らなければならぬ。選挙カーからは、朝積んで出たビラを全部手渡してしまったから、追加をはやく頼む、などという電話がはいる。五時ごろからはじまる夕方の駅頭演説にビラが間に合わず、二百枚、五百枚という単位で、五人も六人の運動員ができるそばから次々と運んでいったこともあった。

万事こんな調子なので、夜になっても仕事はかなり残っている。夕方からきたサラリーマンたちも、終バスの出たあとまで頑張ることがしばしば。彼らが帰ったあとは、人数もぐっと減る。それでも、一日の疲れと寝不足で寡黙になつた男たちの作業は続く。とくに公示後数日間、事務長の田上などは睡眠二～三時間という日が続き、それを二～三人分の食事をとることでおぎなつっていたものだ。

誰もが必死で仕事をやる一方で、「なんで、オレはこんな金にもならん仕事をやつているんだ」と考え続けた。その答は、選挙が終わって次の運動の展開を考えている今、きっと各人の胸の内にあるだろう。

選挙カーの一 日

ドライバー小桜一利の吐息が白い。選挙カーの出発である。朝七時からの駅頭での演説のために目的地に向かうのだ。国鉄中央線や西武新宿線の、乗降客の多い駅をねらう。

七時前に予定の駅に着き、マイクをセットし、街頭演説の標旗を出す。七時になると、菅はマイクをとり、他の運動員は腕章をつけてビラまきに散る。ビラを渡す手が冷たい。

「私が候補者の菅直人です。ただ今、私の主張を書いたビラをボランティアで集まつた運動員が配っています。よくお読みいただき、私の主張をご理解の上、ぜひご支持下さい」

というようなことを繰り返してしゃべる。足ばやに通る朝の通勤の人たちに、長い演説を聞いてもらうのは不可能だ。ビラと候補者を組み合わせることによって主張内容の伝達をはかる。この調子で九時まで続ける。

これが終わると、菅は個人演説会に出たり、自宅にもどつて休憩したりする。車はドライバーとスポットを流す係二人ほどを乗せて、主に団地を回る。赤信号で止まつた交差点や要所要所に車を止めて、スポットを流す。流し連呼はしないので、すでに通つたところからも、「こちらの方には、こないのですか」などという電話が事務所にくる。しかし、これは仕方がない。

昼食後、菅も車にもどり、団地や西武線・武蔵野線などの小さな駅の周辺で街頭演説をしていく。ほとんど毎日のように、サラリーマン同盟のメンバーが応援演説についてくれる。

予定の場所に着くと、スポットを流している間に菅らが車の屋根に上がり、スポット係が菅を紹介して演説が始まる。運動員は、通りかかる人たちにビラを手渡す。朝夕の駅前の演説とは違つ

て、ひと通りしゃべったところで終わりにし、次の目的地に向かう。

夕方五時半ごろから駅前に車を止めて演説を始める。前述のように、公示後しばらくは照明の用意がなかつたのだが、暗いとイメージが弱い、という意見が夜のミーティングで出て、五日目からライトをつけることにした。仕事を終えて会社から駆けつけた片岡が、司会役をつとめる。

「ただ今より、革新無所属として衆議院選挙に立候補しております菅直人の街頭演説会を始めます。予想以上に早くきた保革伯仲時代の中で、私たち市民の感覚を政治に反映する力を失つた既成政党に、政治を任せておくことはできないと思います。どうか菅直人の演説を最後までお聞き下さい」

菅の演説の内容も、二十日間の選挙戦の中でだんだん変わつていった。最も特徴的なことは、既成政党を名指しで批判していったことである。『既成政党』対『私たち』という選択を有権者にしてもらおう、という意図からである。

選挙法の規定で、街頭演説は夜八時に終わる。片付けをし、付近の商店などにあいさつをして、選挙カーは事務所へ向かうのであった。

カンパをポンと五千円

十一月二十日、土曜日。夕方の街頭演説を吉祥寺駅北口で行なう。東京でも有数の繁華街である。週末の夜をすごす若者たちが、三々五々集まつてくる。女の子のグループが車上の菅を見上げて「アツ、あれヨ」という感じで肘をつき合う。ポスターの顔写真が、たいへんできがよく（ある

男性運動員にいわせると、ハンサムすぎて男の票が入らない、ほど）その種の関心もかなり集めたようだつた。

このころから、菅は演説の内容を少し変えた。なるべく具体的な問題を語ることにし、とくに薬の使いすぎの問題をとりあげた。また既成政党の問題点を名指しで列挙する。やはり、抽象的な話だけをするよりは、このほうが反応が大きいようだ。

立ち止まってじっと話を聞いてくれる人も多くなってきた。事務所にかえつた街頭部隊のメンバーは、「今日は三千五百円」、「今日はなんと一万七千円」というように、街頭で受け取ったカンパの額を喜々として報告するのが日課となつた。一日中事務所にこもっている者にとって、それは大きなはげみになつた。

カンパをしてくれる人もさまざままで、つかつかと選挙カーに歩みよつて、だまつて五千円札を差し出した中年の男性、「今日は、いい」とほほえみながら一万円をくれた初老の婦人、また「金ないんだけど」といながら、ポケットをさぐつて十三円カンパしてくれた若い人。一人ひとりの好意がうれしく、毎日が感激の連続だった。

こんな参加者もいた

ある日、事務所に候補者に対するインタビュー申し込みの電話がはいつた。国際基督教大学の学生だという。街頭演説の終わった夜八時過ぎ、事務所にきてくれば、ということで田上はOKを出した。

菅は夕食をとりながら「市民とは」「市民の論理とは」といった質問に答える。それが終わって、今度は菅が例の如くオルグを始めた。この学生の名は、西村亜希子。誰かにインタビューし、それをレポートせよ、という課題が出たところに、偶然街頭で受けとった選挙ビラを見て、菅にインタビューしようと思いついたそうだ。

オルグのかいあって、西村はその後、毎日のように運動にやつてきた。これについて、彼女はこんなことをいつている。

「もともと、政治にはあまり関心がなかった。だけど、自分の回りの学生たちは就職とかお化粧とか身の回りのことしか関心をもっていないのに、この事務所にくると、同じ世代の人たちが、こういう活動をいきいきとやっている、ということがとてもショックだった。運動に参加して、政治を身近に感じるようになった」

もう一人、私たちを大喜びさせた参加者に伊藤千尋がいる。彼女は聖心女子大の学生で、候補者夫人の菅伸子が通っていたフランス語教室のベビーシッターをしていた。吉祥寺に住む彼女は、掲示板のポスターを見て「あつ、これは源太郎君のお父さんだ」とピンときたそうだ。この父子、実によく似ているのである。そこで早速、「何か手伝うことはありませんか」と電話をくれた。菅源太郎（四歳）は、ここで一躍男を上げたのである。

活気あふれる事務所

日ごとに運動員が増え、特に学生の参加が目立ってきた。ということは、日々選挙事務所の平均年齢が下がる、ということでもある。昭和二十一年生まれの菅や、片岡など、まだまだ若いと思っていた者も、三十年代生まれの運動員が何人もいることに気づいて、溜息をついたものだ。

しかし、私たちの選挙では、誰もが完全に対等な立場で運動し、自由に意見を述べ合った。

「ここには『先生』がないんですね」

ひんぱんに取材に訪れた記者の言葉である。私たちにとっては当然のことだが、新しい運動員も、誰一人として菅を「先生」と呼びはしなかった。彼らも、「そういう運動なんだ」ということをハダで感じ、ごく自然に「菅さん」と呼んでいた。

役割分担も、半ば自然発生的に生まれていった。公示直後は田上事務長に集中していた仕事も徐々に分散され、情報と権限も田上の手を離れていく。街頭演説など、選挙カーと候補者のスケジュール作成は円山順昭（大学院生）、推薦会ポスターの掲示の依頼などは安江、選挙ハガキと開票立会人選定を玉置（学生）がそれぞれ担当し、これで田上もやっと人並みに眠ることになった。

選挙戦も終盤を迎えるころには、彼の役目はマスコミなど外部の応待と、事務長としての判断機能を果たすことになり、事務所で一番ヒマなのは事務長だという状態となつた。それだけ、若



メシが大変。二つの電気釜がフル回転だった。

い運動員がいきいきと仕事をしたということだ。その中の一人で、公示後三日目に安江の陣中見舞いにフライと現われ、そのまま最後まで泊り込んでしまった玉置はこう語る。

「選挙の感想は、面白かったの一語に尽きる。とにかく、自分の判断で仕事がやれることがすばらしい。参政権とは、与えられた投票だけをやるのではなく、まず自分から働きかけていくということだ。この運動はそれができる場だ」

夕食とミーティング

ある夜のメニュー。

おでん

いり豆腐

野菜サラダ

つけもの

ご飯

毎日二十人から三十人が事務所で夕食をとる。すべて外食にしよう、という案もあつたのだが、福田裕子などの「事務所に帰れば暖かい食事が待っている、という気持はとても貴重なものだと思う」という意見が通り、ご飯だけは事務所で炊き、おかずは菅の自宅などで作つてもらうことになつた。

公示前に買い込んだ大鍋を、『銀輪部隊鍋連携係』を名乗る玉置が昼すぎに自転車で菅宅へ運び、

出来上がつたものを、今度は藤本ふみ子が車で持つてくる、というのが日課になつた。夕食は事務所内で仕事をしている人間が先に済ませ、街頭演説を終わつて八時過ぎに帰つてくるメンバーと交替する。その日の失敗談、自慢話が飛び交い、一日で最も楽しいひとときである。

夕食が終わると、全体ミーティングが始まる。これが私たちの運動の最高決定機関である。実にいろいろなことが報告され、討議の対象となる。たとえば、街頭で手を振るべきか、候補者にタスキを掛けさせるか、こちらから積極的に握手を求めるべきか、流し連呼はどうするかなど。

これらは公示前に一応やらないという結論を出していたが、実際の運動が始まると、他候補の運動も見てみると、みすみす取れる票を逃がしていいのではないかという不安にかられる者もいて、しばしば大激論となつた。こうした議論が出ること自体、このグループの運動の特殊性を表わしているが、議論の仕方もやはり、他と比べれば独自のものだろう。

意見の採用にあたつては、その内容だけが問題となり、決して候補者だから、事務長だから、古いメンバーだから強い発言力を持つ、というようなことはなかつた。

寝袋と修学旅行

夜が遅く朝が早いので、泊り込み態勢は不可欠であつた。事務所には二、三人分のふとんと二つの寝袋が用意され、多い時には七、八人が泊つた。菅の自宅は事務所から歩いて十分の距離にあり、ここにも三、四人の宿泊の準備がされた。また、小金井の西川信枝さんが結婚相談所を開いているマンションにも三人が泊つた。

事務所の寝心地は最悪であった。なにしろ床の上に直接ふとんを敷いて寝るのである。また、どうしても夜の作業が残り、寝るのは早くても十二時過ぎになってしまふ。一方、朝は遅くとも六時半には起きなければならないので、疲労がどんどんたまっていく。事務所内を禁酒とした田上事務長の英断は、まったく正しかつた。これで酒など飲んでいたら、とうてい二十日間は持たなかつたろう。

ある晩、事務所に右翼の来訪があつた。今回の選挙では「黒いピーナッツ」シールを選挙ポスターに貼り付ける、という選挙妨害が各地で続発した。彼らはこれに怒つたのだろう。

まず「あのシールはメエラがやつてゐるんだろう」という、きわめて非紳士的かつ非論理的な電話が、十一時ごろ事務所にかかってきた。否定論理型の運動を否定し、市民常識をスローガンに戦つてゐる私たちが、あのような手段を使うはずはないのだが、彼らにはそれが理解できない。

この夜は、安江・玉置・竹内の早大雄弁会トリオが事務所にいたのだが、電話に出た竹内が受話器を叩きつけて、「不愉快だ。右翼です」

と顔をしかめた。電話はこれですんだが、今度は深夜三時ごろになつて、入口のドアをガタガタさせる音や、「あつ、ここだ、ここだ」などといふ声がした。目をさました竹内は、一一〇番しようかと電話に手をやりながら、他の二人を起こすかどうか判断に迷つた。男たちは、なおも外をウロウロしている。この日に限つて、入口のカギをしめておいたのが幸いだつた。やがて男たちはあきらめて立ち去り、竹内の長い夜も無事に終わつたのである。

一方、菅宅に泊つたメンバーの多くは、寝心地のいい部屋があつたにもかかわらず、やはり十分な睡眠はとれなかつた。というのは、藤岡郁子、金子正子の二人の大学四年生と、菅伸子が連夜にわたつて「修学旅行」を彷彿させるような雰囲気を作り出したのである。

候補者はビールを飲んで（ここは禁酒ではなかつた）、選挙期間中の日記がわりのテープの吹き込みをやつて寝てしまふ。その後、この女性トリオは夜食をつまみながら、一杯また一杯、つい話が長くなつて、気が付くと午前二時、三時といふこともしばしばだつた。それでも、朝の駅頭演説に参加するメンバーを除けば、九時ごろに起きればよいため、事務所に比べれば、ここは天国であつた。

最もよく寝たのは、"西川事務所"に泊つたメンバーだろう。寝心地はいいし、誘惑が少ないのである。朝、西川さんのマンションから事務所に出てくる運動員の顔は希望に満ち満ちていた。

知らないところで知らない人が

人口約百五十万人、有権者約百万人という東京七区で、私たちが短い選挙運動期間中に直接会える人の数は限られている。しかし、組織のない私たちにとっては、表面的な運動だけでなく、見えない部分での運動の広がりが重要な意味を持つてくるのもまた事実だ。私たちの運動がかなりの成功をおさめることができたのも、間違いなく、さまざまな人のさまざまな運動のおかげである。

東村山市の主婦で、運動を積極的に支持してくれた相沢さんという人がいる。この人はなんと二度も、見ずしらずの人から「菅さんに投票しませんか」といわれたそうだ。また、私たちが街頭で

ビラ配りをしていても、実にさまざまの人たち——主婦、サラリーマンから、杖をついたおじいさんへ至るまで——に、「必ず入れますよ」などと声をかけられた。こういった声を聞くたびに、私たちには、この運動が徐々に定着しつつあることを実感し、おおいに励まされた。

ハガキ書き狂騒曲

最終戦の焦点は、ハガキ書きだった。枚数は三万五千。十一月十七日に印刷が仕上がりってきた。しかし、ハガキ書きはどうしても大量生産するわけにはいかず、一枚ずつ手書きしなければならない。そうかといって、私たちは、大量のアルバイトをやとうようなまねはできない。そこで、まずできるだけいろいろな人にお願いして、自分の名前で出してもらうことにした。

この方法は、決して能率があがるわけではないが、運動の拡大には有効で、一石二鳥といえなくもない。十一月二十一日から担当の玉置が電話を入れはじめ、二十二日から十枚、二十枚とボツボツ取りにきてくれる人が出てきた。

回収作業に手間取ったり、期間前にポストに入れてしまう人がいたりといったアクシデントはあつたものの、最終的には、一万三千枚の名前入りハガキを書いてもらえた。残りは二万二千枚。ここで担当が玉置から北村純にかわる。

自分に任せられた二万二千枚のハガキの山を前に、北村は頭をかかえた。一口に二万二千枚というが、実際に目にしてみると相当なものだ。あと三日間でどうやってこの山を片づけるのか。とにかく、仕事をはじめなければならない。街頭演説の反応にしたがって、団地居住者のうち、

まず六〇年安保のころ学生だった世代、次に大正・明治生まれの人、最後に新有権者（残念なことだが、前の二つの世代に比べて、政治的な関心が低いという印象を、選挙戦を通じて感じた）を、朝の五時までかかってリストアップしていく。このリストをもとに、議員であろうが、主婦であろうが、記者であろうが、事務所にきた人にとにかく十枚ずつでも書いてもらつた。夜になると、サラリーマン勢がどってやってきて加勢する。

結局、この日は常時二十名が事務所につめて作業したが、それでも二万二千枚にはほど遠い。北村はまたモウロウとした頭をかかえた。もっと能率を上げねばならない。その夜はついに運動員のガールフレンド、ボーイフレンドにまで電話をして大量動員をかけ、住所の共通部分を印刷するため、事務所の隅でほこりをかぶつていた年賀状の印刷機までひっぱり出された。

かくして、ハガキ書きの最終日十一月三十日がやってきた。朝から事務所中の人が猛烈なスピードでハガキの山を作っていく。努力のかいあって、この日午後十一時五十分、百枚近くの書きそんじを出したものの、ついに二万二千枚全部を書き終えた。二日間合わせて、動員された者は延べ百人に及び、北村は半分眠りながらローラーを回しつづけた。

中にはかなりきたないハガキを受け取った人もいるだろうが、それにはこういう事情があった。どうか許していただきたい。

反応を肌で感じた電話作戦

選挙運動の種類にもいろいろあるが、人々の反応が即座に返ってくるのは、演説と電話だけであ

る。電話作戦では、推薦会ポスターの掲示の依頼、政見放送の日時のお知らせ、菅論文が掲載された『朝日ジャーナル』のお知らせなどを、投票依頼にからませた。また、特に積極的な相手には、家族や知人への呼びかけをお願いした。しかし、相手が忙しいことや機嫌が悪いこともあります。反応がストレートに返ってくるので、ときにはきわめて大きな精神的ダメージを受ける。

「こちらは菅直人選挙事務所ですが」

「え？」

「菅直人選挙事務所ですが」

「ああ、選挙の話はもういいよ」ガチャーン！

精神的に相当タフな人間でも、これでは立ち直るのにちょっと時間がかかる。

私たちは、まったく何の関係もない人には、電話をするのはよそうと考えた。電話作戦を使った主な名簿には次のようなものがある。

『シビルミニマム』読者

市川選挙の協力者

田中栄の選挙の協力者

菅の出身校、東工大のOB名簿。

これらの名簿は、割合に質がよく、十人のうち三人か四人からは、色よい反応があった。しかし、その後は、運動員の同窓会名簿など、実質的に無作為抽出と変わらないものを使つた。

これはやはり反応がよくない。七区の場合、十万票を超える（菅が大量得票すれば当選ライン

が下がるので）、当選が可能になる。だから、有権者百万人に対して十万人、つまり、十本電話をかけて、そのうちの一人から確かな手応えが返つてくれれば一応の成功といえる。このように、言葉でいつてしまえば簡単だが、実際に十本電話をかけてたった一人からしか好意的な答えが返つてこないし、その心理的な消耗はたいへんなもので、選挙運動の中でこれほど疲れる仕事はないのではないか、と思われたほどである。

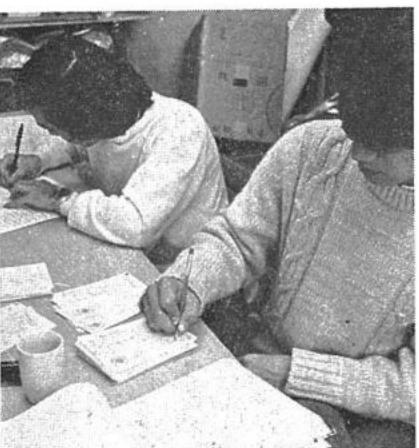
こんなこともあった

ある日、菅が吉祥寺駅北口で演説していると、共産党の地区責任者と名乗る男が、菅選対の責任

者に会いたいと申し入れてきた。司会をしていた片岡が応待に出ると、

「もうすぐ工藤候補の車がくるので、三十分間この場所をあけてほしい。君たちはずっとここを使っているのだから、別の場所へ行けばいいではないか」という。

片岡は、



選挙用ハガキ担当の北村純は、その効果を疑い、いつも不眠不休でがんばった。

「私たち、いつもこの時間に駅前で二時間ぶつ通しの演説を行なってきた。その間に他の駅へ移動すれば、それだけで三十分ぐらいかかるてしま

う。もし工藤候補がここで演説したいなら、十五分ずつ交替でやろうではないか」と答えた。

共産党の人は一度ひきあげたが、しばらくしてまた、何としても三十分間あけてくれ、といつてきた。今度は哀願調だ。司会と二役で忙しい片岡は、いらだちながら、

「四年の参院選のとき、新宿で共産党の候補者と市川候補がぶつかった。そのときにも十五分ずつという方式をとった。選挙というのは、候補者をどれだけ効率よく動かすかにかかっている。だから、それぞれが十五分ずつムダにするのが公平だろう。有権者は両方の候補を比較したいはずだ。公開討論会でいこう」といつて話を打ち切った。

共産党の人は、不満げではあったがそのままひきあげ、相前後して工藤候補の選挙カーが駅前広場に入ってきた。マイクを握った片岡は、「これから十五分ずつ、両候補が演説を行ないます。ぜひ既成の政党と私たちの運動の主張を比べていただきたいと思います」といつて菅にマイクを渡した。しかし、工藤候補の選挙カーは、数分後、静かにその場を立ち去った。

終盤に近づいてから同じような出来事が三鷹駅前でも起った。この日、菅は立会演説会に出かけるため、夕方六時半から七時半まで、選挙カーを離れた。他の陣営は、候補者がいなくなると連呼だけになるが、私たちは入れかわり立ちかわり、一時間ぐらいは運動員の演説でうめてしまう。

たまたま三鷹駅前には、保守系無所属で立候補していた川田章候補の選挙事務所があった。私たちの演説が続くうちに、川田派の運動員は黙つていられなくなつたらしく、連呼を始めた。

私たちが「マイク合戦になつてしまつたので、少し休む」とスピーカーで流すと、むこうもすぐ

やめてしまう。それでは、こちらが始まると、相手もまた始める、ということが二、三度続き、ビラ配りをしていた北村純が、川田派の運動員と口論を始めた。そこへ川田候補が立会演説会から戻り、川田候補を乗せた選挙カーは駅前を出ていった。

「月光部隊」活躍す

選挙戦を通じて他陣営とのトラブルは、きわめて少なかつた。中盤以降、新聞社の調査結果などに表われた菅の「善戦」も、社共両党などの内部引き締めの材料に使われた程度で、無風選挙区に波風を立てるまでには至らなかつた。もともと菅はまったく無名であり、非難中傷の材料がなかつたこともあるだろう。ただ、選挙妨害ということをいえば、實にひんぱんにポスターを破られた。

各地で「黒いビーナツツ」と書かれたシールがポスターに貼られる、という事件が起つたせいもあるのだろう。警察や選管の見まわりも厳重で、ほとんど毎日、私たちの事務所に各市の選管からポスター破損の連絡がはいる。七五年の市議選の経験から、よいムードになつてくるとポスターが破られ始める、ということが私たちには分かっていた。市議選のときには終盤になつて破られたのに対し、今回は初日から破られるケースが続いた。一方で、そのことを喜びながらも、毎晩、貼り替え作業のために広い選挙区を走り回らねばならず、たいへんな作業となつた。この貼り替え部隊を、私たちのは「月光部隊」と呼んだ。

破る人は「きれいに」破つてはくれない。一部残っている上に、また別のポスターを貼る、といふのは、なかなかコツがいる。「月光部隊」は作業中に警戒中の警官から声をかけられ、貼り終わ

るまで見張られたことが何度もあった。

ほかにも選挙妨害というほどではないが、愛嬌程度のイタズラでおもしろい話がある。ある日、事務所に若い女性から電話がかかってきた。

「あなたたちの運動を新聞で知りました。私は武蔵野女子美大の学生ですが、クラスを中心に三十万円のカンバを集めました。あした、学校まで取りにきてくれませんか」という。

「ホントですか」と、電話を受けた安江は喜んだ。ただ、武蔵野美大、女子美大はそれぞれ存在するが、『武蔵野女子美大』というのが実在しないことに若干の違和感を感じつつ、「事務所も人手不足で、ちょっと受け取りにはいけませんが、カンバの集め方なども教えていただきたいし、こちらにおいで下さいませんか」と返事をした。

この話はたちまち事務所じゅうに伝わり、夕食のときの話題も『女子大生の三十万円』に集中した。

さて、翌日、約束の一時を過ぎても、三十万円と女子大生は姿を見せない。安江は田上らの嘲笑にもめげず待ち続けたが、ついに彼女は表われなかつた。かくして、このイタズラ電話は、二日にわたって事務所の話題を独占した。

雰囲気が変わってきた

変わったマスコミの姿勢

今まで述べたような次第で、名もなく金も組織もない私たちの衆議院選挙への挑戦は統けられた。しかし、無風選挙区といわれる東京七区での素人の立候補である。初めから、私たちの期待する反応が得られたわけではなかつた。

取材にきたマスコミの記者の姿勢も、初めのころは興味本位に見えることがしばしばであった。市民グループが素人を立てて選挙をするという『話の面白さ』に対しての取材が多く、このグループが何を考え、どういうことから選挙をすることになったかという点については二の次であった。中には「だいじょうぶですか」と、気が気でないといったふうに問う記者もいれば、多少あなどつた様子で、何を聞くにも「自分にはわかっているんだけども、まあ答えてみな」という態度も見受けられた。

しかし、次第に協力的になり、私たちをまじめに取り扱う姿勢が見えてきた。「君たちのところは取材していて面白い」という声がふえてきた。彼らは職業上当然さまざまの選挙事務所を訪れているが、そこでは、マスコミ係ともいるべき人の模範的な表向きの解答が戻ってくるばかりだ。

そういう意味では、事務所を回ってその解答用紙を集めるだけであり、面白くも何ともないといふ。

ところが、私たちの場合は違つているらしい。だいたい、そういう担当者がいない。前もって連絡がある時は別だが、そうでなければ、そこに居合わせた連中が取材の相手になる。だから、記者の一つの質問に、あらゆる方向から、時にはまったく違つた答が返つてくるのである。それに、事務所では候補者も事務局長もなく、一つのテーブルを前に数十名のメンバーが「連呼はどうするか」とか、「明日はどこを回ろうか」といったことをワイワイガヤガヤ話し合うのであるから、驚きであつたであろう。

こういう私たちを見て、マスコミの人たちは、ますます興味を深め、最初は私たちに他では見られないような突飛な選挙運動を期待したらしい。しかし、私たちの選挙運動は理想選挙そのものであり、決して奇をてらうようなことはしなかつた。それに、主張の内容がまともあり、私たちの対応がまじめで、本音を出して接していることを認めるようになつていった。

私たちに接する時の態度も熱心で、質問も「どうですか」と見解を求めるようなものになつてきただ。また、私たちの作戦会議中に折り合わせたような時にも、真剣に耳をそばださせているのであつた。

共感してくれた同世代の記者

取材時の態度が変わるとともに、彼らは私たちの運動に共感し、協力してくれるようになつた。

中でも、同じ世代の記者の協力ぶりは、私たちも驚くほどであった。

アンケート調査の結果を知らせてくれたり、「駅前で菅さんの演説を聞いたが、医療問題の話が多過ぎるのではないか。あの演説だと、聴衆が立ち止まつても何のことかわからんのじゃないか。もつと派手なジエスチャーやまじえたら」と、アドバイスしてくれたりもした。中には、私たちが事務所でビラの証紙貼りなどをしていると、それを手伝ってくれる人もあつた。選挙の結果に対して、とても記者とは思えないほどの興奮ぶりで、次点といふ結果を本気になって惜しんでくれたのも彼らであつた。

どうして、私たちにこれほどまで共感をもつたのであるか。某新聞記者は、次のような感想をもらつていた。
「自分と同じく大学闘争をくぐり抜けてきた世代の良識派グループが、現在も活動を続けていると
いうことに驚嘆した」

新聞記者の三十代と言えば、地域のキヤッピを担当する年代である。その記者は「どうして、もつと早くこのグループの存在を連絡してくれなかつたのか」という。そして、「僕はサラリーマンになつてしまつた。今は組織の中に取り込まれているから、自分がここで何かをやるということは考えられない。動くきっかけがないんだ。自分がやるんじやなくて、ついつい見る側にまわつてしまつてゐるんだ」と小声で打ち明けていた。

さらに別の記者は、菅に「どうして今の職業を選んだのか」と聞いた。菅が、「比較的自由な仕事を搜して選んだのだ」と答えると、

「いやあ、そりや、まちがってなかつたですよ。僕は動こうとしても自由に動けないんだ」と語っていた。

毎日のように取材にきていた記者は、短期間のうちに運動の盛り上がりを肌に感じていたので、投票日までには、もっと支持が拡がるだろうと見ていた。しかし、実際の紙面では、上方で調整されるらしく、「政党候補にはとてもかなわないであろう」という論調で、「七区は無風区」という表現は最後まで変わらなかつた。

分区によって七区から分かれた十一区が、「激戦区」として七〇%を上回る投票率であったのに對し、七区のこのような「無風区」扱いが、有権者に「投票しても変わらない」という感じをいだかせたのか、七区の投票率（六一%）が前回の衆議院選より低下し、東京唯一の低調選挙区となつたのは、残念であった。

終盤になって強まつた反応

率直にいって、二十日間という短い期間で、これほど盛り上がるとは思つていなかつた。周囲の反応が運動員の士気に及ぼす影響は、はかり知れないほど大きい。投票日の一週間ほど前、ある新聞社のアンケート調査の結果、菅の支持率は約一〇%だという情報がはいつた。このときは、連日の疲労がたまつて意氣消沈気味だった運動員の顔が急に明るくなり、それが最後まで運動をやりとげる原動力になつた。

ここで、具体的にどのような反応が出てきたかを、簡単に述べておこう。

街頭演説

当初は、菅を知らないか、あるいは知つても興味がないというふうにチラツと見て通り過ぎる人が多かつたが、選挙戦も中盤になると、選挙ポスターなどで名前と顔が一致しはじめたのか、「ああ、あれだな」といった視線を感じるようになつた。また、はじめは、演説内容よりも、菅と市川房枝氏をセットで知ることにとどまつていたが、次第に、何をするんだろうといった興味が出てきたらしく、ビラひとつでも積極的に手を出す人が多くなり、それにつれて街頭カンパも活発になつた。

同世代のサラリーマン風の人が、わざわざガードレールの上に登つて菅に握手を求めたり、また車イスの人が熱心に演説を聞いたあとカンパをしてくれたこともあつた。この人は、菅が立候補したときから菅に投票しようと決めていたといい、「今日は演説が聞けてうれしかつた。落選してもいいから、これからも運動だけは続けて欲しい」と激励してくれた。

電話での反応

事務所にかかるくる電話には、「革新無所属」ということに関するものが多くつた。「保守系無所属なら自民の公認もれだが、革新無所属といふのはいつたいどこの公認もれなんだ?」とか、「無所属で何ができるのか」といった内容のものもあり、はじめのうちには「無所属」の説明から話を始めなければならなかつた。

後半に入ると、次第に激励の電話がふえてきた。その内容も、「いま、学生時代の名簿をもとに菅に入れろと電話しているんですよ」とか、「今日、会社で菅さんのことについて話しましたよ」といったものが多く、ここでも運動が拡がりつつあるという実感を強めた。

立会演説

立会演説会には、最初から興味をもつてゐる人たちが集まつてくるわけであり、また候補者の中には、支持者に動員をかけている人もいる。しかし、そうした中にも、演説が終わつてから「もつと君のことを知りたいので、ビラを下さい」とわざわざ訪ねてくる人も多く、また「こいつに決めた」とつぶやく人がいたことを、運動員の一人が耳にしたこともある。菅の演説が終わると、席を立つ人の姿もめだつた。

こうした反応の盛り上がりは、候補者をはじめ参謀格の連中の心をも微妙に変えていった。「敗」の不安は日を追つて薄れ、終盤には、「もしかしたら」という可能性も出てきた。「当選した場合にはどうするか」ということを、本気で“心配”したこともある。片岡はこういつてはいる。

「選挙の二十日間というのは、実におそろしい期間だ。最初は、こんな短期間のあいだにどこまで浸透するのかと、かなり不安だった。ところが今では、あと一週間あつたら当選していただろうと思うほどだ。正直いって、ずいぶん浸透するもんだなあと思う。ぼくたちの場合、やればやつただけ確実に支持者がふえていった。選挙について何も知らないぼくたちがここまでやつたのに、他の陣営はあの程度のことしかやれなかつた。アメリカの大統領選挙のように長期にわたるものもやれ

ば、誰にも負けない自信がある」

「組織選挙では、人間関係があらかじめ決まつていて、それをどこまで押さえることができるかといふ歩どまりの発想だが、ぼくたちの場合は、人間関係を拡げていくという拡大発想だ。今回の選挙で、この拡大発想でもやれるんだという自信がついた」と、菅も感想をもらしている。

七万一、三六八票——次点

十二月四日夜七時を少し過ぎたころ、選挙カー部隊は吉祥寺駅頭についた。四日は公務員のボーナス支給日だ。そのせいか、初冬の冷気が漂う街には人があふれている。

最初はライトをつけなかったので、夜になると演説の準備を急いでいるそばを、コートのえりを立てて足早に人が通りすぎる。時おり、私たちのほうにチラリと視線を投げてゆく。マイクがのび、照明用のエンジンが動き始める。車の上に、候補者の菅、片岡、そして青木茂氏の三人の姿が照らし出された。これから、最後の演説が始まろうとしている。



顔も見える。

「私はこういうことを聞いたことがあります。日本のインテリ、いや自称インテリという人は、あれもだめだ、これもだめだ、とばかりいって、投票を棄権している。しかし、田中角栄の後援会である越山会の人たちは、決して棄権しないだろう。ショッちゅう棄権している自称インテリと越山会の人とでは、この民主主義の社会において、どちらが力を持つだろうか。あれはだめだ、これはだめだというだけでは、決して政治状況は変わりません。私はやはり積極的に参加してゆくことが、こうした状況を変えてゆくのだと思います」

最後の街頭演説を、菅はこう切り出した。今では彼も聴衆の顔を見ながら話せるようになつて、話しながら、これが最後の演説であるという思いが去来したのであらう、終わりに近づくにつれて、声の調子が高ぶつていつた。

つづいて青木氏がマイクをとる。

「みなさん、あと三分でございます。自民党の票を一票でも減らすことによって、世界の良心から持たれているところの疑惑を晴らしましよう。そしてまた、党利党略に明け暮れて国民のくらしを良くすることを忘れてしまった野党にも、反省を求めようではありませんか」

そしてまもなく八時。司会の片岡が「終わりのあいさつのマイクを手にした。「私たちの選挙は、カンペとボランティアでやっております。菅直人の主張に、そして私たちの運動の趣旨にご賛同いただける方は、ぜひ菅直人に投票していただきたいと思います。これで街頭演説を終わります。ありがとうございました」

拍手が起つた。こうして、最後の街頭演説が終わったかに思えたとき、候補者菅は、片岡の手からマイクをもぎとり、「最後に一言だけいわせていただきたい」と、打ち合わせにない演説を始めていた。

「私は、この選挙運動をやってきて、いま大きな喜びを感じております。私たちが選挙運動を始めたとしたときには、事務所もなければ組織もなかった。金もカンペで集まるだろうという期待の中になかなかつたのです。それが、この二十日間のうちに非常に大きな拡がりとなり、私たちの仲間があふえてきています。

私は、今回の選挙を、この運動をやろうとしたことが、間違いではなかつたと痛感しております。明日は、皆様方の政治に対する怒りをぜひぶつけていただきたい。できれば私の名を書いて、もし他の人を支持しているのであれば、その名前を書いて、ぜひ積極的に選挙というもので怒りをぶつけていただきたいと思います。

これからも、皆さん協力を得て、いろんな形で市民運動を拡げていきたいと思います。どうもありがとうございました」

さらに大きな拍手がわいた。八時を少し過ぎていたかもしれない。車上の照明が消えても、人々の輪は、しばらくはくずれなかつた。

とにかく、私たちの市民選挙も、こうして終点にたどり着いた。

東京七区は翌日開票区である。開票結果は六日になるまでわからなかつた。しかし、私たちは、数日前に新聞の調査結果を聞いていた。それは、支持率が九・十一%というものであった。だか

ら、グループのリーダーには、およその見当はついていた。ただ、私たちの運動は、終盤に近づくにつれて反応が非常に強くなってきていたのを実感していたから、終わりの数日で、もっと伸びるかもしれないという期待はあった。

六日早朝からテレビの開票速報が流れだした。午前中の段階では、かなり善戦していた。しかし、昼過ぎになって、四人の当確が決まった。菅は次点であった。

そのとき、選舉事務所には、菅を含めて五、六人が寄り合っていた。開票結果が知らされたときにも別段、空気は変わらなかつた。前日の投票率が六〇%とわかつた時点で、すでに当選はないものと思つていた。予想が裏づけられたにすぎなかつた。

これで運動がつづけられる

私たちの選舉は、こうして終わった。吉祥寺での菅の最後の演説にあつたように、私たちは運動の拡がりを実感して、新しい状況の可能性を立証できたということに自信を深めた。「勝ち残れた、これからも運動がつづけられる」——これが最も大きな成果であつた。

今回の選舉に協力してくれた人も、思いは同じであつたようだ。青木氏と古宮杜司男氏は、次のような手記を寄せてくれた。

「菅直人君と共に闘つて」——全国サラリーマン同盟代表 青木茂

正直いってたいへんびっくりした。誰が考へても無風地帯といわれる選舉区に、組織も金もネー

ムバリューもなく突然立候補しようというのだから、卑俗的な常識からいえば無謀も甚だしいといふことになる。

しかし、レディ・メードの政治の中でむくわれるところが全く少なかつた庶民大衆の希望をいささかでも代弁してくれるグループがほしいということは、時代の要請であるには違いない。

この意味で、菅君の選舉は勝敗はともかく、みじめに負けてもらつては市民運動にたずさわるものとしてはたいへんこまつたことになる。だから、一票でも多くとつてほしいと私は私なりに努力はした。

しかし、腹の中では五万とれば上等という皮算用をしていただけに、七万の票がとびだしてびっくり仰天だつた。

実質的には大勝利である。政治に新しさを求める国民の潜在心理がいかに強いか、いまさらのよううに思い知つたわけであつた。

このように、菅君の選舉が実質的に大勝利であつただけに、将来的視点にたてば、きわめてむづかしい局面を迎えたというのも事実なのである。課題が少なくとも五つある。

第一に、政治は絶対に遊びではない、七万とつて大成功だつたのだからこれでよしといふものではない。菅君と彼に献身したグループ諸君は、私をふくめて新しい政治をきりひらくために、命のある限り闘い続けるということを國民諸君の前に約束したのだから、スタートをきつた以上、後退は許されない。さしあたつて今年（昭和五十二年）の參議院選舉をどうするのか、それがすめば恐らくや衆議院選舉がまたやってくるし、地方選も近づいてくる。どういう態度で七万票の期待に応

えるかが真剣に討議されなくてはなるまい。

第二に、菅君の決断によつて東京七区の政治不信族の食欲はみたすことができた。しかし、全国民レヴェルにおいて今後どのようにアタックが可能なのか、グローバル・レヴェルにおいて新しい政治勢力をどのようにして組織化するのかという課題がのこる。七万票の重みは、「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」がファットと集まつてファットと消えてゆく集団では許されなくなつたことを、繰り返し銘記しておく必要がある。

第三に、それだけにはつきりした政策理念と政治展望を固め、それに対する理論武装が必要になつてくる。革新無所属というのはやさしいが、保守革新の差はなにか、自民・反自民なのか、資本主義対社会主義なのか、こことのところを明確にするとともに、無所属をうたう以上、他の革新政党と政治理念においてどこが違うのかをはつきりとだしてゆく必要がある。

第四は、市民概念の明確な規定である。市民という言葉ほどボビュラーなわりに、正確に内容がつかまえられていないものはない。いまだに、市民とは都市在住者、農民に対する概念といったような、通俗理解が横行しているのが残念ながら現実である。正確な市民概念を一般国民に、どのように理解してもらいうのかという努力も、わかりきったこととしてみすててしまふには日本の現状はおくれすぎている。

第五に、市民層がいま具体的に求めている個々の要望はなんなのか、それを革新無所属の立場で一步一步実現してゆくためのスケジュールとプログラムをどうするのかといった、よりつめた討論も必要になつてくる。総論はわかるが各論がなんとも頼りないというのでは、国民の期待にそうち

とにはなるまい。

以上、七万票の重みを歎嘆にうけとめればうけとめるほど、この五つの課題は早急に結論づけられなくてはならないことである。

幸いに、菅君の選挙を闘つた諸君は、若々しいエネルギーにみちあふれている。選挙ボケは一か月くらいで卒業して、明日のために真剣な討論を繰り返してほしいと強く願う。

(『シビルミニマム』第31号)

「君よ、再び起て!」——もうガマンならん隊 古宮社司男

捲き旋風!!

斬り行へ鬼神も避く
ちがひならん隊
中井委員長
吉野洋男

ハガキや電話による激励も相次いだ。

心より菅直人君の御当選をお祝い申し上げます。惜敗した君にこの言葉は皮肉のようですが、決してそうではありません。君の惜敗は出鱈目な現行制度の結果であつて、僅に四万五千票台で選出した者のあることを知るとき、君の得票は上位當選のものであるからです。

ご承知の通り、私はロッキーード疑獄発覚以来、真先に糾弾ののろしを上げ、卑劣な児玉ら右翼から命を狙われながら今日まで戦い抜き、六月から全国キャラバンを決行して世論の喚起に一役買い

ましたが、選挙戦に参加し幾多候補の政見を聞いたが、そのスケールの小さいのに失望したもので

す。国会議員は断じて村会議員や町会議員ではないのです。それは一国の国政に直接参画し、その結論と抱負は一国の運命を決定するものであって、どこに橋をかけ、どこに道を通し、どこの駅前の自転車置場を整理すると言つたことは地方議員に任せておけば宜しいのです。

古語に「仁者治山、賢者治水」と言う。所謂、治山治水ですが、国会議員は水の出る山を治めるべきで、その山から出た水をどちらに引き、どのように利用するかは地方議員や官僚が為すべき仕事なのです。

ところが最近の代議士は小粒で、スケールが小さくなり、多様化した大衆の無制限な欲求に振り回されて、ゴミのことや自転車置場の世話、即ちドブ板代議士が氾濫したのです。その結果がこの行き詰った日本の現状であり、道や橋の世話の上手な土建屋たる田中角栄が当選する日本になったのです。

このような将来性のない日本の政治を甦らせる為には、日本の政治を木偶の坊代議士の手から私たちの手に取り返さねばなりません。その第一歩は先づ「選挙を市民の手に」取り返さねばならないのです。

これを敢然と実行したのが貴方だったのです。そして三パンなき貴方がゼロから出発してアッという間に当選に足る清く美しい大量得票をなさったのです。

この貴方、そして貴方を支えたグループの努力の姿は時恰も世紀のロッキード総選挙だつただけ選にはこんど貴方を支持した方々の為にも是非再出馬すべきです。

(『シビルミニマム』第31号)

しばらく自分の生活に戻りたい

やれやれ終わった

仲間から候補者を立て、カンパとボランティアで行ないます、という今回の選挙であったが、選挙というものはやはり、異常とも思える興奮とエネルギーの集約を生み出すものである。この一ヶ月の生活は、候補者の菅はもちろんのこと、運動員の場合も、日常的とはいがたいものであった。

多くの運動員は、選挙がこんなにもしんどいものとは思っていなかつたらしい。中盤を過ぎたころから、どの顔にも疲労の色が濃くなり、投票日までエネルギーが続くのかと不安になることもしばしばであった。しかし、終盤になってから、運動に対する反応が強まってきたこと、マスコミの取材・報道の姿勢が変わってきたことなどが支えとなり、さらに、協力的な新聞記者から、支持率約九一十一%という調査結果を聞かされると、がぜん空気が変わり、そのまま最終日まで突っ走ったというのが実感である。

したがつて、投票日がきたときの運動員の気持は、「やれやれ終わった。しばらくは自分の生活に戻りたい」というのが正直なところであった。というより、それが自分の仕事をかかえたボ

ランティア・ワークであるため、選挙期間中はかなりの無理を強いられてきた。だから、できるだけ早く、それを取り戻さなければならないという気持が、それぞれの胸にあったのだろう。

候補者菅も、同じであった。彼は約束通り一週間後の十二月十三日から職場に復帰した。おそらく、候補者の中で最も早くもとの仕事に戻った一人であつたろう。「ことがすめば、もとの生活に戻ることが大切だ。市民運動なのだから」菅はそう思っていた。

それぞれの運動

こうして、私たちの戦いは一応の幕を降ろした。運動員の参加の動機と結果への意味づけは、それぞれ多様なものであった。私たちは思想を、イデオロギーを問わない。そこに問題があり、それに問題意識を感じたら、その時から運動が始まることを期待している。参加者は自由な意志に基づいて自由な参加の形態を選ぶ。それが市民運動だと思う。問題意識が先にあり、それに共感した人々がグループを形成し、運動が展開される。だから、参加の形態も人によつてマッチョであった。

十二月五日と十二日の反省会で出た意見も、実に多種多様なものであった。参加民主主義をめざす市民選挙の記録の章を終えるにあたつて、その様子をかいづまんで述べてみたい。それが私たちのグループの原点だと思うからだ。

反省会は、選挙事務所の一室で行なわれた。参加者は、二日間合わせて延べ七十五人。長時間にわたつたため、人の出入りが激しかつたが、狭い部屋は終始熱気に満ちていた。私たちは、まず、

どのようなきっかけでこの選挙に参加し、この場に集うこととなつたかについて話し合つた。

中西（会社員）「三鷹でパンフレットをもらい、新鮮でいいことを言つてゐるなあと思った。前から何かやつてみたいと考えていたので、これを機会にこれからも手をつないでいきたい」

西村（学生・21歳）「街頭でビラをもらい、ちょうど学校の宿題がビラの内容と同じだったので、精一杯の時に、こういう運動をしている人たちと会えて感激だつた。政治は自分からかけはなれたものだと思っていたが、運動を通じて身近なものになつてきた。ただ、ビラまきをしていて、政治に無関心な人が多いのを痛感した」

町田（会社員・27歳）「立会演説会で菅さんの話を聞いて、共感するところが多かつた。今日、はじめてグループの会合に参加してみたが、みなさん楽しそうで、いいグループだと思う」

赤羽（学生・20歳）「市民センターに顔を出しているうちに、今回の選挙の話を聞いて自分から参加した。授業をさぼつてやるほど楽しかつた。今回の経験を通じて、民衆が歴史を動かすということを実感できた。今後もぜひ続けていきたい」

稻木（学生）「大学の研究室で、先生が一所懸命ポスター貼りをしているのを見ているうちに、それを手伝わされるはめになつた」

赤木（弟）（学生・24歳）「『シビルミニマム』をとつている母から噂を聞いてきてみたら、人手がないのに驚き、ちょっと手伝つたのが最後までやることになつてしまつた。ぼくは昔から市民運動には批判的でしたが、ことが始まつてしまつてからは、もうやるしかないと腹がきまつた」

このグループは、一人ひとりがその生活の範囲内で活動しながら人間関係を拡げていくところに特色があるが、逆にいえば、それが限界でもあって、もつと論理的な議論と、その上で的一致が不可欠だと思う。そういう意味では、この運動は今後、変わっていかざるを得ないと思います」

赤木（兄）（学生・26歳）「弟がここに参加しているので、つられて参加した。ポスター貼りを含めて、五、六回事務所にきた。面白かった。何につけ、参加していくという姿勢は必要だと思うし、私はこの選挙には半身でしか関わつてこなかつたことを多少反省している」

玉置（学生・21歳）「先輩がいたので、陣中見舞いにきたら、証紙貼りを手伝わされ、いつの間にか参加していた。とにかく何でも自分でやれるところがすばらしい。アルバイトだと金になるが、やりたいことをやるというわけにはいかない。参政権というのは、投票をすればいいというのではなく、自分から働きかけていくことが必要だと思う。ここはそれができる場だつた。腐れ縁ができたし、今後も一緒にやっていきたい」

北村（学生・20歳）「先輩がいたので参加した。市民運動に共感を感じていたので、理論面での討論はともかくとして、運動をやりました。市民運動の一形態として、今後も発展させていきたい。僕らの場合、選挙を自己目的化していないという意味で、選挙屋とは違うと思います」

松木（学生・20歳）「大学生活の中で、最初で最後の総選挙だと思い、一発やってみようと思つた。体を張つて、自分でかかわつてみなければ何もわからないと思い、ここに決めました。このグループは、大学の授業にも出られるし、自由なところがいい。

『カンペとボランティアによる選挙』ということを、この選挙では前面に打ち出していたが、必ず

しも浸透していなかつたため、カンバの金を受け取るのが、物もらいみたいでつらかつた。運動をやつてみて、大義名分はここにしかないと確信するに至りました」

竹内（学生・20歳）「選挙をやつてみたいナーと思つていた。公示直後ポスター貼りを一日間手伝つてから、ザーッとやることになつてしまつた。うまい、うまいとおだてられ、その気になつてやつていたら心理学の試験を落としてしまつた。ビラまきをやつてみて、世間がシラケているなと感じた。選挙カーにのるため毎日規則正しく六時に起こされるという緊張の生活が続いたので、むしろこれから的生活が心配だ。今後も一緒に活動していきたい」

一方、以前からこのグループに関わっていた仲間は、今回の選挙について次のような感想をもらした。

金子（学生・24歳）「市川さんの選挙を手伝つたのがこのグループを知つた最初です。今回の選挙をやる必要性がよくわからなかつたので、今回はなるべく乗らないようにした。外から見ていると、みんなよくやつてゐるな、という感じで楽しかつた。卒論の関係で選挙のアンケート調査をやつたが、その結果をみると浸透度合いがたいへんよくわかつた。やればやるだけのことはあるといふ感じがする。この運動は必要なことをやつていくという運動だつたと思います」

安江（学生・22歳）「原因を作れば必ず結果が出る。選挙は楽しかつたし、自分をトレーニングすることができた。仕事があると人が集まるという点で、選挙はいいイベントだ。参議院を含め、今後は保革のシーソーになり、政治は面白くなると思う。体の具合が悪かつたが、政治が好きなので、相当無理してやつてしまつた」



みんなで開票速報を見た。

市川選挙から参加しているが、あの時の百九十二万票はアンチ票だつたと思う。今度の菅の七万票には、新しい政治勢力への期待がある。五党体制は必ず崩壊する。われわれはこんな状況のトップを走つていきたい

稻葉（会社員・29歳）「菅さんのことは大学のころから知つていたが、このグループの一員から立候補の話を聞いて驚いた。

そして自分でも出来る限り、一所懸命やろうと決意した。選挙カーの運転を中心によつたが、誇らしく楽しかつた。

こういうグループから市民党が生まれる可能性はあると思うが、もっと組織が大きくなつた時、これまでのようく、仲間うちだけでやつていてけるのかどうか。僕はかつて八百人の組合の委員長をやつたが、その時はしんどかつた。それに比べると、今回はともかく楽しかつた

宗像（会社員・29歳）「この選挙は、趣旨としてはもつともだと思ったが、気分的には、もう一つ乗れなかつた。しかし、少しずつ手伝つてゐるうちに、どうしてもやりたくなつてしまつた」

吉田（会社員・29歳）「長いこと、このグループと一緒に運動をやつてきた。公示までは一所懸

命やつて、あとは手を抜くつもりでいたが、結局最後までやることになった。やはり、ちょっとしんどかったという感じだ」

ところで、地域内で積極的に支持してくれた人々は、私たちを次のように見ていていたようだ。

稲村（会社員）「私はいわゆる焼け跡派です。選挙前に『シンプルミニマム』が送られてきて、この運動を知りました。七区には投票したい人もいないので、生まれて初めて棄権しようと思つていました。が、この運動を知つて、これは一つやってやろうと思いました。ここでは今までの運動とは違う感じの人と会えてたいへんおもしろかった。何百枚かのハガキを書かされました。ああ、疲れた。この運動に関しては、とにかく大衆の前で物をいった以上、体を張つても責任を持たなければならぬと思う。七万人が納得する活動をしてもらいたい」

今まで私は、革新の選挙運動の裏を見てうんざりしていた。彼らは人間を人間として見ていいな。その裏返しがこの運動だったと思う」

阿部（会社員）「パンフレットを読んだ人からは、たいへん多くの共感を得た。私は市川さんの市民センターに参加してきたので、今回、市川さんの応援がなかつたのは残念だった。今まで棄権したことになかったが、今回はさすがに投票する気にはなれなかつた。菅さんの立候補を聞いてはつとした。それだけに当選しなかつたのがほんとうに残念だ。市民生活に密着した問題はいっぱいある。これからも運動の輪を広げてがんばってほしい」

鈴木（生協事務員・24歳）「小金井市議の佐野さんを通じて、この選挙に放り込まれた。菅さんがどういう人か、まったく知らず、事務所でポスターを見てはじめて知った。田上さんから名簿と

電話を預けられ、何をやつていいのかわからないまま電話を担当した。事前の打ち合わせもなく、ビラを見ながら自分で考へてやらなければならず、たいへんな所へきってしまったと思った。

選挙というのは、すごいエネルギーを集めるものだ。何も知らない人が、どんどんやってきては選挙を手伝うようになる。このエネルギーを、選挙後もバラバラにしないで、七区のいろんな協力者と輪を作り、運動を拡げていきたい。状況の変化に対して、確実に問題を提起していくことが必要だ」

鈴木（会社員）「私は昭島に住んで三年、典型的な浮動層だった。友人から電話で、菅さんを応援してくれといわれ、ハガキを百枚ほど出した。しかし、昭島では三千票しかいらなかつた。非常に残念だ」

相良（主婦）「みなさんにひとこと、ご苦労様といいたくて出てきました。西川さんから話を聞いたのがきっかけで、自発的に活動できたのがうれしい。呼びかけた人たちが、一人残らず共鳴してくれたのも、これまでにない経験だった。私は開票立会人もやつたが、あまりたくさん票が出るので、私はもちろん、他の政党の人たちまでも不思議がつた。パンフレットの出来も良かつたし、とにかくいい選挙だった。これらの活動を見守つていきたい」

理想選挙でも勝てる

十二日の二度目の反省会では、次のような意見が出た。

西川（主婦・元市議）「理想選挙でやると落ちるというジンクスがあつたが、みなさんが市川さ

んを推し出してから、理想選挙でも当選するというムードが出てきた。最初、私は菅さんを知らなかつた。小金井市議の佐野さんから、無所属の票がどのくらいあるか知りたいと思わないかという話があつた。私は小金井で無所属の市議をやっていたので、その弱さを十分知つてた。だから、自分の息子が立つたような気持で、小金井の無所属を結集してみよう、思い切りやつた。百票ぐらいは集めた。今でもボスターが部屋に貼つてあり、みんなこの人に入れたといつてくれている。ボスターの威力は大きかつたと思う。この力を結集し直して、運動を続けてほしい。どの新聞も好意的に取り上げており、この次やれば十万票は超えると思う」

古宮（もうガマンならん隊）「右翼に命を狙われながらキャラバンを続けてきた。選挙中にも、角栄の新潟三区に乗り込んで、革新のマイクで私の主張を繰り返してきた。政治を人類に取り戻すために、菅さんにぜひ再出馬してもらいたい」

五十一歳以上の人間に、ロッキー事件の責任があると私は思う。きみたち若い世代の力に大いに期待している」

やればやれるもの

一方、私たちのグループで長らく一緒にやつてきた仲間は、次のように表明した。

宮道（大学助手・29歳）「選挙をやるという話が出た時、到底無理だと思った。しかし、終わつてみて、やればやれるものだなあという感じだ。市民常識を掲げて闘つたが、このグループに参加した人はあまり常識人ではないのではないか。常識では考えられないようなことをやつてのけたの

だから」

円山（学生・24歳）「このグループとは、もう六、七年のつき合いになる。いつも、おもしろい話があるからこないか、という電話がかかってくる。常に甘い話ばかりで、とてもできそうにないと思うことが多い。今回もそう思い、話に乗らないつもりで断わつた。ところが、渋谷でぱつたり片岡さんに会つて、ボスター貼りだけでもといわれ、とうとう今日まできてしまった」

市民運動は、たいへん運営が難しい。たとえば、ここに参加した人を新しいテーマでどう引きつけていくかといった問題がある。このグループは、やや選挙のやりすぎという感じがあるので今後、選挙屋にならぬよう注意していく必要がある。しばらく、自分の生活に戻りたいと思う」

福田（教員・27歳）「だいぶ前から食品問題の勉強会を一緒にやつてきた。選挙というのは運動の場を拡げていくという意味で、大きな力を持っていると思う。たとえば、昭和五十年の武藏野市議選では地域と密着することができた」

こういうふうに、選挙を次から次へと組めるのも、シビルミニマムなどを中心に運動を継続してきた成果だと思う。

選挙というのは、隠された能力をひき出せるという意味からも、参加した人々にとつて、良い経験になると思います」

小山（大学研究室・27歳）「もうずい分前からこのグループにかかわつきました。現在は資金稼ぎとしての学習塾の面倒をみています」

選挙を振り返ると、まあこんなものじゃないかと思う。市民運動といいますが、サラリーマンに

とつてはたいへんきびしい生活だった。このグループのサラリーマンは、ほんとうに良くやると思う。だけど、学生の手伝いがなければ、とてもここまでできなかつた。運動も徐々に大きくなつてきて、市民常識だけでは通らなくなり始めているのではないか」

田上（選挙事務長・26歳）「今考えるといろいろ勝手をいってうらまれたこともあつたと思う。事務長という大切なポストをやらせてもらったのに、その責任を十分果たせない面があつた。しかし、みんなの協力で何とかやってこられた。感謝している。このグループのとりえは、自分でやりたいようにやれることだと思う。一番の反省点としては、候補者がいちばん選挙に対するイメージを持っていたため、本来事務長が判断すべきことを候補者に持ち込んでしまつたことだ」

片岡（会社員・30歳）「状況としては、既成政党と新勢力との闘いはここだけだった。しかし、社会的には、マスコミも含めて新自由クラブを取り上げざるを得なかつた。この一つの歴史的の状況に対して、十分対応できなかつたことに責任を感じている。やはり、できるなら複数の選挙を用意したかった」

このグループの特徴は、自由にやれるネットワーク的な運動の拡がりである。この拡がりが既成の組織の政党に打ち勝つ大きな力になつていくのだと思う。私はこの選挙をやつて良かつたと思う。とにかく状況ができた時には、常に運動を提起していくことが必要だ。スタートにおいては十分しかなかつた運動の力が、百の状況があれば必ず百に近づいていくものだ。しないことではあるが、今後もこれを繰り返すほかはないのではないか」

菅（弁理士・30歳）「やつて良かったと思っています。今まで知らなかつた人が、ここにも半分

以上はいるし、その他に自分が知らないところで動いてくれた人はたくさんいるでしょう。

これからることは、まだ整理されていませんが、ともかくやつてよかつた、というのがすべてです」

第二章 草の根で挑んだ国政



私たちの履歴書

三原色構造

菅直人（三十歳）、片岡勝（三十歳）、田上等（二十六歳）——この三人が、いわば私たちのグループの中心メンバーである。今回の選挙において、菅が候補者、片岡は参謀役、そして田上が事務長をつとめた。選挙という複雑で多様な活動を内包し、肉体と精神とのしかるべき強靭さを必要とする運動が、すべて自分たちの手で組めたのは、この三人のパーソナリティ、そして、それ以上に三人の「組み合わせ」に負うところが大きい。

菅、片岡、田上という三人の「組み合わせ」について語ろうとする時、かつて中学校の図画の時間に学んだ、あの三原色の配合図が思い起こされる。——彼らのパーソナリティは、それぞれにかなり異なったものを持っている。だが、その上で菅と片岡に共通している点、菅と田上に共通している点、片岡と田上に共通している点をみることができる。しかも、菅、片岡、田上にそれぞれ共通している点があるのだ。彼ら三人が創り、かもし出す「三原色構造」こそが、私たちのグループの大きな推進力である。

戦無世代第一期生

菅と片岡は、ともに昭和二十一年生まれの三十歳、田上は二十五年生まれの二十六歳である。三人とも戦後のベビーブーム・チャイルドであり、戦無世代第一期生とでも呼ぶべき世代に属している。さらにいうならば、菅、片岡はベビーブーム世代の最初の年に生まれており、田上は最後の年に生まれたことになる。

現在、この年代の人口は全国で約千百万人といわれ、最も数の多い世代である。この世代の人間たちが成長してきた過程は、まさにわが国の戦後史そのものである。彼らの親たちは、戦後の復興期、まだ物資の不足している中で彼らを生み、育てはじめた。小学校でも中学校でも、いわゆる、"シン詰め" 教室の中で、それでも教師たちは、終戦直後の混乱からすでに脱却していた。落ち着きと情熱をとりもどした教師によつて、戦後民主主義は彼らの中に自然な形で根づいていた。中学に入るころには、朝鮮戦争を契機に日本経済は成長の軌道に乗りはじめ、各々の家庭でも子供部屋が作られたり、テレビが茶の間に入つてくる。中学から高校に進むころには、「教育ママ」がジヤーナリズム用語になり、受験競争もそろそろ激化しつつあった。

高度経済成長の中で、都市への人口集中は急速に進み、人々の生活も豊かになり、家の中には耐久消費財が次々と買ひそろえられていった。彼らが大学に進むころは、わが国の将来はもつともつと明るく希望に満ちており、大学進学に際しても、空前の理科系ブームであった。大学進学率は二〇%を突破し、都市を中心[newline]新しい大学も次々と設立されていった。すべてが、あまりにも平坦にうまくいきすぎていたのかもしれない。



片岡 勝

六〇年代後半に吹き荒れた大学紛争は、まさに彼らの世代が主役であったが、それはあたかも、自分たちの歩んできた戦後民主主義体制、およびその間受けてきた戦後民主主義教育が、ほんものなのか、それとも擬体なのかを自問する——そんな時期であり、運動であつた。運動をリードしていたといえるべ平連にしろ全共闘にしろ、その運動は「個」を軸としたものであり、その姿勢をかたくななまでに堅持しようとしていた。このことが、それまでの学生運動と大きく異なっている一点であった。六九年の東大・安田講堂が象徴的に結節点として語られるように、その後、紛争は急速に鎮静していく。そして、この世代は徐々に社会に入っていく。

いまや二十代後半から三十代に達した彼らは、企業内をはじめとして社会における中堅層としての役割を担いつつあり、一方で、結婚ブームの中で新しい家庭を築き、第二次ベビーブームづくりの中核となりつつある。戦後三十年、あきらかに一世代、時代が回つたのである。昨年、わが国の人口は、戦後生まれがついに人口の過半数に達した。

いま、政治、経済、社会、あらゆる局面で戦後体制が問い合わせられている。こうした問い合わせの動きが、六〇年代後半の大学紛争に原点を発していること、そして、この問い合わせの中で、紛争時の主役であった戦無派第一期生たちが社会人となり、家庭を営み、次代の子供たちを世に送り出していることは、決して無縁ではないようと思われる。私たちのグループのメンバーの多くがこの世代に属し、私たちの運動が、私たち自身の生活と、子供たちの生きていく状況に対する責任感を一つの媒介としながら組まれていく背景も、ここにあるように思われる。

ある出会い

菅と片岡が出会うのは、まさにあの大学紛争前夜においてであった。昭和四十年、菅は東京工業大学に入学、科学技術のもつ自己矛盾について議論・研究をつづけていたサークル「理ゼミ（理工科系学生ゼミナール）」に加わった。このサークルは中核系の色彩が濃く、上から強引にオルグスする体質に菅は反発を感じ、一年生のクラス仲間数人と「現代問題研究会」を作ることになる。この研究会では、社会保障や安全保障、南北問題などの研究を、毎年、東工大的大学祭「全学祭」で発表する活動を続けていた。

一方、片岡は同じく昭和四十年、慶應大学に入学後、体育会の少林寺拳法部に所属し、勉強の方もわりとマジメにやっていたが、政治、社会問題に対しても全くのノンポリ学生であつた。そのころ、学生運動をやっていた学生に対して、片岡は「やることのないバカなやつらがやつていて」というくらいの見方をしていたという。

だが、三年生になつて法学部ゼミナール委員会の委員をさせられるハメになり、ついには全学ゼミ委の副議長になる。そのころから学内政治の世界に入り、「政治のおもしろさに目覚めた」という。

菅、片岡の二人がはじめて会うのは、ともに大学三年の時、昭和四十二年秋のことである。菅がやっていた「現代問題研究会」の仲間が片岡の高校時代の同級生で、彼の紹介で二人は会う。その後、数回の勉強会や合宿を通じてコミュニケーションを重ねていった。

このころ、あちこちの大学では、紛争の火の手が次々とあがつていった。



菅 直人

そして、東工大においても、菅が大学四年の一月、一挙に運動は過熱する。「このままでいくと、東大の二の舞になる」という危機感をもつた菅は、仲間と語らって「全学改革推進会議」をつくり、積極的に活動を始めた。新左翼系の「全闘委」、共産党系の「民青」、学内正常化をうたう「工大を真に考える会」に囲まれた中に登場した「全学改革推進会議」だった。

数次にわたる学生大会において、「何かを否定しようとするならば、こちら側にも具体的な対案を必ず用意しなくてはならない」という考え方に基づいて、「我々に団交のヘゲモニーを!」と訴えた「全学改革推進会議」の提案は学生大会で可決され、大学側との団交を行なうことになる。このころの経験が、今回の選挙において菅が終始訴えた「否定論理からは何も生まれない。具体的な政策をもつた、市民の側からの積極的な政治参加を」という考え方の基礎になったといえるだろう。こうした状況の中で、菅はもう一年、大学に残ることを決心した。

しかし、デモ隊に囲まれての混乱の中で、大学側も団交に応じきれず、ますます状況は過熱していく。このままいくと、ゲバをやらざるをえない状況にあった。だが、彼はゲバに何の意味も見い出すことができず、自分の生活に戻っていく。

菅には、以前から「サラリーマンにはなりたくない。できるなら大学に残りたい」という想いがあった。しかし、一方で、彼のいところにあたる女性——彼女は津田塾大学を卒業後、早稲田大学に学士入学していた——との結婚問題を控えて、あまりのんびりしてもいられず、「弁理士」の資格をとる道にすすむことを決意した。そのいとこが菅の現夫人である。

片岡の大学四年も、おおむね紛争の渦中にあつた。当時、彼は現在勤務している銀行に就職が内定しており、ノンセクトの学生として「大学問題」に関するセミナー開催などの活動を重ねていた。

菅にしろ片岡にしろ、学生時代における運動経験に、現在に至る原点があると考えている。彼らは二人とも、「大学紛争」とはいわない、「大学闘争」という。自分たちの外に存在した「紛争」だけたのではなく、まさしく自らの問題を自分たちで考え、たたかつた「闘争」だったという確信が、十年近くの歳月を経てもかたくななまでにその言葉に固執させているのだ。

当時の学内情勢からみれば、二人は「良識派」とも呼ぶべきグループに属しており、右からも左からも攻撃を受けていたという。こうした運動をそれ以後ずっと続けていくことになろうとは、当時の彼ら自身、考えもしなかつた。まして、彼らの周囲の人間たちは、彼らがかくも粘り強く運動を持続させようとは思つてもみなかつただろう。

「むしろ、あの当時、我々に激しい言辞を吐いていた連中の中に、さつきと会社に就職し、日常の中に没しきつてしまっている連中がたくさんいるんじゃないか」と彼らは苦笑する。菅や片岡の内には、当時の運動体験や議論が、その後の活動を通じて、そして新たなトレーニングを通じて、もつともっと大きなものに育ちつつある。「どこか似ているところがあるんだろうな」と二人は笑っている。菅にいわせれば、「二人のうちどちらかが何かをやろうともちかけると、どちらがもちかけたにしろたいていやることになる。そして、二人ともやれると思つてやっていく」とい、片岡にいわせれば、「一人とも、人の意見をよく聞こうとする、アイデンティ

ティを大切にしている」という。

卒業後、菅は弁理士の資格をめざして特許事務所へ、片岡は内定していた銀行へ、それぞれ勤務することになる。

選挙が好きで

田上等は、昭和二十五年生まれの二十六歳。ともかく「選挙」が好きで、小学生のころから選挙に関する新聞の切り抜きを自分でやるくらいだったという。父親が戦前戦後を通じて市議、県議、知事、参議院議員をやってきた政治家だったことも影響しているのだろうが、小学校、中学校、高校と貫して児童会や生徒会の役員をやってきたという。

昭和四十四年、慶應大学法学部に入学したが、そのころはすでに大学紛争も下火になりつつあった。昭和四十七年の総選挙の際、白鳥令氏が「七〇年代の選挙は市民運動が帰趨を決するだろう」といってはいるのに接し、とても強い印象を受けたという。翌四十八年の夏、市川房枝女史が主宰する「理想選挙推進市民の会」が、都議選に候補者を推薦しているという新聞記事に接した田上は、「市民」と「選挙」が実体としてつながっていることを知った。

それまでは、市川房枝女史に対しては「たいへんな歳のバアさん」というイメージしかなく、「無所」属といふことも一体どういうことなのか、漠然としか受けとめていなかつたのだが、がぜん市川女史に興味が湧き、「無所属」ということのもつ意味を直感したという。

行動派の田上は、早速、市川女史に連絡をとり、「慶應にこうした運動の萌芽をつくり出したい」

という趣旨で、数度にわたって接触し、働きかける。婦人有権者同盟を中心とする市川女史の運動組織に「若い男の子」が「いっしょにやりたい」と申し出たのは初めてのことだつたらしく、後日談だが、そのころ「田上というのはスペイジじゃないか」と疑いの目でみられたこともあつたらしい。ともあれ、田上の熱意は市川女史を動かし、昭和四八年十一月の「三田祭」に「市川房枝講演会」の実現を見る。

勉強会・大学祭・理想選挙

時間は少し前後するが、昭和四十五年、一年留年して東工大を卒業した菅は、弁理士資格をとるために勉強をかねて、特許事務所に勤務する。一方、片岡は銀行マンとして一年を過ごし、残業百時間から百五十時間といったハードな生活を送っていた。彼らはサラリーマン生活の合間をぬつて、かつての仲間たちと月一回の勉強会を続けていった。

そのころ、菅たちの動きとは全く別のところで、一つの動きが始まっていた。それは、あの大学紛争の後、衰退しきっていた大学の文化サークルの活力を蘇えらせ、各大学の「大学祭」の主導権を握ることによって、「ノンポリ」学生が大学内のヘゲモニーを確保しようとする動きである。この動きは、七〇年——昭和四五年、一橋大学の「一橋祭」において具体的な第一歩を踏み出し、四十六年にも引き継がれていった。

菅たちは、続けていた勉強会の中心テーマを「土地問題」にしぼりつ



田上
等



市川房枝

あつた。一方、大学祭によつて学外グループとの交流を深めたいとしていた一橋グループとのつき合いかはじまる。そして、四十六年秋の一橋祭に模擬店を出店、この模擬店が、今回の選挙まで続いている「大学祭で活動資金を調達する」という私たちのグループ独特の資金調達法の原型となつた。

昭和四十七年一月、「農地の宅地並み課税骨抜き」が新聞報道された。菅は、いまこそ動くべき時ではないかと考え、「運動化」しようと活動を開始する。都留重人氏、市川房枝氏、青島幸男氏、青木茂氏らに働きかけ、三月十七日、「よりよい住まいを求める市民の会」主催の「骨抜き反対」集会をもつままでこぎつける。

片岡は、当時を振り返つて、「この時、二百人集めるのがほんとうにしんどかった」と述懐する。この集会に向けて、菅宅で一週間の合宿態勢がとられた。ちょうどその折、菅の妻君の母親が亡くなり、彼女は実家へ帰つた。妻君が実家から戻つてみると、家中はすさまじいありさまで荒れに荒れ、珍しく夫婦の間で「トラブった」こともあるという。

この集会は一応の成功を収め、たまたまテレビに放映されるというオマケまでついた。もしかしたら、このオマケがその後、私たちの運動展開において必ずマスコミを意識し、マスコミの増幅によって運動展開をより活性化させていくこうとする方法論のスタートなのかもしれない。

集会によつて、グループ内の問題意識は一層高揚し、そのころ、毎日新聞が募集していた懸賞論文「日本の選択」に応募しようではないか、ということになる。この時は、グループの一員、末田耕治（二十六歳）を中心に、短期間ではあつたが全員猛勉強をやって論文を書き上げた。

論文の骨子は、土地を信託し、それぞれの所有権を残したまま使えるようにしていこうとする、いわば「土地信託構想」とでも呼ぶべきものだつたが、惜しくも当選は逃した。あとで関係者から聞くと、「当選はしなかつたものの、まずまずいい線までいった」そうである。当選すれば、私たちは百万円の活動資金を得られたはずだったのだが。

ともあれ、この間の猛勉強と議論は、私たちのグループにとって多大なトレーニングであつたことは確かである。土地問題をめぐつての勉強会と運動は、一層グループ内で活性化していく。

昭和四十七年の一橋祭では、実行委員会と組んで「土地問題を軸とした都市問題」についてのシンポジウムを、美濃部都知事、飛鳥田横浜市長、石塚国立市長、都留重人氏らを呼んで企画、実施した。こうした一連の「土地問題」を軸とする活動は、市民運動が政策決定に積極的に参加していくことの必要性を、強く私たちに痛感させた。

私たちのグループのパワーは、少しづつではあるが増大し、グループの女性たちを中心にして、四十八年には「恐怖の化学物質を追放する市民の会（恐化会）」も誕生した。

昭和四十八年夏、「理想選挙推進市民の会」が都議選に小池順子女史を推薦した際、私たちのグループにも市川女史から協力の要請があり、数日間ではあつたが「選挙」活動に参加する。これが「選挙への参加」の初体験である。

この年九月、菅と田上は「理想選挙推進市民の会」においてはじめて出会うことになる。そのころ、「市民の会」では、翌四十九年の参議院選挙の候補者選びをやつていた。東京地方区には、市川女史の後継者として紀平悌子女史を推すことが決定していた。一方、市川女史に全国区出馬を

働きかけ続けていたが、引退を強く決意していた女史を動かすことはできなかつた。

市川選挙に結集

昭和四十九年、菅、片岡、田上、そして葛飾で「青空テント（産直活動）」をやつていた朝倉剛一（三十歳）らは、ひんぱんに情報交換のための会合を続けていく。こうした動きの中から「市川女史かつぎ出し」の計画はすすめられた。「市川房枝さんをかつてに推薦する青年グループ」という名のもとに、各グループを一本化し、数度にわたって市川女史に説得を重ねた。当時、田中内閣の押しすすめる「企業ぐるみ・金権選挙」の実態は目にあまるものがあり、何としても、そうした選挙に対する「アンチ市民層」の受け皿が用意されなくてはならなかつた。公示日直前、ついに市川女史は立候補を決意する。

選挙運動はすべて「市川房枝さんをかつてに推薦する青年グループ」がやることになつた。だが、何としても日数がない。おまけにみんな、選挙のしろうとである。選挙法を研究するグループ、全体の作戦をたてるグループ、ハガキ、その他の制作をやるグループ、期間中のスケジュールをたて事務的な手配をするグループ、マスコミ対策をやるグループ、支持者との連絡係、そして、膨大な事務処理——いまふり返つてみると選挙については全く初体験の若い連中が集まつて、よくあれだけやれたものだ。

菅は事務長として総括責任者、片岡はジープによる全国キャラバン隊長、田上は選挙事務所での事務局長、三人三様の役廻りを十分に果たしえたと思う。——もちろん、いくつもの失敗や試行錯誤を経て、やがては順調な運営へと転じた。

誤を伴なつてはいたが……。

参院選の一ヶ月前、四十九年六月、私たちのグループの機関誌「シビルミニマム」は片岡を編集長として誕生した。「草の根で最少不幸の社会をめざす——成功への鍵は一対一の関係を拡大していくことである。人と人とのつながり、だれか一人の“助けたい”という気持、政府はそれをつくることはできない。ただ一人のひと、人間のみができることがある」をスローガンにした「シビルミニマム」は、現在では三十四号を数えるまでに成長し、私たちのグループと、私たちの運動に理解と支援をしてくれる人たちとを結んでいる。

武藏野市議選

参院選の結果は、百九十二万票で、第二位の高位當選を果たした。市川選挙を通じて、私たちのグループは、メンバーも増え、活動も一層活発化していった。また、市川女史の要請で、田上が二院クラブの事務局員に、朝倉が市川女史の秘書として勤務することになり、私たちの情報環境は大きく変容した。

翌昭和五十年四月の統一地方選に、仲間の田中栄を推し出し、私たちは武藏野市議選を闘うことになる。「市民運動の流れを議会へ」というスローガンのもとで闘つたこの選挙では、参院選のさい全国キャラバンで知り合った各地の市民運動グループなど二十近いグループとの連携をよびかけ、ともに闘うことができた。結果は一票差の次点——私たちは惜敗した。



田中 栄

翌昭和五十年四月の統一地方選に、仲間の田中栄を推し出し、私たちは武藏野市議選を闘うことになる。「市民運動の流れを議会へ」というスローガンのもとで闘つたこの選挙では、参院選のさい全国キャラバンで知り合った各地の市民運動グループなど二十近いグループとの連携をよびかけ、ともに闘うことができた。結果は一票差の次点——私たちは惜敗した。



田中 栄

翌昭和五十年四月の統一地方選に、仲間の田中栄を推し出し、私たちは武藏野市議選を闘うことになる。「市民運動の流れを議会へ」というスローガンのもとで闘つたこの選挙では、参院選のさい全国キャラバンで知り合った各地の市民運動グループなど二十近いグループとの連携をよびかけ、ともに闘うことができた。結果は一票差の次点——私たちは惜敗した。

候補者田中栄は、いまも「恐化会」の流れの中で、「有機農法」によって生産された農産物を消費者につないでいく活動を続けている。

拡がったグループの輪

昭和四十九年の参院選、翌五十年の武藏野市議選を通じて、市民グループによる選挙参加が十分にやれることを私たちは認識した。機関誌『シビルミニマム』も定着し、月一回の市民セミナー、その他の各種研究会も日常化していった。グループの輪も拡がった。数度にわたるトレーニングを通して、私たちなりのやり方みたいなものも出来上がってきた。

そして昭和五十一年、ロッキード疑惑が発覚。このロッキード事件は、戦後三十年の日本の政治の象徴的な事件であった。かつて、保守は保守なりにアクティブラーブであったのが、戦後三十年を経て、金でしか動かない構造になってしまっている。

一方、革新の側も労組からの出身者が多く、「たて割り組織論理」を全く脱却できていない。おそらく、現在のわが国において「政治の分野」こそが状況の変化にもつとも対応できていないのであるまい。特に「政治家」が生まれるルートが特定化し、それゆえに力量の低下、硬直化が 알려れてきている。現在、すでに市民運動を通して直接、あるいは間接にトレーニングされた市民が層として存在しており、私たちはここに「市民参加による政治」の可能性を見い出すことができる。——こうして、今回の衆院選に、菅直人を立候補させることができた。

三者三様

運動開始にあたっての菅、片岡、田上の関心は、

菅——「市民選挙」といった運動が選挙として、また運動の拡がり（新しい参加者）としてどこまで可能か

片岡——「新しい革新勢力として、立候補の状況は確実にある。しかし、旧勢力対新勢力、すなわち、角争対立という図式をどこまで認識してもらえるか」

田上——「無党派市民がかなり存在することは確信していたが、どこにどれくらい、どのようない反応をみせてくれるのか」

といったものであった。十月の「草の根千円パーティ」において、田上の推薦、菅の立候補受諾というセレモニーを経て、「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」推薦の菅直人衆院選立候補が決定した。

菅を候補者とし、片岡が参謀役、田上が事務長という体制で、運動は実体的にスタートする。しかし、すべてがうまく運んだわけではない。市川女史の推薦が得られなかつたこと、田中栄らの有機農法グループとの意見のくい違いなど、当初なかなか運動は軌道に乗らず、菅たちも少なからず心配した。

しかし、決定までは冷静に状況を判断し、多くの議論を経てゆくことが必要であるが、いったん決定した以上、候補者を含め中心的メンバーが動搖してはならない。調整はしつつも基本方針を変えることはなかった。

選挙という運動は、テーマを中心とした市民運動と異なり、どうしても「候補者」という人間を推す、という形になるので、感情論を含め予想以上にマイナス要素が出てくるものだということを菅は痛感したという。

菅にとって、今回の選挙は今までと多少感じが違っていた。彼自身が「候補者」であつたため、他の人を推す場合に比べて、動きにくく、運動の進め方についても、どこまで発言すべきか迷つたという。だが、公示までは「運動員の一人」としてかなり積極的に意見を述べ、選挙期間中も、選挙カーのスケジュールなどについてはかなり発言をした。しかし、総合的にみれば、比較的しつかりした選対だったので、菅は「候補者」として睡眠時間や休憩などの点で他のメンバーに比べ「かなり楽をさせてもらつた」という。

選挙といふものは、推す側の力量が大きくなるものをいい、これが弱いと運動が小さくなるし、また候補者への負担が大きくなる。このグループのような「柔構造的体質」は、ボランティアとしての参加者が力を發揮し、運動としても拡がる点で、非常に重要な意味をもつものだと菅は思った。

確かに、私たちの持つ力量を考えれば、今回の運動はギリギリのものであつただろう。しかし、当初の目標「三十名の人に電話をかけてくれる人千名の確保」が達成できなかつたのは、何としても残念だった。私たちの場合、オルグする力が全体としてまだまだ弱いといえるのではないだろうか。

参謀片岡の役割は、一言でいえば「なんでも屋」ということになるかもしれない。大義名分作り、人間関係の調整、マスコミへの売り込み、仕事作り、組織作り、あとはぬけている仕事の助つず」という予想——を見た時、この予想結果発表によつて当選はない、と直感したという。

その時発表された調査結果は、投票日の一週間から十日くらい前に選挙区で調査されたものだつた。もし、投票日直前の調査データをもとに記事が書かれていたとすれば、その内容はもつと違つたものになつていたかもしれない、わたしたちの運動にプラスに作用したかもしれない。なぜなら、実際に菅は七万以上の票をまとめ、次点ながら最下位当選者に肉迫していたのである。

田上は事務長を任されるにあたつて、菅に「私には事務長を務めきる力量があるかどうか自信がないし、私自身にとつてはまだ早すぎる」といつたのだが、菅の返答は「なにごとも経験するのに早すぎるということはない」という一言であった。こうして、連日三～四時間の睡眠時間という激務がスタートしたのである。

実は、今回の運動のメンバーとして、ほぼ日常的に彼のアシスタントをつとめた藤本ふみ子（二十五歳）と田上は近く結婚することになつてゐるが、そのことにテレながら、彼はこう述べている。

「自分の置かれた位置が、精神的にはかなり孤独に近い状態であり、そのくせ、物理的には多くの人の中にいて、独りきりになれるのはトイレの中だけ、といった具合。そこからくる精神的不安定、イラダチ、やり場のない不満、そんなことが選挙後に結婚を決意するに至つた決定的な要因だ

負けは負け

「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」推薦の菅直人は七万人以上の有権者の支持を集めえたものの、次点で落選した。今回の選挙を終えて、片岡は反省点として、複数候補を立てられなかつたことと、全国運動に展開できなかつたこと、の二点をあげている。

一方、田上は、「当選させられなかつたことは最大、唯一の反省点だ。選挙をめざした政治団体が選挙に勝てなかつたことは重大な敗北であり、政治団体としての発言もせいぜい清涼剤としての評価しか受けえない。政治団体としては、確実に代議士を生み出すことからすべてはじまる」と認識している」という。

選挙が終わつたいま、私たちのグループの今後の運動展開について、菅は次のように語る。「今回の運動を通して拡がつた可能性を確実に実体化していくことが優先する。つまり、事務局の定常化、シビルミニマムの拡大、本の出版、政策研究の具体化などを進めることが重要だ。また、このような実体的な力量をつけることに加えて、このグループが他の人々、グループ、マスコミにどのようなイメージを持たれているか、どの程度の社会的影響力を持つているのかをそれなりにつかんでおくことが、これから運動を考える上で必要だと思う」

これから具体的運動については、全国のいろいろなグループとの交流を一層活発化してゆき、選挙を市民運動の一形態としてとらえるグループの拡大を図ること、多種多様な市民による選挙母

体が生まれてくる状況をつくることを目指していきたい。

市民運動を通してのトレーニングに加えて、こうした市民選挙への参加を通じ市民の政治的能力の蓄積が進むことになるのだ。

意志が行動を決定する

今回の衆院選は、私たちのグループにとって、確かに大きな「結節点」であると思う。選挙に敗北はしたものの、今後の運動展開にとつては多大な蓄積を、グループ内および周辺に貯えることができた。

わが国の政治状況は今年の参院選に向けて、そして参院選後に生まれてくるであろう政治状況に向けて、大きな変動が予測されている。既成政党の対極に無党派市民の政治参加を促そうと、さまざまな動きが現われてきている。参院選、そしてその後に、私たちのグループがいかなるかかわりを持つのかは、現在グループ内で多くの活発な議論が積み重ねられている。

いざれにせよ、グループの一員たる私たち一人ひとりの判断と意志決定が、私たちの行動を決していく。

三つの情念

「人生唯一度」——菅。

「やりたいことをやっていくこと。そのため努力すること」——片岡。

「人生は短いんだ、ケチケチするな」——田上。

彼ら三人の「三原色構造」の核心、共通点は、おそらくこの「情念」なのだろう。菅の「運動好き」、片岡の「政治好き」、田上の「選挙好き」——それぞれタイプとパーソナリティの異なる彼らの「組み合わせ」の妙に、私たちは大きな期待を寄せている。

それぞれの個人史

円山順昭の場合

円山順昭（二十四歳）が、最初にグループとかかわりをもちはじめてから、まもなく六年になろうとしている。彼は、そのことについてたずねられると、「くされ縁ですよ」と答えることにしている。そういうながら、うれしいような、テレくさいような表情をする。その表現には「いい歳をして、ヤツはまだあんなことをやっている」といわれるのが調子悪い、というか、「ヤツは本質的にああいうことが好きなんだ」と決めつけられたくないというか、そんな気持がこめられている。

その実、当人は、その時その時、問題意識をもつてせいいっぱいがんばっているわけで、「いやいややる」ふうを装いながら、心のうちでは「今度こそ」とか「いまにみていろ俺だって」と思つており、まさに心はメラメラと燃えているのだ。かくて、円山は、グループと自らの係わりを「くされ縁」と規定することになる。

円山順昭は、北陸富山市のベッドタウン、滑川市の出身である。昭和四十六年、上智大学法学部に入学。一年生の時、上智大学の学園祭「ソフィア祭」の実行委員として活動する。その折、各大学の学園祭を活動の拠点



円山順昭

の一つとしていた菅たちと出会う。その後、経堂の青木茂氏宅の別棟を借りて、菅たちがやつていても大いにお世話をなった人である)

この塾経営は、グループの資金かせぎという意味もあったが、それ以上に、恒常的な活動の拠点が出来たということの意味の方が大きかった。円山はこの塾で、菅、片岡、吉田光孝(二十九歳)、田中栄(二十九歳)、末田耕治らと語り合ううちに、グループの重要なメンバーの一員になつていく。その一方で、一年の時の「ソフィア祭」の仲間を中心にして、講演会や大学祭での模擬店などの企画を行なう企画集団「SBI」を作り、初代代表となつた。

上智大時代に、彼は二人の先生から影響をうける。その一人は憲法学者の佐藤功教授であり、もう一人は独禁法の松下満雄教授であった。佐藤教授からは「政治を見る眼」を培われ、松下教授からは「人間のつき合い方」というべきものを学んだという。

昭和四十九年の参院選は、ちょうど慶應大学政治学科の大学院受験にぶつかつたため、彼にとづては納得のいく活動ができたとはいえないものであった。受験にパスした後の、武藏野市議選においては、中心メンバーの一人として積極的な役割を担つた。

今回の衆議院議員選挙もまた、彼の就職、修士論文作成の時期とぶつかつてしまつた。円山は活動休止を余儀なくされた。机の前で、修士論文にとり組んでいる彼のもとに、運動準備の経過を報告する仲間からの電話が次々に入つてくる。とうとう、落ち着きを失い、何も手につかなくなつてしまつた円山は、「ええい、いつそトコトン付き合つてやれ」——そう覚悟を決め、論文を投げ出し

て選挙事務所へと飛び出していった。選挙前、円山から「今回の衆院選は、オレは何もしないし、できない」と聞かされていた友人たちには、「ヤツは我慢できないよ、きっとやる」と思つていたらしく、選挙公示日になると、事務所に詰めていた彼のもとに激励の電話をかけてよこし、カンパを申し出でてきた。

効果的な方法とは何か

選挙は、いかにその主張が正しくても、最終的には当選するか否かが問題であり、立候補するからには絶対勝たねばならない。しかし、勝つためにはいかなる手段も選ばない、というやり方は、われわれの運動の本質にかかわる問題である。われわれの運動に最もふさわしい、しかも効果的な方法はいかなるものか、具体的にどんな運動を創り出していくかが、円山にとって最大の問題であった。しかも、彼の参加時点においては、まだメンバーの数もわずかで、十全な選挙をたたかえるかどうか、一抹の不安があつた。

だが、ロッキード疑惑を引き合いに出すまでもなく、現代では、政治における常識と市民社会の常識との間には大きなギャップが存在し、政治の場において市民社会の常識を実現させていくような(参加型)の政治運動は成立しえないものだろうか、ということがグループの内での重要なテーマであった。それも、評論家的に傍らから批判するのではなく、実際に自分がいかなる形にしろかかわることができるように運動が生まれてこないだろうか、ということであった。

また、衆議院議員選挙という国政レベルでの選挙において、一人の無名で、しかも金も組織もな

い者がどこまでやれるかということ、自分自身がどこまで説得力のある言葉で有権者に訴えることができるか、それが果たして有権者に受け入れられるのかどうかということ、また、彼にとっては長い付き合いであるこのグループが他の人にどのような評価を受けるか、といった興味が、究極、彼を活動の場に駆り立てていった。そして、持ち前の責任感の強さと、頼まれたらイヤとはいえない性格とで、中心メンバーの一人としての役割を果たしていった。

運動期間中の円山の役割の主なものは、次の日の行動スケジュール作成だったが、土地カンがなすことから必ずしもスムーズにいったとはいえたかった。日頃むしろ冷静な菅は、選挙期間中、時としてイライラすることが多く、「イラ菅」のアダ名を頂戴していたが、円山は彼のイライラを一身に集め、他のメンバーはおかげで難を逃れる(?)ことができた。

吉田光孝の場合

ここでとり上げるいま一人の「くされ縁」仲間、吉田光孝(二十九歳)は、通信機や計測機器を製造する会社に勤務するエンジニアである。昭和四十五年、東京工業大学電子物理学科を卒業し、現在の会社に入社、この四月で七年目を迎える。現在、彼は開発部に籍を置いて計測機器の新製品開発にたずさわっており、調査、プランニング、想定価格の設定、図面書き、部品手配、試作品作製、試作品テスト、検討など、一連の工程に立ち合い、考え、判断をくだす毎日を送っている。「より良いものを、より早く、より安く市場に出す」という競争の中で、仕事のおもしろさが十二分にわかつてきた年令もある。

もう一つのくされ縁

昭和四十四年、吉田が三年生の時、東工大においても大学紛争は激化の一途をたどった。彼も電子物理学科を中心に、自主的なグループを構成し、その一員として活動はじめていた。菅に出会ったのはその頃だった。彼らはともに、全闘委とも民青とも違つた立場で、全学改革推進委員会という組織を作り、全闘委と民青とはさまれた形で、学生大会、団交、討論集会と、日々刻々状況が目まぐるしく変わるただ中で運動を続けていった。この時の仲間は、卒業後も月一回、二十人ぐらいが集まって勉強会を開いており、今回の選挙に際しても、陽になり



吉田光孝

昭和四十四年、吉田が三年生の時、東工大においても大学紛争は激化の一途をたどった。彼も電子物理学科を中心には、自主的なグループを構成し、その一員として活動はじめていた。菅に出会ったのはその頃だった。彼らはともに、全闘委とも民青とも違つた立場で、全学改革推進委員会という組織を作り、全闘委と民青とはさまれた形で、学生大会、団交、討論集会と、日々刻々状況が目まぐるしく変わるただ中で運動を続けていた。この時の仲間は、卒業後も月一回、二十人ぐらいが集まって勉強会を開いており、今回の選挙に際しても、陽になり

昭和四十四年、吉田が三年生の時、東工大においても大学紛争は激化の一途をたどった。彼も電子物理学科を中心には、自主的なグループを構成し、その一員として活動はじめていた。菅に出会ったのはその頃だった。彼らはともに、全闘委とも民青とも違つた立場で、全学改革推進委員会という組織を作り、全闘委と民青とはさまれた形で、学生大会、団交、討論集会と、日々刻々状況が目まぐるしく変わるただ中で運動を続けていた。この時の仲間は、卒業後も月一回、二十人ぐらいが集まって勉強会を開いており、今回の選挙に際しても、陽になり

昭和四十四年、吉田が三年生の時、東工大においても大学紛争は激化の一途をたどった。彼も電子物理学科を中心には、自主的なグループを構成し、その一員として活動はじめていた。菅に出会ったのはその頃だった。彼らはともに、全闘委とも民青とも違つた立場で、全学改革推進委員会という組織を作り、全闘委と民青とはさまれた形で、学生大会、団交、討論集会と、日々刻々状況が目まぐるしく変わるただ中で運動を続けていた。この時の仲間は、卒業後も月一回、二十人ぐらいが集まって勉強会を開いており、今回の選挙に際しても、陽になり

陰になり協力と支援を惜しまなかつた。

東工大を卒業後も、吉田は「よりよい住まいを求める会」をはじめとして、菅と一連の行動を共にする。この七年間にわたる「くされ縁」を通して、吉田は菅を次のように評している。

「菅は、いわば工学部政治学科、あるいは、運動学科だ。ムチャクチャに顔が広い。考え方をあらゆる面から煮つめ、固まるど、すぐに実行に移せる才能をもつてゐる。最近の彼は、政策を担う側として、状況を把握しようとしており、考え方には柔軟性がでてきたようと思われる」

吉田は、ロッキード発覚後、菅たちとともに、市民団体のロッキード・デモに参加してきた。そこで、戦中、戦後の黒幕といわれる連中が、いまだに政・財界のかけで強大な権力を握っていることを目のあたりに見て、吉田は「これから世の中では、われわれ戦後生まれの人間たちが社会のリーダーシップをとつていかねば」と痛感したという。今回の衆院選に菅をかつぎ出すことを強く主張したメンバーの一人は吉田であつたが、それはこうした考えにもとづいていた。

生活者の立場から

サラリーマンである吉田は、この選挙運動期間中、極力、仕事仲間に選挙にかかわっていることを悟られまいと努めた。選挙にかかわっていることで、仕事がおろそかになつたという事態だけは絶対に避けたかった。また、選挙にかかわることが三度目になるだけに、同僚や上司から「選挙屋」と片付けられるのもいやだつた。今回の選挙とは全く関係ないふうを装つていたのだが、ごく身近にいる者はうすうす感づいていたらしく、残業の時など「いま、すごく忙しいんだろう、無理するな」と気づかってくれたりした。

選挙運動で吉田の担つた役割は、事務所内の雑用、日程の進度チェックだった。残業をやつと終えて、事務所に駆けつけると、メンバーのみんながあと片付けにかかつっていたこともままあつた。学生のように、フルタイムで運動にかかわれないことは残念でもあり、他のメンバーに済まなくも思つたが、彼は自分の仕事も、このグループもどちらもなおざりにするわけにはいかなかつた。サラリーマンとしての自分がやれることは何か、と考えていた。ただ、ポスター張りの人間と車の手配を引き受けたが、前日になつても思うように人が集まらなくて迷惑をかけたこともあつた。

吉田は、このグループを中心メンバーとしての活動を長期戦の構えでやろうと思っている。運動を一生の問題として取り組むためには、自分の生活をちゃんとしていなければならぬ。社会を構成する一員として自分の仕事に対しても十分な責任を負い、しかし、だからといって世の中を見る見方が単に一企業人、一ビジネスマンとして終わりたくないと思つてゐる。

立脚点をまず、「自分が生活をしている」というレベルにおいて社会を見ていただきたい、その「生活人」という立場から、国は、政治は何をやらなくてはならないか、を考える。ものを作り、売る立場からではなく、ものを買い、日々の暮らしを守つていく立場から考えると、現在は「収入」という面からものごとを見ることが多く、「支出」の質についてはなおざりにされていることが多い。土や緑が少なくて暑くなつたのなら、クーラーをつけようというのではなく、土や緑を増やさう、病気になれば医者に行こうといふのではなく、病気にならないような生活をしようといふのである。

彼は、このグループの一員である石川しのぶと近く結婚する予定である。彼にいわせれば、「歳もとしだし、見合いでもしようか、と思つたが、仕事も忙しいし、また、自分のこののような内的状況を全く知らない女性はどうやって理解してもらうか、その時間と労力を考へるとうんざり」して、ともに活動している彼女を選んだというが、「それに、彼女は『ゴリゴリの活動家』といったタイプの女性ではなく、一緒に暮らしていくても楽しい家庭が築けるのではないか」とも述べている。現在、彼は文鳥二羽と一緒に、3DKのマンションに一人で暮らしている。まもなく、このだだっ広いだけで殺風景な部屋の住人が一人増え、文鳥の世話係も変わるだろう。

それぞれの道

円山、吉田は、このグループの「とりえ」として、次の二点をあげる。グループへの「出入りが全く自由」なことと、「人の意見によく耳を傾ける」ことだ。グループ内では、よく十時間も二十時間も、一つの問題について討論することがある。さすがに体力や知力は消耗するが、とことん話し合っていくうちに、それぞれのメンバーの内に納得できるものが生まれ、最終的には説得力のある結論に至る。

この選挙においても、候補者・菅と選挙事務長・田上の語る言葉には、それぞれのパーソナリティのフィルターがかかつており、「自分のことば」として説得していた。選挙で敗れはしたもの、供託金返却票（三万票強）をはるかに超え、最下位当選者に肉迫したこと、そして、それ以上に、無名の、金も組織もない候補者に、多くの市民が手応えのある反応を示したことが何よりの励みになつた。四十九年の参院選の時の、「市川房枝だったからたたかえたのではないか」という自分たちの運動に対する不安や危惧は、完全にフッ切ることができた。

今回の選挙を結節点として、市民運動から政治運動へ——個別テーマ毎に運動を組む市民運動グループから、現在の状況に一石を投じることのできる政治運動へと脱皮を図ることができたが、政治運動としては、やっと今スタート台についたばかりである。

このグループにとっての今後の課題は、既存の問題に取り組むだけではなく、自前の政策立案能力をもつこと、そのための政策スタッフを創り出すこと、そして、この運動を持続させるための強力で恒常的なメンバーを育てていくことがどうしても不可欠だ、と二人は考へている。

「わたしたちのグループに、これから先、何が待つていて、どんな状況の変化が起こるか、予測をすることは難しい。ただ、気楽な仲間意識でやつてきた今までとは違つた覚悟が、一人ひとりのうちに必要となるだろう」——市民運動をともに担い、あるいは、それ以前から深くかかわりをもち続けてきた「くされ縁」の二人の発言だからこそ、この言葉は重く、グループにも、自らにも課せられてくる。

円山は、この四月から郷里富山に帰つて、県經濟農業協同組合連合会に勤める。東京を去ることで、このグループとも遠ざかることになる彼は、「何かホッとする気持とともに、ここまできて、もう少し、といった気持もする」という。

吉田は、再び、エンジニアとしての毎日と、月一回の市民セミナー参加、このグループの機関誌『シビルミニマム』の発送手伝い、といった日々が待つていて。

円山も吉田も、それぞれの道を歩いていく。これから先、政治に直接的にかかわることによつて、自らを確かめていくのか、あるいは、必要と認められる時にのみかかわりをもつのか、それはそれで各自の納得のいく道を進んでいくだろう。だが、二人とも『草の根』が『根なし草』になつてはならない。地道な、日々の暮らしに根ざしたものでなければ」という想いを抱いて、この運動を振り返る。

女性活動家たち

石川しのぶの場合

「朝七時、目覚まし時計のベルか妹の声で目が覚める。ラッシュアワーの通勤電車にもまれ、八時四十分ごろ神田にある小さな会社に着く。九時から五時半まで、そこで平凡なOLとして勤務。

さて、待ちに待つた五時半、いのいちばんに会社を飛び出し、菅さんたちがいる街頭演説会場に向かう。それからずっと菅さんたちと行動を共にする。その後、事務所に帰つて、雑務、お金の計算などをしていると、いつの間にか、シンデレラの時間リミットの十二時。終電間近の国電に飛び乗り、武蔵境から高円寺のアパートにたどり着くと、もう一時。だが、帰つてもすぐ寝るというわけにもいかず、なんだかんだで二時か三時ごろ床に入る」

——運動がスタートしてから選挙が終わるまで、二ヶ月間の石川しのぶ（二十三歳）の毎日である。彼女がこうしたハードな生活を二ヶ月間も無事に続けられたのは、ひとえに2Kのアパートに同居する彼女の妹さんのおかげだ。朝は号令をかけてくれ、掃除、洗濯、食事の支度、すべて妹さんまかせ。時には、新聞、テレビの菅に関する情報や、妹さんの周りでの



石川しのぶ

菅の評判を報告してくれることもあり、運動の中にいる彼女に客観的な視点を与える手助けにもなってくれた。

彼女にとってちょっと残念だったことは、この猛烈なスケジュールのせいで、好きなエレクトーンを弾く暇が全くなかったことと、それまで続けていたケイコごとを一つともやめざるをえなかつたことだという。この選挙へのこうしたかかわり方そのものが、彼女のパーソナリティを表わしている。彼女は、自分を「脱線列車+急行列車+鉄道」だと自己規定している。

石川しのぶは、群馬県の前橋市で生まれ育った。彼女の自我形成過程と、それを支える環境が、彼女の「政治への関心」を育てていったようである。前橋高校時代はちょうど、六〇年代末の大学紛争の影響が高校にも波及し、全国的に高校生の政治的関心が高まつたころだつた。彼女もデモに参加したり、友人たちと議論をたたかわせたり、という高校生活を送つていた。そのころの彼女に大きな影響を与えたのは、高校の日本史の先生だつた。日共の党員で、デモの時にも隣り合わせになつたりしたことのあるこの先生から、彼女は「政治に対する自由な考え方」を植えつけられた、という。また、近所の本屋のおばあちゃんから「女性参政権運動を始めた一人である群馬の女性」の話を熱心に聞いたりしたのも、この頃だつた。

彼女は四十七年高校を卒業して中央大学法学部に入学。大学二年から佐竹教授のゼミナールで政治思想史を学んだ。なかでも、「直接民主主義」に強い関心を抱いていた。だが、佐竹ゼミで学びながらも、一方では、「大学のゼミで学ぶことは、やはり文字の上のことでしかない。できれば、現実に加担したい」と考えていたという。そうしたころ、婦人有権者同盟恒例の「新有権者の集い・

モチつき大会」に、佐竹教授に連れられて出席し、市川房枝女史に会う。これが、菅たちのグループに加わっていくスタートとなつた。

福田裕子の場合

福田裕子（二十七歳）が、菅たちのグループと出会い、その中心メンバーの一になつたのは、もう少し前である。

彼女は、東京生まれの東京育ち、現在は都下日野市に祖母、父母、そしてネコのブーと一緒に暮らしている。彼女の中に、こうした運動にかかわっていく芽が生まれたのは、相模女子大三年の頃だつた。六〇年代後半、全国の大学に吹き荒れた大学紛争の嵐は、七〇年に入って鎮静に向かつていつた。しかし、大学の中では、明らかにその後遺症が残つていた。とりわけ、文化系サークルにおいては、紛争時に政治的分断がなされてしまい、そうした混迷を修復することなくしては正常なサークル活動がやれない状況になつていた。

彼女は、そうした中で、学内文化サークルの連合である文連で活動していた。当時、自治会のリーダーシップを握っていた民青のやり方に不満を感じ、文連主催の「水無月祭」に山崎正和氏を招いたりした。こうした文連の活動を通じて、彼女は運動への第一段階のトレーニングを経験する。

大学時代の友人に紹介されて、彼女が菅に会うのは、昭和四十八年夏、すなわち菅たちのグループが前回の参院選に市川房枝女史をかつぎ出



石川裕子

す一年程前だつた。大学を卒業後、経企庁の外郭団体である離島振興会に勤めていた彼女は、菅たちが主催する都市問題の研究グループ「より良い住まいを求める市民の会」のメンバーに加わる。この「市民の会」では土地問題を軸に都市生活者の問題を積極的に取り上げ、市民運動グループとしての活動を開いていく方向を打ち出していた。このころ、このグループの中に通称「恐化会」と呼ばれる「恐怖の化学物質を追放するグループ」が誕生し、彼女はその中心メンバーの一人として活動を開始する。そして、四十九年、市川房枝女史の参院選かつぎ出しに加わっていく。

理想選挙の中で

私たちのグループにとって、大きな転換と展開の節になつたのが、前回参院選への市川房枝女史かつぎ出しである。昭和四十九年の成人式の日に「新有権者の集い」に出席することで、菅のグループとかかわりのできた石川しのぶは、まだ大学生で比較的時間がフリーアップするために、参院選の期間中、朝から夜まで運動の本拠地、婦選会館で活動した。「文字の上だけではなく、現実に参加したい」と考えていた彼女には、現代の若い層にありがちな「選挙アレルギー」といったものは少なく、「唯一」の政治的手段である選挙こそ、有効に使うべきだと考えていた。菅のグループとの実質的なかかわりは、市川選挙が初めてであり、さまざまナリティを持った人間たちが、忙しく動きまわっている中で、彼女は最初自分とグループとのかかわり方について、多少のとまどいを感じざるをえなかつた。だが、運動の進展について、自らの参加意識を「納得」しつつ、グループそのものも「理解」していく。

一方、「恐化会」で、「合成洗剤」「食品添加物」「石油タンパク」などの問題について月二回の勉強会や、それらの問題の専門家を訪ねて話を聞く、といった活動を続けていた福田裕子にとって、「市川選挙」というのは、当初いくらく唐突に感じられた。

しかし、その前年、一橋大学の大学祭にグループで参加し、粉石けんの販売や、合成洗剤の有害性についてマイクを持つて語ったりした経験を経て、選挙を「社会運動を拡げる場としてとらえる」という認識に至つた。そうして彼女は、移動テント事務所に粉石けんを置き、積極的に合成洗剤の有害性をPRしていくべきだと提案し、具体的な選挙活動と「自分たちの運動」を見事に一体化させていった。この移動テント事務所の発想が、現在、田中栄（二十九歳）を中心活動している「青テント」グループにつながっていく。

市川選挙から約一年後、グループは統一地方選挙に、仲間の田中栄を押し出すことを決定した。議論に加わっていた福田は、この田中栄の武藏野市議選立候補によつて、グループが「市川ばなれ」することを切望していた。「草の根理想選挙は市川房枝だからできただんだ」という見方を、グループの中からも外からもぬぐい去りたかった。そうしなければ、市民の側からの主体的な政治参加の輪は拡がりえないという強い想いが、彼女の心中にも根づいていた。このころ、彼女は「離島振興会」を退職して、母校の高校で家庭科を教えていた。武藏野市議選の期間中、彼女は連日、運動員たちの食事の世話を引きうけた。

石川しのぶのもとに、「すぐ来てくれば」というハガキが飛び込んだのは、市議選直前の五十年三月末だった。彼女は、この選挙がどこかしら「思いつき」のように思え、その辺がちょっと気がか

りだったのだが、学生だったことと、「乗りかかった舟」という気持も働いて、結局また連日、運動に加わっていくことになった。そして、この頃になると、選挙というもののもつてている「おもしろさ」が自分なりに大そうだいじなものに思われはじめていた。

選挙の結果は、残念ながらわずか一票差で敗れはしたものの、自前の運動の核と拡がりが出てきたことは確かだった。候補者の田中栄は「青テント」の活動を、より一層熱心にやりはじめた。

やれるだけやる

武蔵野市議選後、グループは研究会や機関誌『シビルミニマム』の発行といった日常活動に戻っていた。福田も、医療問題、市民セミナーなどの勉強会、『シビルミニマム』の編集・発送・会計といった活動で、毎月があつという間に過ぎていき、それが彼女の生活のサイクルの中に定着しつつあった。

また、石川は、この間大学を卒業し、現在の会社に就職する。彼女にいわせれば、「法律家になりましたかたのだが、忍耐力も頭脳も足りず、最も楽なOL稼業に入り、世の中のスルマ湯につかりはじめた。なんとかしなければ!と思いつつも毎日を惰性で過ごしていた」という。世の中では、ロッキード疑惑が発覚し、わが国の戦後の政治体制が、深く問い合わせはじめていた。

グループでは、五十一年十二月の衆議院議員選挙に菅直人を推し出すことを決定し、十月の「草の根千円パーティ」をもって準備活動に入していく。福田裕子も石川しのぶも、当然のこととして、運動の渦中にはいり、活動を展開していく。

運動開始時点において、二人とも、運動の展開についてはおおむね楽観視していた。「このグループの中にいて身についた(?)考え方として、なにしろ、やるだけやれば後はどうにかなるし、どうにかするようになるだろう、と思うようになっていた」と、福田はいう。

石川のほうも、「ここまで運動が浸透するか、票がどれぐらい伸びるか、カンパの集まりはどうか、人々の反応はどうか、といったことと、候補者がどこまで頑張れる人であるか、グループのみんながどのようにいろんな面でうまくやっていけるか、といったことに興味があった。全体的な展望としては、比較的楽観視していた。ただ、少し気がかりだったことは、終盤戦までグループの人々の体力と知力がフルに發揮できるか否かということと、運動を進める中では、おそらく不合理なことが随所にみられるだろうが、それらが運動の増幅を阻むことになりはしないか、ということだった」という。

石川にとって、選挙運動中最も印象深かったことは、なんといっても、タクシーの運転手さんからカンパをもらった一件である。

毎晩午前様という生活で、タクシーで帰ることにも慣れたある夜、「ああ、また今夜もタクシーに乗る時間になっちゃった……」と思いながら、タクシーのシートに腰を下ろした。そして、いつものように運転手さんと話をはじめ、いつものように選挙の話から七区のことに、そして菅の話へと進めていこうとして、この日はちょっと調子が違うことに気がついた。

運転手「スガっていう若い人が立ってるねえ」

石川「スガじゃなく、カンと読むんですよ」

運転手「あの人はじめてみたけど、若いんでしょ。ちょっと弱そうな感じだねエ。何やつてる人なんだろ」

石川は、彼が昔の名前を知っていたことに力を得、ここぞとばかりしゃべりまくった。なんと、この運転手氏は、私たちの運動や市民運動について深い理解と興味を示し、まだ七区に越してきて三月だというのに、「自分の知り合いを十人は固めてみせる」といってのけた。その上、彼女が「ありがとう」といって車を降りようとすると、五百円札を彼女の手に握らせ、「これ少ないけどカンペね。名前と住所教えるから、ハガキかなんかあるでしょ、それ送つてよ」と言い残して去つていった。

石川は感激してしまった。こんなことが、そうしばしばあるはずもないとは思いながらも、それ以来、タクシーで帰る時は、やっぱり相手の反応をうかがい、期待をこめて話しかけてみるようになった、という。その運転手氏からは、開票の翌日「ヨクヤツタ、ゴクロウサン」という電報が選挙事務所に入った。ちなみに、彼の名は、鶴巣さんという。

また、新宿駅頭で街頭演説をやつた時、港区の選挙管理委員会に勤めるという一人の青年からカンペをもらったこともある。彼らは「君たちの運動に参加したいのだが、職務上できないので、せめてカンペをしたい」といった。開票が済んでから彼らの一人からも鶴巣さんと同様の電話が入り、石川を喜ばせた。

こうした貴重な体験を通して、石川は「ある程度政治への関心を持つている人たちならば、何かしら新しいものを求めている、ということ。それはまた、何らかの形で自分自身が参加できる形の運動には少なからず興味と関心を抱くものだ」ということを、実感として強く感じることができた。

そして、いま

福田も石川も、現在はまた高校教師とO.L.という日常生活に戻っている。グループの活動も、いままは日常活動が中心になっている。福田は、後輩でもある教え子たちに、時々、今度の選挙の話や私たちの活動について語ることがあるという。その際、彼女は必ずこう付け加える。

「私の生き方を見つめていて。それをどう評価し、受けとめるかは、あなた方しだいよ。ただ、十年たつて、あなたたちが今の私と同じ年令になつた時、私がここで話したことのいくらかでもフツと思い出してくれればそれでいいわ」

日頃、生徒たちと友だち同士のようにつき合っている彼女の授業は、「雑談の多い時間」として、生徒たちの間でもなかなか好評だという。彼女はO.L.から教師に転職してよかつた、と思つている。そして、ずっと教師を続けたいと考えている。

女であることの自覚

さて、石川しのぶは、昭和五十年の四月、結婚にゴールインした。相手はグループの一員である吉田光孝（二十九歳）。「自分で納得しながらやっていく人間だ」というのが彼女の吉田光孝評である。

る。「話し合いながらやつていける家庭をつくりたい。運動の推移そのものが、自分たちの生活の一部になっちゃうような、そんな生き方をしたい。グループの一人ひとりが、これからどのように生きていくのか、ずっと見ていてほしい」というのが、石川の今後への展望と興味である。

福田は最近、大学時代の先輩がいつていた言葉が、何となく実感できるようになつたという。

「いつか革命が起こる。革命を起こした男たちに、女である自分がどうかかわっていくのかを、ずっとみていたい」

その先輩は、福田の一代前に文連で活動していた女性で、かなりラディカルだったという。現在の福田にとって、このことばは決して、運動に対する女性の距離の大きさを示しているのではない。「女であること」を自覚した上で、十分に運動に加担していく際の、自分なりの確かな立脚点なのだ、と彼女には思えるのである。

教室から街頭へ

藤岡郁子の場合

父 「就職のこともあるし、だいいち卒論は書けたのか。手伝うのはいい加減にしなさい」

母 「……(無言)」

友人A 「(やや軽蔑をこめて) えらいわねえ」

友人B 「よおやるわ」

友人C 「このいそがしいのに……」

友人D 「(この子は少し変わっています) やんなさいよ。ガンバレ!」

藤岡郁子（津田塾大国際関係学科四年）が、この選挙を手伝うことになった時の、彼女の周囲の人たちの反応である。彼女にとって、十一月は就職の時期でもあり、また、卒論提出の期日が十二月六日に迫っていた。

藤岡は、候補者の菅と以前から面識があつた。彼女の両親の仲人、が、菅の両親だったのである。そういう関係で、五十年の武蔵野市議選の折、菅



藤岡郁子



西村亜希子

西村亜希子の場合

選挙戦たけなわのころ、西村亜希子（国際基督教大言語学科四年）は、大学の授業で「誰かにインタビューし、記事を書く」という宿題を課され

の妻伸子（彼女は、藤岡の大学の先輩にあたる）から「手伝いにこないか」という電話を受けた。それまでも大学祭で手伝ったことがある、という気安さから、「軽い気持で」参加した。彼女は、その気持を「特別に政治に関心があつたというわけではなかつた。運動にかかわっている人たちが人間的におもしろく、興味をもつたこと、遊びの企画があつたこと、青空テントという、少しは私も問題意識があり、かかわれそうな部分があつたことなどから加わつた」と語る。

それ以後、彼女はグループの活動に参加してきた。だが、グループとのかかわりが日常化していく中で、何かしらモヤモヤとしたものが、彼女の内に湧いてきた。つまり、彼女は二年間もグループとつき合つていながらこのグループが一体何なのか、ちゃんと納得できる説明を自分自身に用意できていないことに気付いたのだ。グループの成り立ちは？ グループのこれまでの活動経過は？ グループの活動原理や論理は？ グループの目指すものは？ いや第一、これは「グループ」なのだろうか？ このグループにとつて自分は一体？ 自分にとつてグループは一体？

——次々と想い浮かぶ自問を前に、藤岡は一時、立ち往生しそうになつた。藤岡は個人的にいろいろなメンバーに尋ねたが、結局、彼女の中に一つのイメージや納得が結実するまでには至らなかつた。衆院選は藤岡にとって卒論や就職の問題をかかえた時期と重なつており、今回の活動参加は控えようと思っていたのだが、結局、藤岡は、このグループの運動を卒論のテーマとすることによつて、グループと自分とのかかわりを意識化、対象化しようと試みる。四年間の大学生活の総括である卒業論文は、この選挙運動の渦中で書かれた——選挙カーのウグイス嬢として声をはり上げ、菅宅に泊り込みで、メンバーの食事作りを手伝うかたわらで。

すべての選挙運動を終え、投票日に、彼女は卒論の最後の仕上げをする。そして、翌十二月六日、眠い眼をこすり、選挙速報に耳を傾けながら、出来上がつたばかりの卒論を手に大学へ向かつた。

彼女は、やはりこの選挙にかかわつてよかつた、と思う。彼女の内にあつた、モヤモヤとした自問がすべてこの間にスッキリしたわけではない。むしろ、このモヤモヤを不斷に自問していくことの大切さを、確かに自分のものにすることができた。

グループとのかかわりをもたなかつたころ、彼女は政治には全く興味のない女の子だった。彼女にいわせれば、「まさにそのころの自分は『おじょうさん』でやつていけそうな女の子だった」という。二年間、何らかの形でグループの活動にかかわつてきて、もはや「もとの状態」には戻れないことを痛感している。書物で得られた知識は、時間が経つと忘れてしまう。しかし、トレーニングされたものは、たとえ冷却期間があつたとしても、以前の状態には復さない。

内にばかり関心が向いていて、長い間変わらなかつた自分が、グループとの二年間のかかわりを通じて「外に向かつて一步踏み出すことによつて、状況は変わる」ということを知り、いま、徐々に自分自身が大きな変化を遂げつつあることを、藤岡は感じている。

た。その時、ちょうど街頭で私たちのグループが手渡したビラを見て、「おもしろい記事が書けそうだ」と思い、選挙事務所へ電話をし、候補者菅のインタビューを申し込み、事務所にやつてきた。話を聞くうちに、菅のような若い候補者がどこまで聞えるか、社会的地位のない学生や若い社会人のグループがどこまで運動を展開していくことができるか、また、今まで自分の世界からかけ離れたところにあった政治や市民運動が実際にはどのように行なわれているのか、といった興味から、運動を手伝うことになる。

ちょうどそのころ、彼女は試験中だったが、その合間をぬつて、ビラまきや電話番などにたずさわった。モダンダンスとフラメンコを習い、学校へはわりとまじめに通っている彼女にとって、市民運動や政治運動にかかるのはこれが全くの初体験だった。

選挙期間中、菅や他のメンバーが、一人よがりの自負心や使命感といったものを感じさせず、どちらかといえば、余裕のある雰囲気だったことが、彼女に好感をもたせた。

選挙がすんだ後も、彼女はこのグループの活動に参加するつもりである。研究会で「婦人の労働問題」などもどしどし取り上げてもらいたい、と思っている。

トレーニングの場として

いまや大学進学率は三〇パーセントを超えている。また昨年、女性の進学率が、男性のそれを上回わった。すなわち、男女を問わず、同世代の三人のうちの一人は大学生なのである。彼らにとって、大学や学生生活とは一体何なのだろうか。テレビと受験競争の中で育ち、静かで穏やかな学園

生活を「無事に」通り過ぎていく多くの学生たちにとって、「世の中のこと」や「自分自身」を考える「きっかけ」は確かに少ないのかもしれない。大学での生活を、就職して社会人となるまでの、あるいは、結婚して家庭に入るまでの「猶予」としてとらえることは、それ自体、必ずしも非難されるべきことではないかもしれない。

すぐ

問題は、彼や彼女たちが、大学での数年間を自らの人生においていかなる時期としてとらえるのか、ということである。今後予測される厳しい状況の中で、一社会人として、また一個の人間として、彼らはいかに自らの人生を歩んでいくのか——「猶予」期間中に、そのための「準備」がなされていなくてはならないだろう。その準備が、「大卒」という肩書きだけでは、あまりにもさびしすぎる。

この選挙にかかわってきた学生たちは、運動への参加を通じて、学園の中では求めることのできない自分自身の「トレーニングの場」として、この選挙をとらえているようにみえる。そして、自分が動くことによって、世の中にに対する視座をより確かなものにし、主体としての自己認識を強めつつある。彼らは運動を終え、一様に「楽しかった」「しんどかった」というが、彼らにとって運動参加が決して「楽しいだけ」「しんどいだけ」のものではなかつたこと

も確かである。

安江満雄の場合

安江満雄（早稲田大学教育学部三年）は、鎌倉から毎日、早稲田へ通つ



安江満雄

ている。生まれてからずっと鎌倉の住人である。

高校のころ、安江は生徒会活動をやっていたのだが、「人前でしゃべるので苦手で」、早稲田に入るとすぐ「雄弁会」に入会する。このサークルは、古くは緒方竹虎、近いところでは海部俊樹といった数多くの著名な政治家を生み出しており、「政治の実体に主体的にかかわろうとしている人たち」が寄り集まっている。各種の研究会や発声練習などが主な活動である。この雄弁会で、二年の時、安江は幹事長をつとめることになる。

大学一年の六月、青年たちに担ぎ出され選挙を闘っている八十歳を越した市川房枝の姿にハートを打たれ、若者らしい正義感から、市川選挙に参加し、私たちのグループと出会う。大学二年の時は、武藏野市議選で田中栄の選挙に参加する一方、彼の生まれ育った鎌倉で、知事選において「長洲一二と鎌倉市民の会」事務局を担当、その後も「市民の市政を進める会」事務局の一員として、市民参加の市政をめざし活動を続けている。そして、当然のこととして、大学三年の彼は、衆院選で菅の選挙に参加する。

彼が大学で所属している「雄弁会」は、政治に無関心な大学生が多いなかで、特に「政治志向」の強い学生たちが集まっている。この「雄弁会」の学生たちは、選挙が始まると、あちこちの立候補者たちの選挙事務所に散らばっていく。従来、自民党候補のところへ行く学生たちが大半だったのだが、今回の衆院選では、新自由クラブの立候補者の選挙事務所へ十数名、そして、菅のもとへ、安江を含め七名が参加、新しい流れを生む。これは、現代の政治のなかで何が次の時代を担う力となるか、に対する「若者の予感」というべきものかもしれない。

安江は選挙期間中、早朝から深夜まで、ありとあらゆることをやってのけた。そのうちのいくつかと、その時の彼の気持は次のようなものである。

昭和四十九年参院選における七区の市川・青島票の分析。——両氏の票をすべて拾えれば、ヒヨツトするとヒヨツとするかも。

序盤戦で、深夜三時ごろ、選挙カーの掃除を終え、やつとフトンにもぐり込む——いつたいこの先どうなるのか。

公示日とその翌日の二日間、ポスター貼りの人と車の手配——朝から深夜まで、初めて会った人たちが、寒い中で慣れぬ手で水仕事をしてガンバってくれたことに感激、夜遅く、「あまり疲れたので、今お茶を飲んでいるんですが、残りを今日中にやらなければいけませんか」と電話がかかり、「できるだけやって下さい」と答えるのが本当につらかった。

七区内の各市の革新無所属議員への、協力要請の連絡——タッチの差で社会党候補への協力を決めていたり、といろんな議員がいた。

選挙を終えて、彼は思う。「運動というのはやれば必ず結果が出るのが好きだ。どれだけ多くのことを考えても、机の前にいるだけでは何の役にも立たない」と。

まもなく、彼は就職の時期を迎える。彼は鎌倉市役所に勤めようと思っている。

玉置春仁の場合

玉置春仁は、北海道出身の元高校球児。早稲田大学社会学部二年に在籍し、安江と同じく「雄弁

会」に入会している。以下は、安江によつて今回の選挙にひきずり込まれ、今や私たちのグループのただ一人の専従事務局員として、いまから的一年間を賭けようとしている玉置春仁への一問一答。

(一) 今回の運動への直接的な参加の契機は?

菅の選挙事務所のメンバーの中に僕の所属する雄弁会の先輩、安江さんがいたこと。ある選挙事務所に行くことになつて、その前日、暇だったので安江さんの顔でも見ようかと事務所を訪問したのが運のツキ。人が少なくて可哀そうなので何となく居すわつてしまつた。義理と人情で弱きを助けにはいられなかつたのです。菅さんが親分、田上さんが代貸し、さしづめ僕は客分の健さんというところでしょう。

(二) 参加時点での「アナタ」なりの運動への興味は?

選挙運動への興味は非常に深かつた。市民運動に対する認識はエゴイスティックな運動という域を出なかつた。

(三) 運動展開へのアナタなりの想像や憶測は?

目の前に供託金没収がちらつきました。無力に思えてしかたなかつた。みんながいうほど楽観は出来なかつた。

(四) 参加時点での「アナタ」の周りの反応や声は?

どこの馬の骨ともわからぬ候補者の事務所にいるなんて先見の明がない。暇人、無反応、等々。

(五) 運動中についたことは?

ハガキ三万五千枚処理。開票立会人十五人折衝、決定。鍋を三鷹の菅宅にまで自転車で運ぶ。事

務長にイビられる。事務長をイビる、等々。事務所の中でセクションを与えられたことは非常によかつた。創造の喜びを感じた。

(六) 運動中に感じ、考えたことは?

市民運動の意外な影響力におどろいた。運動の中で、市民という意識がなかつた僕がいつのまにやら市民であることを意識していた。運動を質量とともにマキシムにもつていけば、必ず日本丸の航路修正は可能だと思いはじめた。

(七) 運動から二か月、いま思つていることは?

市民運動の何たるかも知らずによく一緒にやれたと思う。残務にかかわつて、後始末の重要性を感じた。

(八) このグループの今後の運動展開について?

ベストを求める必要はないよ。ベターでいいんだよ。希望が大きければ、失望も大きい。step by step!

(九) もと、あなたのことを教えて下さい。どんな人間にかこまれて、どんなところに住んでいますか?

事務所から徒歩一分の六帖のアパートに住んでいます。千客万来、毎日ウイスキーのお湯割りを飲んでいます。時折映画を見に行くのが楽しみ。笠井紀美子が大好き。

(十) 何をやつている人ですか?



189 草の根で挑んだ国政

玉置春仁

「参加民主主義をめざす市民の会」の専従事務局長です。本業は一応、学生ということになつています。

(+) あなたはどんな人ですか？

質実剛健、遊ぶことを知らない……？

新しい萌芽

かつて、大学には、綿々たる学生運動の歴史があった。大学に入学するともなく、上級生から何らかの形でオルグられ、否応なく社会的、政治的関心に目覚めさせられていく。もちろんこのことだが、大学生の政治的問題意識を育てるのに役立つており、こうした、上級生から下級生への引き継ぎが、学生運動の層の厚さと連続性を支えていたのだが、この方法論のうちには、一方的にパターン化され、それゆえに社会的状況とはいま一つ実際的にクロスしえない弱さがあった。

菅や片岡たちが大学生だった六〇年代後半の、あの壮大な大学紛争は、かつての学生運動の総集編であったと同時に、崩壊であり、そして新しい萌芽であった。私たちのグループは、市民運動を続けていくなかで、氣ながらこの芽を育ててきた、と思っている。それは「自分・個人・人間」をキーワードにしつつ、まさに自分たちの手で自分たちの住む社会をつくり出していく、という考え方に基づくものである。今回の選挙も「運動展開のもつ社会的意味」「社会・政治への関心プラス運動への関心」「かかる主体としての自己納得」の三要素が絡み合い、重なり合う中で組まれ、展開された運動であったと思う。この三つのうち、いずれの要素が欠落しても、望ましい運動展開

は果たせなかつたに違いない。

さまざまな支持者たち

主婦の立場から

「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」の推薦で、菅直人さんが今回の衆院選に立候補されることとなり、私の所属する『サラリーマン同盟』が支援を決定。このグループは前々から好意をもつていたし、機関誌『シビルミニマム』を通して、その行動力と柔軟な考え方と共に感していった。一度、選挙というものにかかわってみたい、という好奇心も手伝って、選挙運動に参加する。

はたして理想選挙をどこまで貫けるのか、菅さんを通して世に問うてみるとよいチャンス。しかし、ほんとうに市川さんの応援がないとわかった時は、どうなることかと、いかに負けるかを本気で心配。外側から見る限りでは、この人たちにどこまで勝算があるのか疑問にもみえ、遊びの一変形のようにも思える。

夫と子供たちの反応は『おもしろいけど、とても無理』『また、ママの道楽がはじまつた』というもの。

ウグイス嬢（？）はぜひ一度やってみたかったことなので、いそいそと手伝ったが、これが案外むづかしい。PTA役員をした経験から、マイクには自信があるつもりだったが、私の持ち味（他人がそういうてくれる）のソフトな話しかけは、こと選挙のスポットには落第らしく、一日でクリア。

さて、次は応援演説。あの選挙カーの上というのは、なんとも落ち着かないものだ。寒さと緊張で、さながら『オコリ』患者のごとくガタガタとふるえ、なんとかしてそのふるえを止めようと足踏みしたり、そつとももをつねったりしたがダメ。見かねて、菅さんが途中で車をおり、椅子を持ってきてくれた。演説を終えて車をおりたら、こんどはキリキリと胃がさし込み、気の小さい自分を改めて再認識させられ、ガッカリ。

選挙も終わりに近づいたというのに、グループの人たちにあまり悲壮感がない。といって、シラけているのでもないようだし、不まじめというのでもない。ちょっとびり楽しんでもいるようだし、今の若い人たちの感覚はおもしろい、と思う。

運動最終日の最後の立会演説会は感激。話す人と聞く人との心の通り合いを確かめることが出来た。この手応えが欲しくて、私はいつも歩いてきたように思う。涙が出た。

選挙が済んで、今思うことは、もっと何回も行って協力してあげたかった。主婦であること、遠いこと、あまり身体が丈夫でないことから、思いの十分の一も協力してあげられなかつた。結果が良かつただけに、いつそうそれが残念だ。

このグループに望むことは、今から先も『シビルミニマム』をしつかり発行すること。若々しい頭脳による、未知のエネルギーを引き出してほしい。私たちのように、硬化した思想をもどかしく思つてゐる者はたくさん



佐々木冴子

あると思う。老と若をつなぐ、何か行動は出来ないものか」

× × ×

佐々木冴子——大学助教授の夫、大学一年の長男、高校一年の次男あり。主婦。「サラリーマン同盟」常務委員。好きな言葉——「一期一会」。最大の関心事——「教育問題」。あなたはどんな人ですか——矛盾とフラストレーションのかたまり。熱しやすくさめやすい。

先輩として

「新聞では当初、菅直人は軽視されていた。これに義憤を感じながらも、田中角栄と一騎打ちのため新潟に入り、二十九日まで戦って帰京。すると、菅はボランティアの応援で善戦していることを知り、ぜひ彼を当選させたいと応援に駆けつける。

若い世代を中心とした菅陣営が、少しも悲壮感にかられず、また、自己陶酔した『オゴリ』もなく、自信の有無は不明だが、すこぶる沈着に、淡々として戦っている姿にまず感心。戦う陣営は得てして勝ちたい一心からアセルものであり、新アイデアを探る以上、オゴリが見られるものであるが、それがなかつた。こちらがいくら興奮しても、一般には自身のことではないので、切迫感はそんなないのである。その点を理解せぬと、簡単に大衆はシラケテイルというが、眞実はそうではないのである。菅陣営の、この冷静な態度が有権者にプラス面として映つたよう思う。

だが、七区の有権者がどれほどこのグループの理念、政策、戦う態度に理解を示し、支持するかは全く見当がつかなかつた。開票結果の七万一千票は予想外で、五万票が上成績と思つていた。

街頭に出てみると、吉祥寺駅頭の聴衆の反応は、マジメな眼差し。駅前商店街からも妨害や無理解な声を聞かなかつた。

私は、わずかな私の知名度を以て貢献したいと思い、専ら選挙カーでマイクを握つた。候補者本人がタスキを掛けぬ意志的スタイルだったので、このアイデアをさらに生かすため、私は『ガマンならん隊』のタスキを掛けた。街頭カンパに対し、少額のものにもいちいち領収書を発行している姿に感動した」

×

古宮杜司男——五十九歳。妻と、「鈍感な人間以上に、人間の心を読む」愛犬と三人暮らし。終

戦直後から戦災児救済事業に従事。六年前から老人福祉運動を展開、現在「日本老後保障獲得行動連盟(もうガマンならん隊)」の中央委員長。年中、玄米食。酒は全くダメ。タバコ一日三十本。昭和四十九年に北海道宗谷から東京まで五ヶ月間三千キロ福祉署名大行脚。五十一年には一万五千キロ、「ロツキード・キヤラバン」を達成。



古宮杜司男

内部の“傍観者”たち

小山泰夫の場合

——このグループの前途をどう思つてますか。

「前途については楽観しています。ただ、現在のようなあり方で、そのまま育つてゆくのが果たしていいのかどうか。

いまのグループ運営は、余りにも人間関係に頼りすぎているように思う。はじめのうちはそれでいいし、一定程度まではそれで成長が可能だと思うが、やはり何らかの形式化が必要なのではないだろうか」

——市民運動についてはどう考えますか。

「私はこれまで政治を学問としてやってきたからでしょうが、世の中を歴史法則的に見ようとする傾向があります。こういう観点に立つと、人間のやることはささやかなことだと思う。だから、このグループを含めて、市民運動については、伸びてもいいし伸びなくてもいい。私の興味は、社会状況のなかで市民運動の出てくる可能性を、科学的かつ客観的に分析できるかということです。應々にして、運動家はこの科学的客觀性を認めようとしないものです。だから、私はどうも運動家にはなれないようです」

選挙後、小山泰夫（二十八歳、慶應大学研究生）は、このように語っている。

今回の選挙運動期間、彼は供託手続き、立候補の推薦届け出、各種団体からのアンケートへの回答、選挙費用の公費負担請求の契約など、いわば『文書課長』的な役割を受けもつた。

小山は、慶大時代に一緒だった田上（選挙事務長）の紹介で、市川選の前からこのグループのことはある程度知っていた。が、このグループで活動するようになつたのは、「市民思想研究会」のメンバーになつてからである。

市民思想研究会は、今回の選挙に先立つ一年ほど前に、小山の大学の先輩、板垣氏を中心にして、小山、菅、片岡などが始めた。内容は、政治や市民に関する古典を読む会といったところ。板垣氏が大学のマスタークラスでマキャベリの研究をしていたので、彼を座長に、月二～四回程度のペースで進めてきた。いまは選挙で中断したままになつていて。

研究会に入つてからしばらくして、彼は、このグループが活動資金を得るためにやつている武藏境の学習塾を任せられた。その後、彼はいわば学習塾の塾長を主にしながら、このグループにかかわることになる。それも運動の前面に位置するのではなく、もっぱら運動の客觀化、つまり理論化と、政策のための研究会を担当している。

彼は慶應大学の政治学科を四十八年に卒業、いらい現在まで、一年単位の研究生の身分でいる。マスタークラスに進まなかつた理由は、マスターに進むと専攻を決めなければならないこと（彼は幅広く勉強したかった）、



小山泰夫

それに、その時点ではマスターに進んでも大学に残れるという展望があまりなかつたからである。

それ以後、彼自身の言葉を借りれば、「形式的には大学の研究室で勉強している」と公言しているが、実際は、大学へ出ることの強制がないため、家で勉強している。といいたいところだが、それもいい加減で、まったく怠惰な生活をしていて」。

活動家とのギャップ

彼がこのグループの運動の渦中に入つたのは、今回の選挙が最初であつた。

「まさにこれは運動である。私は政治というものを、もう少し『静的』に考えていたから、実際の運動に直面して、かなり苦しかつた。それに、内部にて、マスコミなどのこのグループの取り上げ方を見ていると、あまりにイメージがふくらみすぎていて、多少ファルスを感じた。政治を変革するとは、所詮こんなものかと思いながらも」

「私は政治学をやつているが、現実の政治、選挙といふものに、ある種の軽蔑感のようなものを抱いている。行政にはかかわりたいが、選挙制度を通じてかかわるのはしんどいし、自分の感覚に合はない」

だから、今回の選挙では、主張の大義名分は認めながらも、自分自身は深みに入らないようにした。というより、入りきれなかつたといった方が正確かもしけない」

これが運動にかかわつた小山の感想である。その中で、彼は活動家とのギャップをしばしば感じている。

仲間うちで活動方針を論ずる時、彼はついつい自分の学問的な視座、つまり、歴史的実在として、現実的にそれを捉えようとする。しかし、運動家は、その活動の反応を得ると、すぐに心をはやらせ、夢をふくらませる。そんなとき、運動家心理とのギャップを見る思いがする。

話の中で、よく「現実を見る」という言葉が飛びかう。彼は、現実はモデルを通してしか把握できないと思つてゐる。だから、彼はいろいろなモデルを当てはめようとする。すると、そんなことをしなくとも、現実はちゃんとあるではないか、と反問が出る。彼は思考法のちがいを痛感する。

それに、この運動をやつてみて、運動の中核部にいる連中が、選挙区内の活動家のことや、他候補に関すること、かれらの人間関係などの知識にくわしいことに驚く。彼の頭の中では、このグループでさえ、いわば市民運動の一つのグループとして登場することが多い。

あれやこれやで、小山は、自分は運動家でないという実感を深めた。そういう彼が、今回の選挙運動だけには、結果的に「引くに引けない」ほど深くかかわつた。

「この選挙に疑問を呈する人々をどう説得するか、などと説教してしまつたので、いまさらあとへ引けなくなつてしまつた。それに、積極的に支持したい政党があるわけでもないし、こんな小さなグループなら、それだけ自分の意志を反映していくだらうと思つたんだ。

結果については、ズバリ三万票、法定得票を越えることが願いであり、それ以上のことは考えられなかつた。したがつて、菅が当選するかとか、グループの主張がどこまで浸透するかとかいった運動全体のことを考える余裕はなかつた。

それよりも、選挙という一つの極限状況の中で、それぞれの人がどんな行動様式をとり、それがどのように結実してゆくのかに興味があった」

"やくざの用心棒"

彼はこのグループにも、運動にも、心情的にペッタリというのではなかつた。グループとのつき合いもほどほどだつた。社会の正義感から運動に同調し、グループにはいつたというようなものではなく、自分自身の喜び、満足が得られればいいという程度だつた。政治をよくするとか、社会をよくするとかということは、とっくに卒業してしまつてゐる。彼の表現によれば、「やくざの用心棒のようなもので、たまたまこの家にわらじを脱いだ客人が、一家の大事に手を貸したようなもの」ということになる。

宮城健一の場合

「私の場合、今回の選挙は、仕事上のプロジェクトが一つ降つてわいたようなものだつた。政治については、新聞や週刊誌の読者としての興味はあつたけれども、もともと自分とは別の世界のことだと思つていたし、今でもそう思つてゐる。

今度の選挙でおどろいたことは、このグループの運動についてのマスコミの取り上げ方だつた。市川選のときも少し手伝い、マスコミの取り上げ方を見てきたが、その時は、市川さんはあまりにも有名だから、こんなものかなと思つていた。

しかし、今回、内部にて見ていると、マスコミの取り上げ方は、誇張という意味ではないのが、ちょっとスマートすぎるという感じを受けた。実態を知つてゐるだけに、多少異和感を生ずることもある。ただ、他の運動のことや政治、政党のこと、私たち部外者はマスコミを通じてしか知りえないのだから、どこでも似たようなものかと思つたりしている」

宮城健一（二十九歳、会社員）は、このような思想をもらす。

彼は、このグループというより菅とは大学入学以来十一年來の知り合いである。一年先輩にあった菅のいたグループに籍を置いたのがはじまりであった。

しかし、彼は他のクラブにも入つており、大学時代はそちらの方を主にしてゐたので、菅のいるサークルには、ときどき参加する程度のものであつた。その後も「より良い住まいを求める市民の会」の研究や、市川選などにも顔は出していたが、積極的に運動に参加するというものではなかつたようである。彼は民間の調査研究機関の研究員であり、彼の仕事の分野が、このグループの運動の対象領域に近いことで、時折、研究会などに出席していた。

新製品の発売みたいなもの

「今回担当したのは、ビラ、公報の作成などだつた。結果については予想のしようがなかつた。従来の選挙結果の予想は、候補者に關係ある組織を、歩どまりを考えながら積み上げてゆく方式。こちらにはそれがないの



宮城健一

だから、まるで新製品の発売みたいなものだつた。

後半になつて、新聞社の調査結果などで、もしかしたら当選するかも知れないという状況になつた時は、それを喜ぶよりも、当選後の態勢をどうするかという方が心配になつてきた。秘書役は誰がする、スタッフはどうするのか。これまで、それぞれがやれる時に参加するという形態でよかつたが、当選すれば職業的にやらなければならない。片岡は会社をやめて専従できるのか、小山はどうだ、私自身はどうかなど、あれこれ考えた。

当選後の姿を書ききれてなかつただけ、次点という結果を知つた時は、内心ほつとした

「外の目」

小山、宮城など、グループ内で政策面を受けもつてゐる連中にとって、このグループは初めから客体のようである。「外の目」でこのグループに参加している。菅は、「彼らはこのグループのフレンドバック機構だ」という。

彼らは、このグループとのかかわり合いに、自らの生きざまを重ねることはしない。グループ内での動き方を見ていると、企業の中で仕事をするように、大学の中で研究をするように、ただこのグループへ仕事をしにきている人、という感じがする。

Plan, Do, See

私たちの方法論

選挙を十全にたたかうためには、さまざまな能力が結集されなければならない。それらの能力は、運動における周囲からの基本的な信頼のもとで発揮される時、当の本人も驚くばかりの発現を見る。特に私たちの運動のように、たて割り組織でない、ボランティアによるいわば柔構造組織においては、一層個人個人の意志と能力、そしてそれを認め信頼する周囲の眼が重要な意味をもつてくる。個々人の意志の背景にどんな理由があるにしろ、自らの意志で参加した世界で自らの能力を發揮すること、そしてそれが周囲の人々や運動の展開にとって不可欠のものとなつていくこと、役割が生まれ、その責任を果たすことによつて、自分自身がグループにとつて一層かけがえのない人間になつていくこと——こうした推移は、参加した個人にとって、私たちのグループのもつ貴重な魅力の一つである。

もちろん、人間は複雑な感情を持った存在だから、すべての構成メンバーが必ずしもこのようすにスムーズに自分と運動体の関係を自覚していくわけではない。時としては、グループの選択した方向と個人の意志とが食い違うことも起こる。こうした時こそ、グループにとつても、個人にと

つても非常に大切な時であり、事態に対する認識をちょっとズラしてしまって、個人が急速に情熱を失ったり、グループが分裂してしまったりする。

私たちのグループのささやかな歴史において、こうした事態が全くなかたわけではない。共通の利害によってつながっているのでもなく、一つの権威に従属しているのでもないということは、こうした事態を引き起こしやすいのかもしれない。だが、この危険性をはらんでいるところに、私たちの志向する「運動体」の本質があるともいえるのだ。

私たちは、時として十時間も二十時間も議論を重ねることもある。自分の意見を人に語ることもなく、人に働きかけることもない状況では、常に自分の考えは正しい。だが、一度人と語り、自分の考えに同意を求め、その人間と共に行動を起こそうとすれば、「自分の考え」は厳しい状況のもとにさらされる。多くの人間のもつ、それぞれの「自分の意見」によってチェックを受けなければならぬからである。

私たちのグループでは、こうしたチェックを不斷に受けながら意志決定がなされていくのである。「Plan, Do, See（計画し、実行し、検証する）」——それが私たちの方法論だ。

小桜一利の場合

小桜一利（三十五歳）は、私たちのグループの中で最もユニークな人間の一人ではないだろうか。現在、彼は私たちの事務所から歩いて五分程のアパートで一人暮らしをし、この二月からタクシーの運転手をしている。朝十時から翌朝六時までの二十時間勤務が週に十二回ある。彼は自称「世を

すねた無宿人」だそうで、これまでに数十の職を替わったという経験の持ち主である。いまのタクシー運転手という仕事は、自分の時間が多くもてるという点で「比較的気に入っている」ということだが、その「自分の時間」を彼は部屋で本を読んだり、哲学的冥想にふけったり、図書館通いをしたりしながら過ごしている。

彼が私たちのグループと出会うのは、昭和五十年、田中栄を立てて戦った武藏野市議選の時だった。以前、彼は「政治革新の主体は社会党だ」と考えていた。しかし、革命主義を信奉しているわけではなく、漸進的革新を志向する彼は、何でもかでも「労働者の味方」という文句で片付けてしまう社会党の体質や、明らかに矛盾した主張が党を二分していること、社会党の政策や活動がどうも「生活実感」に根ざしていないことなどから、社会党に対する期待を失い、むしろ「社会党の存在こそガンなのではないか」と思いはじめていた。

そうした折、小桜は、私たちのグループが全国の市民運動グループに統一地方選への候補者擁立を呼びかけ、集会をやり、連合体をつくろうとしている、という新聞記事に接する。この動きこそが政治を変える本当の力ではないか、と感じた彼は、早速、武藏野市議選を戦っていた私たちのグループに加わった。当時、彼は文京区に住んでいたのだが、連日武藏野まで通い、運動員の一人として活動する。選挙カーの運転をはじめとして、連日のポスター貼りなど多くの仕事をやってのけた。どんなことでも黙々とマイペースでこなしていく小桜は、決して大きな戦力をもっているとはいえないなかで私たちのグループにとって、毎日重要なメンバーとして定



小桜一利

着していった。

社会党に絶望して

小桜が政治に強い関心を抱くようになつたのは、昭和四十四年、大阪でミシンの組立工をやつていた頃である。労働組合が第二組合との対立の中にある、組合を指導していた社会党的やり方に、彼はどうも納得がいかないものがあった。

その年の十二月、衆院選が行なわれた。佐藤政権下、田中角栄幹事長のもとで行なわれたこの選挙に、小桜は許し難い怒りを感じた。年末ぎりぎりの最終土曜日が投票日だった。これは明らかに、労働者、サラリーマンの票を殺そうとする策謀ではないか。事実、沖縄返還直後の総選挙であり、新聞の世論調査などでは有権者の関心は非常に高かつたのだが、史上二番目の低い投票率となつたのだった。小桜は、各政党あてに「選挙をやり直すべきだ」とする抗議文を送った。

昭和四十六年秋、小桜は、市川房枝女史を初め、二院クラブ的な人たちに対して、「現在の社会党はダメだから、あなた方が政党活動を積極的に展開していくべきだ」という趣旨の提案書を送る。また、昭和四十九年には、「選挙法改正に対する要望及び提案」と題する要望書を各政党に送る。この要望書は、衆参両院の「定数是正」問題について述べたもので、小桜の私案では「中選挙区制のまま比例代表制を加味するのが望ましい」としている。すなわち、私たちの一票が、個人への投票であるとともに、政党への投票でもありうるという仕組みをつくるべきだ、とする提案である。

小桜が続けてきたこうした活動は、すべて個人的な活動であった。だが、これらの活動の中には、常に一つの核心が存在することが感じられる。それは、有権者一人ひとりの意志を、政治により十全に反映させようという彼なりの努力である。彼は、私たちのグループに参加することによって、初めて組織的な動きの中に加わり、選挙という活動を通じて、もっと直截に自らの意志を政治状況につなげていこうとしているのだ。

敵対から融合へ

武藏野市議選参加後、選挙で知り合つた田中栄らと、有機農法への関心を強くしていった小桜は「青テント」グループで有機農法農家と消費者をつなぐ活動や勉強会への積極的な参加を続けていく。現在の農業は、人間が食べるものを作っているといふよりは「商品」を市場に送り出しているにすぎないのではないか。人間の食べものを、人間が作り、人間が食べる、という関係を農家と消費者との間につくりあげていかなくてはならない。日本の「土」が弱っていることは、半数以上の農家が感じている、と農林省の調査にもあらわれている。化学肥料から有機肥料に変えていかなくてはいけない。だが、問題は決して簡単ではない。

小桜が有機農法に興味をもつたのは、ここに日本型の合理主義をみたからだという。西欧式の合理主義は、風土としての自然が、放つておくと何も与えてくれないほど乏しく、敵しいものであつたため、これを人間の役に立つように作り換えるべきだとする認識からスタートしている。いわば「敵対型」の合理主義だ。

青木
守

今回の選挙で唯一の反省点は「善戦はしたが、苦戦しなかったことだ」と彼は述べる。そして、「ただ仕事を増やし、いろいろなことをすればアピールもするし、マスコミ受けもするといった考え方では、マスコミに動かされるだけで、どこまでいっても万年次点の域を抜けないだろう。自分たちの立場を明確にし、確實な数・層をキッチリとらえることも必要だ。ただアトランダムに広く大きくでは、子供の『あれが欲しい、これが欲しい』というのと次元が同じだ」と厳しい自己批判をしつつ、今後のグループの活動展開を、青木自身摸索中である。

現在のわが国も、国家体制にしろ外交にしろ、企業經營にしろ、技術革新にしろ、こうした「敵対型合理主義」をベースにしているように思われる。しかし、このような考え方の行きつく先は破滅でしかない、と小桜はいう。こうした敵対型社会（敵対型文明）を融合型社会（融合型文明）に方向転換させることが、私たちのグループの役割だと彼は考えている。

今回の衆院選において、小桜は連日選挙カーの運転にあたった。しかし、選対と有機農法グループとの間に意見の食い違いが起り、選挙を終えた現在も関係が必ずしもスムーズでないのが、小桜の最大の気がかりである。

青木守の場合

青木守（二十五歳）は、私たちのグループの中で「カントク」と呼ばれている。映画、テレビの脚本、評論、助監督をやっており、幡ヶ谷のアパートで一人暮らしの毎日である。どちらかといふと「ノンポリ」であり、政治に格別関心があるわけではなかつたが、四十九年の参院選の際、市川選挙の記録を映画に撮ることからグループに参加、以後ずっと、みんなから「カントク」と呼ばれて親しまれて、グループとのかかわりを続いている。

今回の衆院選は、ロッキード事件で各政党の立場のあいまいさが露呈され、「いちかばちかのバクチを打つてみる価値が十分にある」と運動への参加を決意する。まわりの人たちは「やるだけの価値は十二分にあるが、勝ちは望めないだろう」との意見だったが、前回の参院選、武藏野市議選を経て、「勝ち負け」を強く意識し、今回は、「勝つ選挙」を目標とした。

この選挙における青木の役割は、印刷関係と政見放送のディレクターだった。映画という「ものづくり」に携わっている彼は、グループの決定との間に幾度か意見の食い違いをみた。ポスターの名前の配列や大きさについて、グループ内では「文字を大きく」という主張が強かつたが、彼は「いいものを、目を引くものを作ろう」と主張、ただ単純に「字を大きく」といった発想を承認できなかつた。彼は「いいポスターであれば、絶対に立ち止まってくれるし、また、印象に残る」という確信があつた。ハガキやビラの原稿にしても、「文章が全然ダメ、ただ自分の思いをストレートに難しい言葉を使って書いているだけでは、大衆にアピールしない」と厳しく批判した。

「ノラリ、クラリと冗談で生きている」と自分を語る青木は、一方で「これは男の仕事として生命を張れるものか、また、はつていいものか、ダメなのか」と時として自問自答する。また、「何かする時、たえずそれなりの見返りを要求する」という。それは、相手の価値観と自分の価値観のぶつかり合いで、そこに人間同士のつき合いを求めている、ということだ。

第三章 参加民主主義をめざして

第一部 政治を市民の手に

一、市民の国政からの疎外

政治状況の流動化

ロッキード事件発覚後、五十一年暮の総選挙をへて、政治状況は急激に流動化してきた。高度成長の終焉を告げる四十八年秋の石油ショック以来、国民の生活意識や企業の行動パターンなど、社会的には大きな変化が進行する中で、政党を中心とする政界だけが、今日まで変化しなかつたことの方がかえつて不自然であるといえる。それだけ政治家の感覚が市民感覚から遊離し、政界が閉鎖社会になつてゐる証拠であろう。

この硬直化した政党社会も、四十九年参院選での革新伯仲、五十年の田中金脈批判、五十一年のロッキード事件発覚と今回衆院選での与野党伯仲という現実の前に、ようやくその古い枠組を根底からゆさぶられはじめた。こうした流動化の背景に、六〇年代以降、各地で起こつた多様な市民運動、数多くの革新自治体の成立、そして膨大な無党派層の存在がある以上、それは今まで繰り返されてきたような、単なる政党間の離合集散にどまらず、自發的な市民による、草の根的政治変革の可能性を秘めている。

政党の市民感覚からの遊離

では、無党派層の拡大に象徴される、政党に対する信頼低下の原因はどこにあるのだろうか。

その一つは、従来の政党が上意下達という発想しか持ち得ず、多様な市民層の自発的参加を受け入れる組織体質を持つていなかつたこと、そしてもう一つは、都市化の動きに適確に対応する政策体系を打ち出せないでいることである。

すなわち、戦後の十数年間は、"復興・成長"をかかる保守政党に対し、革新政党は"平和・民主主義・憲法擁護"をかけ、それなりの成果を挙げてきた。また、この時期には、革新政党は戦前からの大衆運動家を数多く擁し、六〇年安保に見られるように、大衆運動として市民の自発参加の場を持つていた。

それが左右社会党の統一、保守合同をへて高度成長時代に入る中で、保守政党も革新政党も次第に体質を変え始めた。つまり、保守政党は長期単独政権の中で、官僚主導による産業育成政策推進を前提に大企業からの献金¹¹構造汚職に全面的に依存し、利権獲得と地元利益還元に専念するブローカー的金権体質を強めた。また革新政党の側も、官公庁、大企業の労組に資金も人も依存する労組政党という色あいをつよめ、それが硬直化につながつていった。

こうして、政党が選挙での投票という点でしか市民と接点を持たず、市民を参加主体としてでなく獲得すべき票としてしか見なくなるにつれて、市民の政党不信、政治不信が深まり、政党は健全

な活力と市民感覚を失つていった。

政策面においても、保守党政府は、道路、港湾といった産業基盤の整備に力を注ぐ反面、工業化に伴つて当然予想された住宅などの生活関連社会資本の整備に関しては、ほとんど無策のまま放置してきた。これに対し、大企業労組を背景とする革新政党は、賃上げ・合理化反対といった生産点での問題には取り組んできたものの、公害、住宅難などの都市問題に対する取り組みは決定的に遅れている。このような革新政党の都市問題に対する消極性は、大企業労働者が社宅や健康保険など企業内福祉の面で比較的めぐまれてのこと、公害発生に直接関与していることなどに大きく影響を及ぼしている。

参加を要求する市民層の増大

六〇年代にはじまる高度成長は、環境破壊などの都市問題を発生させる一方では、生活水準の上昇と平準化を促し、多くの人々が余暇と教養を持つことを可能にした。この過程で、職業や職場での利害関係から独立した自由な意志を持つ、拡大された市民層が発生してきた。

こうした市民層は、産業公害、有害食品の氾濫、住宅難などの都市問題に対して、自らの主張をかかげて多様な市民運動を開拓していった。

また、テーマごとの市民運動に加えて、自治体レベルの政治の分野では、市民委員会、市民と首長の政策協定など、さまざまな形での市民参加が試みられ、実現しつつある。

このように市民の参加要求は急速に高まりつつあり、ある調査によれば、七〇%の人々が、身の因はここにある。

回りで問題が生じた場合、市民運動へ参加する意向を示している。

しかし、こうした市民の参加エネルギーは、国政分野においては、旧体制の政党政治に妨げられて十分機能していない。その最大の理由は政府への批判を結集すべき野党、革新政党が、労組、宗教団体といった組織の上に構成されているか、またはイデオロギー過剰のために、多様な考え方を持つ市民の個人的参加を不可能にしているからである。

参加の余地のない政党に対して市民の不信が高まるのは当然であり、意識的無党派層の増大の原因はここにある。

二、政治への市民参加とは

私たちの考える「市民」

市民参加の政治について語るにあたって、「市民」とは何かについて、私たちの考えを述べておきたい。

歴史的にみて、「市民」が重要な意味を持ち始めたのは、フランス革命に代表される市民革命の時代からである。市民革命の主体であった「市民」は、当時の社会階層からいえば、都市の商工業者、産業資本家から構成されていた。しかし、「市民」という言葉は、こうした社会階層を指す以上に、市民革命がめざした「自由・平等」の理念と関連して、『封建的身分拘束から解放された自由意志を持つ主体』という人間類型として、より強く観念されてきた。

しかし、その後の資本主義の発展は、封建社会の身分的不平等の代りに、労働者の窮乏に代表される経済的不平等をもたらし、生産点における立場、すなわち「労働者・資本家」という階級概念が重視されるようになった。

戦後日本の多くの革新的政治運動も、労働運動を中心に、労働者対資本家という生産点での立場の対立を軸に展開されてきた。しかし、六〇年代以降、職場の人間関係を離れた個人の自発的参加による「市民運動」が全国でわき起るに伴って、「市民」という言葉が再び意味を持ち始めた。

では、この再生された「市民」とは、先に述べた旧「市民」概念とどう違うのか、また「労働者」「農民」といった区分とどういう関係にあるのか。

これを考えるにあたって、まず、「市民」が再生してきた社会的状況、すなわち、市民運動発生の背景をみておく必要があろう。

六〇年代は戦後の復興を終えて高度成長期に入った時期で、生活水準の向上により、相当の幅の社会階層の人が余暇と教養を持つ社会になってきた。他方、高度成長は産業公害、住宅難などの都市問題を激発させたが、労働組合を背景とした既成の革新勢力は、こうした都市問題に積極的に取り組むことがなく、都市住民の生活領域での不満が高まつた。このように、余暇と教養を持つ人々の拡大と都市問題の激発とが、市民運動発生の要因である。

こうした社会状況の中で市民運動への参加の意志をもつ「市民」を定義すれば、「職業からある程度独立し、個人としての自由な発想ができる人」と表現することができよう。

つまり、工場労働、事務、農業などに従事する人が、その職業、職場での利害にのみ拘束された

価値基準を持つだけでなく、それぞれが労働者や農民であると同時に地域の住民として、国民の人として、また一人の人間として、職業から独立した自由な発想を持つこと、これが今日の人間類型としての「市民」のもつ重要な側面ではあるまいか。

このような「市民」は、自由の確立をめざした歴史的「市民」像の延長上にある。また、ここにいう「市民」は職業・職種・階層的な区分ではなく、人間類型、つまり自己を多面的に捉えようとする発想の仕方による区分である。したがって労働者や農民との関係でいえば、市民的発想形態をもつ労働者や市民的発想の農民が増大しつつあるといえるだろう。

政治参加のもつ意味

それでは、市民の政治参加にはどういう意味があるのだろうか。

明治以来の官治型政治においては、お上が方針を決定し、国民はそれに従うことが基本で、決定への参加はできるだけ制限されてきた。また旧来の革新政治理論では、前衛政党がイデオロギー的に正しい方針をもつて大衆を指導する、という考え方が運動の基本となっている。そのため、「決定論」「方針の内容」は重視されるが、「参加論」「決定へのかわり方」は、イデオロギー的な目的達成のための戦略論として、やや軽視されてきた。

このことが、個人の自発性に基づかない労組ぐるみ、宗教ぐるみの参加でも、主張の内容が「革新的」であればよしとする、既成革新政党の体質的自己矛盾につながっている。

私たちは、「参加論」は少なくとも「決定論」と同等に重視するだけの価値があると考えている。

つまり、私たちが神様や聖人を支配者にいただくのでない以上、「正しさ」の絶対的基準は存在せず、決定プロセスの適正さ、すなわち「参加」の方を重視せざるをえないと考えるからである。

こうした“参加論”に対して、決定内容の適切さが保証されず、衆愚政治をまねくという批判がある。

たしかに参加の公平さは、それだけでは決定の適切さを保証しない。そこにはもう一つ、参加の“質”的問題が横たわっている。

ロツキード事件は、自民党長期単独政権という参加の不十分性とともに、野党のだらしなさという参加の“質”的問題をも同時に露呈した。

政党は本来、実効ある政策の選択を競い合うものでなくてはならない。たとえば農薬の使用についていえば、使用を続けた場合の生体への長期的悪影響と、使用を中止した場合の食糧減産とを対比した上で、自らの党の政策を提示し、支持を求めるという態度である。

これまでの野党には、残念ながらこうした政策立案能力が不足しており、長らく政府・自民党が提示した政策に反対するだけの力しか持てないでいる。

都市問題における個々のテーマや身近な自治体問題については、それに取り組んでいる市民運動グループや専門家を含めた協力関係の中で、市民が政策を立案することも相当範囲まで可能になっている。

しかし、国政の分野では、全体にわたって責任を持ちうるだけの政策立案能力を備えた複数の政

党的存在が不可欠となる。提示された政策に対し、他政党の批判や専門家の論評を参考にしながらその是否を判断するだけの“質”は、多くの市民がすでに身につけていると思う。

市民の政治参加は非効率か

参加政治に対する批判のもう一つに、効率の低下が挙げられる。特に長年にわたる官僚主導型の中央集権政治の中では、官僚は、すべての情報から最も適切に判断しうるのは自分たちであるという自負心を持ち、部分的なエゴを振りかざす市民運動は、地元利益を振りかざす政治家と同様に適切な政策体系をくずすものであり、非専門家である市民の政治参加は、効率の低下をまねくとする。果たしてそうであろうか。この主張、つまり効率の概念 자체が、合意された目標の存在を前提としている。すなわち、官僚の職業的優秀性を認めるとしても、それはあらかじめ設定された目標を達成するためのプロセスを提示する能力の優秀性であり、目標や価値基準 자체を設定する能力ではない。

明治以来の、欧米先進国に追いつき追いかせという暗黙の国民的合意目標が、一方でほぼ達成され、また他方では、それに伴う環境破壊、資源浪費などによって喪失された現在、目標 자체を市民参加の政治の中から模索することが重要となっている。

さらにまた、これまでの中央官僚主導型政治においても、公害対策・住宅政策の立ち遅れなど、多くの誤りが犯されてきただけでなく、情報の独占・非公開による住民へのごまかしの中で、上から一方的に決定するという官治型政治が各方面でゆきづまっているのは明らかである。成田空港建

設や原子力船「むつ」号の現状は、かつてゴミ戦争と騒がれた杉並ゴミ焼却場が、市民の自治トレーニングに大きな役割を果たした上で平穏に着工されたのとまさに対照的である。

すなわち、「参加」の本質的意味からして、多少の効率低下があっても参加が必要であることに加えて、むしろ参加手続きの欠落が別な面で効率の低下を生みだすということである。

世界に類を見ない高度成長をとげ、大衆消費社会も成熟段階に入ったといわれる現在、最も問われていることは、日本の、いな社会の進むべき方向は何かということである。それはもはや上から与えられる性質のものでなく、私たちが参加を通じて見つけ出さなければならない時にきている。

多様性の容認

市民は、「個の確立」といった性格から、また労働者であると同時に地域住民でもあるといった多面性から、ほんらい多様な考え方を持つている。市民政治は、こうした多様な思想・意見の存在を前提としており、この多様な市民と政治の間にいかなるフィードバックの仕かけを作るかということが「参加民主主義」の基本的な命題である。

市民政治が官僚的決定の押しつけでも、イデオロギー的「正しさ」の押しつけでもなく、選択可能な複数の政策提示による参加の拡大をめざすものである以上、「多様性の容認」は絶対的な条件となる。提示された政策は、多様な意見・批判・対案によって検証されてゆくのである。

三、市民運動と政治

市民運動における選挙の位置

これまで、多くの市民運動にとって、選挙に積極的に取り組むことはタブーであった。それは、一つには、個別のテーマを持つ市民運動にとって、そのテーマの実現のために、選挙を通して政党間の争いに巻き込まれたくないという判断があるからである。もう一つには、旧べ平連に代表される否定論理型の反体制運動のメンバーには、権力志向につながる選挙を心情的にきらう体質があるからである。

しかし、近年、市民運動の選挙への取り組みが次第に拡大している。こうした市民運動による選挙への取り組みには、二つの型がある。

その一つは、当落を全く無視して、選挙運動の場を市民運動のテーマを主張する場としてとらえる型の運動である。この例としては、五〇年の大阪府知事選で、ポスターに奇形魚のX線写真を使って琵琶湖の水質汚染を訴えた市民運動による選挙が挙げられる。こうした型の選挙は、市民運動の直接的延長線上にある運動の一形態としてとらえることができる。

これに対し、当選を通じて政治を変革してゆこうという市民運動による選挙の取り組みがある。こうした取り組みでは、「自己」のテーマの主張の場としての選挙と異なり、個々の市民運動の直接的延長線上にその選挙をとらえることは困難である。つまり「議席」獲得を前提とする以上、少

なくともある程度は全般にわたる考え方を問われるため、市民運動としてのテーマの主張のみでは済まされなくなるからである。

しかし、選挙が武力的権力闘争を平和的、民主的権力闘争とするための制度であり、元来権力闘争の場であるからには、後者のような参加型の選挙への取り組みが本来の姿であろう。

市民運動と政治運動

市民運動に対しても、保守政党からだけではなく、理論政党を自認する革新政党からも根強い批判がある。つまり、市民運動の主張はエゴで、政策としての整合性・理論としての一貫性に欠け、長期的に責任を負う姿勢がないというのが主な批判である。

たしかにこうした指摘それ自体は、市民運動の性格を表わす意味で、ある程度当たっている。しかし、政治というものが、本来あらかじめ決まった“理論的目標”を達成するための手段ではなく、エゴ的主張をどう調整するかという点にその機能を持つことを考えれば、こうした理由による市民運動批判は当たらない。逆に政党のほうこそ、市民運動によつて提起された問題を政策として解決し得ない自らの無力さを反省すべきである。

ここで市民運動と政治運動の関係について、さらに考えてみたい。

市民運動は、“自分と他人との関係”を問題とする運動、つまり個々のテーマについて自己の利害や政治的心情を動機とし、それを主張する運動であるといえる。それゆえ市民運動においては、自己の利益の主張は、それ自体否定されるべきものではなく、また政治的心情の純粹性において、

その運動の正当性を主張しうる。

これに対し、政治運動においては、“自分と他との関係”として以上に、“他と他との関係”としての観点が基本となるべきであろう。

すなわち、“政治”というものは、自己の利益を求めるものでも、また自己の信念による「正義」の実現を図るものでもなく、“他と他との関係の調整”という役割を持つ権力的行為だと考える。いいかえれば、政治は非常にせつかいな権力的行為であるから、政治による“幸福”的押しつけは、それを“幸福”と感じない人にとって非常な苦痛となるであろう。こうした観点から、私たちが“政治”的目的は、“権力的に解消しうる不幸を最小化する”ことに限定されるべきで、不幸の最小化のため短期長期にわたる複雑な利害関係を調整することがその役目であると考える。

このような政治の意味からしても、政治権力を自己の個別的利益のために行使することが許されないことはもちろん、自己にとつての動機の純粹さは、その政治行動を正当化する理由とはならない。政治行動は、他と他との調整の適正さという観点から、常に社会的検証を受けなくてはならない。このことは、市民運動から政治運動への展開の大きな可能性を示唆している。

四、社会党に代わる市民型政党を

混迷の時

今日の政治状況は、昭和三十年の左右社会党の統一、保守合同以来初めての本格的流動化状況にあるといえる。

昭和五十一年暮の総選挙における新自由クラブの躍進は、その後、自民党の人材供給源であった官僚、地方議員、保守政治家志望の若者、二代目などのなだれ的自民離れを引き起こしつつある。

こうした新自由クラブを中心に集まりつつある勢力により保守が再生されてゆくのか、それとも第二段、三段の自民党の分裂が進行するのか、何が起きてても不思議でないという意味で予測がつかない。

しかし、どちらにしろ、長期政権の中で腐敗し硬直化した保守が、ある種の保守バネによって再生への一步を踏み出したことだけは確かであろう。

これに対して革新の側では、総体として自民党の低落を自らの躍進に結びつけえないところに、革新政党に対する国民の根深い不信を感じることができる。

こうした革新政党の不振は、どの党の連合構想も、連合する上での共通の問題意識を持ち得ず、それぞれの党の特性で得ていて支持を前提に、「足し算」の発想でしか連合を考えられないという不毛性にも表われている。

民社・公明・共産の限界性

市民の共感を得られない政党がいくつ連合したところで、それによって新たな支持が集まるものではなく、逆に各党の特性によつて得ていた支持のかなりの部分を失うであろう。こうした市民の共感を得ることのできない革新政党の限界性を、個々の党についてみてゆきたい。

民社・公明・共産の限界性

現在の民社党の右傾化ぶりは、自民党以上といえる。"反共"自体が自己目的化し、反共を主張する勢力とならどことでも結びつくという傾向が最近とみに顕著に感じられる。

とくに、一部同盟系労組に見られる"企業・労組ぐるみ選挙"ほど、市民の自発性や多様性を無視し、圧迫する運動はない。

こうした現在の民社党に"福祉国家"を唱え、それによつて広範な支持を集めていた結党当時のイメージはまったく残っていない。

公明党はどうであろうか。

最近の公明党の政策提案などに見られる積極性や、創価学会の外からも人材を集めようとする柔軟性は評価してもよい。

しかし、五十一年暮の総選挙の分析から見ても、公明党の得票数の上限は学会員数にほぼ一致しており、"政教分離"が客観的には不可能に近い体质を持っていることがわかる。こうした体质の公明党が、宗教的にも多様な市民層の多くの共感を得ることはむづかしい。

共産党はどうであろう。

私たちは、共産党のかつての躍進とその限界性とは、同じ原因によると考えている。すなわち、それは集権化された党组织のあり方である。

こうした中央集権的な制度は、党中央の指示ですべての党组织が効率的に動くことから、財界・自民党・政府の強大な力に対し、社会党以上に力強い政党だという期待を集めた。

しかし、このような中央の指示と下部の“学習”、“実行”という制度は、大半のメンバーが、多様な意見を前提に試行錯誤を繰り返しながら方針を決め運動する、という経験を持たないことを意味する。そのため、運動 자체が官僚化し、市民の多様性だけでなく自発性をも満足させられなくなつたのである。

社会党の硬直化体质

社会党が、“野党第一党”“野党のかなめ”といった、それ自体ではまったく無内容な自己主張以外に主体的な行動をとらなくなつて久しい。

かつて社会党は、戦前からの大衆活動家や文化人などの積極的参加を得て“平和＝憲法擁護”的主張のもとに活発な活動を開いていた。その最高潮が広範な国民的参加により盛り上がった六〇年安保闘争だといえる。しかし、この六〇年安保を境に、社会党の活力は衰退の一途をたどってきた。このような社会党の衰退の原因は何であろうか。その最大の原因是六〇年代の高度経済成長の中で、社会党としての“作り上げるべき社会像”を提示できなかつたことにある。つまり、社会党はこれまで“体制変革の具体的政策提案”を行ないえず、自民党に反対することをもつての“反体制”に終始してきたのである。

このような社会党の“否定論理”志向の体质は、六〇年安保直後に、江田氏を中心に提起された“構造改革論”が“体制内的改良主義”として排撃されたことにもよく現われている。また現在、“マルクス主義での純化”を唱える社会主義協会が“左翼ほど純粹である”とする左翼的心情ともあいまつて、若い活動家を結集し社会党の主導権を握りつつあるのも、こうした“否定論理”志向の一面であろう。

しかし、現実の社会で発生している問題点をどう変革するかというところから発想せず、抽象的理論を裏付けとする“資本主義体制打倒”的運動の中からは何も生まれてこないのであるまい。そしてまた社会主義協会のこうした志向性は、そこに求められる余りの“政治（革命）至上主義”的傾向によって、現在を前提として問題をとらえようとする市民の共感を生むとは思われない。

社会党衰退のもう一つの原因是、社会党が労働運動に影響力を行使するという構図が逆転し、労働組合による社会党の組織的丸がかえに変質したことにある。

このような社会党の労組依存は、二重の意味で社会党の硬直化＝体质的保守化を進行させた。一つには人材的に労組以外からの個人参加を得られなくなったこと、もう一つには総評の支持さえ統けば政治勢力としてほぼ現状維持が図れるということに安住し、社会的要求や批判に答えようとする意欲を失い、自己保持的体质が強まつたことである。

選挙が労組単位で準備され、資金も人手も労組に依存する形態をとる限り、社会党議員の大半を

労組幹部出身者が占めるのは当然であろう。こうした労組選挙で当選した議員は、選挙母体の組合の世話をさへやっておけば、他の公約はどうでも次回の選挙も安泰という意識を持ち、ここから一般市民から遊離し、政策立案という意欲も持たない議員本質が生まれてくるのである。

こうした社会党との関係を労働組合の側からみれば、労組で決めた組織内候補者を一定の国民的信頼を持つている社会党の候補者とできるところに、"社会党イメージ"の利用価値があるのである。すなわち労組の利益主張を議員を通して行なうと共に、官僚組織の天下りと同様に労組も議員への"天上り"により、人事の交替をスムーズに進めているという側面があるのである。

社会党はこうした労働組合の総評との特殊な依存関係を脱却し、労組外からの参加の道を積極的に作り出せない限り、幅広い市民の参加と支持を得ることはできない。

社会党解体の中から新しい市民型政党を

フランスでは、かつて低迷していた急進社会党が一九六八年の五月革命以後、市民運動活動家の復帰・入党により活性を取り戻した。そして、大統領選ではミッテランを候補に社共共闘でジスカル・デスタンと大接戦を演じ、議会においても最近ますます勢力を増している。

わが国においても、かつての活力を喪失し低迷する社会党に代わって、市民型の政党が生まれる可能性はないであろうか。

今日の本格的な政治の流動化の中では必要なのは、保革連合や社・公・民・社・共といった単なる政党間の連合でも、また社会党の分裂でもない。必要なのは、社会党の解体とその中からの新しい

市民型政党の形成である。

若年層を中心とした無党派層と中年以上に厚い社会党支持者層は、年令構成は異なるが、政治意識は近いとみられる。それは一言でいえば、リベラルな革新である。こうしたリベラル革新層が、「足し算」的連合に同調して、積極的支持に転化する可能性は全くない。それが可能なのは、唯一社会党の解体とその中から"市民型政党"が形成され生まれた時しかないのである。

では、期待される"市民型政党"とはどんな政党であろうか。

それは後援会や労組という、利益団体的支持母体を背景に当選した議員の集団として構成される"議員政党"とも、イデオロギー的統一のもとに集権的に構成された"組織政党"とも異なる。簡単にいえば"分権・参加・シビルミニマム"といった大枠での方向について一致できる市民の連合により構成される政党である。

本来"市民"は自主性を持った形で連合(associate)はしても、ピラミッド状に組織(organize)されることはきらうものである。

また、この市民型政党は、政策スタッフと共に政策の検討立案を行なう議員集団としての院内政党と、地域住民の個人参加による各選挙区ごとの地域組織、各種市民運動、労働運動などの連合からなる院外政党による二重構造として構成されるのが好ましい。

院内政党は政策への取り組みと国会活動に重点を置き、シャドー・キャビネット(影の内閣)を構成する。そして常に国政全般にわたる争点を提示することにより、政策担当能力を国民の前に問うことが可能となる。また、院外政党を構成する各地域組織、市民運動、労働運動は、党中央の指

示によつて動くのではなく、各グループの自主的判断で活動し、国政レベルでの政策立案を必要とする事項については、院内政党にそれを要求するという形をとる。

選挙においては各地域組織の主導のもとに、それぞれの労働運動や市民運動の利益代表としてでなく、政策立案能力や調整能力などの評価を目的とした予備選挙によつて候補を選ぶ。選挙運動も院外政党の各地域組織が主体となつて行なう、という形が考えられる。

このように市民型政党を院内党と院外党の二重構造とすることにより、日常活動の大半が選挙準備であるという自民党議員の状態や、政治家としての適性でなく労組という選挙母体の都合で候補者の決まる社会党の状態を避けることができる。と同時に、地域組織を党中央の手足、兵隊として扱う組織政党の集権的体質におち入ることがなくなる。

すなわち、地域組織は一個の独立した地域政党として選挙運動をになう。そして候補者選定の主導権を持ち、その過程に地域住民の自発的参加が可能となる。

また院内政党は選挙に関する負担を軽減される代わりに、地域組織による検証を受けることになる。

こうした市民型政党は誰によつてになわれるのか。

それはサラリーマンや主婦として普通の生活をしていいる多数の「市民」と、政策の検討・立案などを受け持つスタッフ・議員など比較的少数の専従の人々によつて構成される。

これまで、組織政党における「党員」というと、自分の生活を犠牲にしても「党」のために活動する人といったイメージが強い。市民型政党はこのように党のために全生活をかけるといった形で

はなく、市民運動への参加と同じように、生活の中で自分ができる時できる事をする、という形での参加によつてになわれるものでなくてはならない。

つまり、多数の市民が、余暇の一部をさいて候補者選びに参加し、また身近な人への投票依頼といふ形で選挙に参加することにより、選挙を真に市民による選択の場とすることができるのである。

市民型政党は、こうした市民選挙を実行できる地域的グループの連合として形作られるのである。そしてまた、政策立案にたずさわるスタッフや議員の候補者も官僚・労組幹部・議員二世など限られた属性を持つ人からでなく市民運動経験者、自治体職員、サラリーマン、主婦など広い範囲の市民の中から市民的バランス感覚と責任感を備え、政策意欲を持つ人々によつて構成されるのである。

第二部 市民運動の論理からの提言

232

一、社会参加を拡げる制度について

分権制

参加政治の対極には独裁政治がある。強大な権力が一人の人間または単一の政党に集中する独裁政治のもとでは、参加の行動を構成する批判的言論や政権交替を要求する集会などそれ自体が制限される。

参加政治の前提として、言論・集会・結社などの自由が保障されねばならないことはいうまでもない。

しかし、こうした自由が保証されているだけでは不十分である。実効的な参加を可能とするためには、権力を分散して全体のシステムをフィードバック・ループの短い数多くのサブシステムから構成すること、つまり分権の仕組みを作ることが必要となる。

結果を得るのに長く複雑な過程を必要とする制度では、市民の参加は実質上制限される。地元選出の代議士に地元利益の還元を期待するという構造も、中央直結を訴える保守自治体の構造も、橋

一つ、学校一つ作るにしろ自治体内部だけでの決定では実行できず、全て中央での決定を必要とするという現在の中央集権制度に根本的原因がある。

また決定の仕組みが不明確な制度では、市民の参加意欲を減退させるだけでなく、ロッキード事件に見られるようなフィクサー的人物の存在を許すことになる。

そこで、政治機構の分権化を進めるため、地方自治の拡充と行政の公開すなわちオープン・ガバメントが必要となる。

さらにまた経済の集中管理は、権力の集中と官僚的硬直化の弊害を避け得ないことが、ソ連などの例からはつきりしている。そこで、もう一つには、経済機構の分権的管理システムの創造が必要とされる。

地方自治の拡充

わが国では明治以来の中央集権官治型制度の中で、地方自治体は国の下部機関として位置づけられてきた。

戦後、新憲法は国会・内閣・裁判所と並んで、地方自治体を憲法に基づく機関として位置づけ、知事・市町村長の公選制を規定した。またシャウプ勧告により地方財源の自立が計られた。

しかし、長年の官治型政治の伝統の中で、地域住民による自治、すなわち中央政府と並存する地方政府としての地方自治体という考えが十分根づいていなかつたため、地方自治体は次第に戦前と同様、国家の下請機関となってきた。

たとえば財源の面においては、自治体の財源の約六割を占める国からの交付金、補助金を操作することにより国は実質上、自治体の全ての支出を制御することができる仕組みになっている。また国は法律解釈権を独占し、それを通達などによつて自治体に押し付けることにより、住民が“自治的”に決定できる条例などの内容を制限してきた。

しかし、近年の市民運動や革新自治体の成立を背景に、国の基準より厳しい公害基準条例の各自治体での制定や、超過負担に関する国を相手どつての自治体による訴え（摂津訴訟）など、自治体の国からの自立傾向が強まっている。

こうした現実を踏まえて、自治体に対する理論的とらえ直しも進んでいる。すなわち國も自治体も、國民主權により國民一人ひとりが原初的に有する立法権、行政権を信託することによつて成立している機関であり、兩者は機能・役割を分担するが、支配・被支配の関係にはないとするとらえ方である。

自治体の自治権を拡充して市民参加をいっそ有効なものとするためには、租税の約七〇%を占める國稅の財源のいくつかを地方に移管し、地方財政を自立化させることが急務である。こうして國からのひもつき補助を廢止し、國からの財政援助は自治体相互間のアンバランス是正に限るべきである。

こうした地方自治の拡充は、地域の実情と要求に即した社会資本、社会的サービスの充実のために必要であり、同時に地元利益還元型の政治体質を払拭することになろう。

これまで中央政府の自治体支配を許してきた原因の一つに「中央官僚信仰」がある。確かに理論

研修と権限を与えられての実践トレーニングを繰り返す中央官僚の職業的優秀性は否定できない。しかし、地方自治体においても財源を含む大幅な権限移譲が行なわれば、自治体職員の仕事はいつそう魅力を増し、中央官僚に劣らない優秀なスタッフが育つ条件が満たされることになる。

こうしたスタッフの協力のもと市民自治が実現してゆけば、地方都市は経済的にも文化的にも魅力的な存在となり、巨大都市から的人口分散も自然に進行するはずである。

行政の公開

行政機関は専門家集団（官僚）を定常的に擁し、あらゆる情報を集中させるシステムを持つことにより強大な権限を有しており、放置すれば立法や司法を超越する過大な権力となりがちである。

またロッキード事件でも見られたように、政策決定過程のブラックボックス化は権力の私物化につながる。

こうした行政権力の過剰膨張や私物化をチェックするため、行政決定過程や各種の政策情報を公開する仕組みが必要である。

このため現行の制度においても、国会には国政調査権が認められており、それを補強する意味で証人喚問も認められている。

しかし、田中金脈やロッキード事件で見られるように、三権分立を根拠に行政の側は自ら守秘すべきと判断した事項については国会の調査を拒否するため、国政調査権は実質上形骸化している。果たして憲法に定められた国会の国政調査権を、行政は自らの裁量による守秘義務を理由に拒否で

きるのであらうか。

国会は機能分担として立法機関であるだけではなく、国民の代表機関として国権の最高機関であり、守秘すべき範囲の判断を含め行政に対する調査権は強力に保証されていると理解すべきである。また、こうした国政調査権を有効に作用させるためには、スタッフの拡充など国会の調査機能の充実が必要であり、それなくしては複雑化した行政をチェックすることは困難である。

こうした国政調査権の活性化に加えて、現行の制度の中にも、活用の仕方によつては相当の機能を果たすことのできる制度がある。すなわち先の選挙でも活用することを公約に挙げた“質問趣意書”の制度である。

この制度によれば国会議員から提出された文書による質問に対し、政府は一週間以内に文書で返事をすることが義務付けられている。陳情や請願が一方的申し入れに終わりがちなのに対し、市民運動などからの積極的政策提案をこの制度を通して政府に行なえば、行政への直接的提言が可能となるだけでなく、それに対する政府の見解を引き出すことができる。

このような制度を通して、政策決定過程の公開を図るのに加えて、たとえば国有地の存在場所の公表や外交文書の一定期間後の公開など、各種の政策情報の公開をルール化することにより、野党をはじめ広い範囲での政策立案への参加の可能性を高めることが必要である。

これらの制度を十分活用するためには、議員一人ひとりがしっかりと政策スタッフを持ち、政策立案のトレーニングをつむことが必要となる。このことは、行政の公開に役立つだけでなく、政府提案の法案を審議するだけの現在の国会を、議員提案（市民提案）による真の立法機関に作り直

してゆくことにもなる。

経済の分権化

経済制度は、政治制度と並んで社会を性格づける、きわめて基本的な構造である。

通常、経済制度は、“資本主義経済”と“社会主義経済”に分類される。しかし、巨大な私企業によって構成される資本主義社会と、国営企業によって構成される社会主義社会は、経済優位の政治支配と政治優位の経済支配という差はあっても、権力の集中という点では明らかに共通している。すなわち、日本やアメリカといった資本主義国においては、私企業は巨大化や資本と経営の分離などにより、資本家の利潤獲得手段としての性格を薄め、企業組織それ自体の安定的維持・拡大を自己目的化する傾向が強くなっている。この安定的維持拡大のために企業は政治支配・市場支配を強めており、放置すれば“企業による、企業のための政治経済”となりかねない。

こうした観点から、私は、日本における経済制度改革の方向は、企業権力抑制と経済の分権的管理システムの創造であると考える。

こうした観点から、私は、日本における経済制度改革の方向は、企業権力抑制と経済の分権的管理システムの創造であると考える。

企業権力の抑制

では、企業権力抑制のための政策とは何か。

その第一は、企業による「政治の買い占め」を禁ずることである。

企業にとって政治権力はきわめて魅力的な存在である。巨額の財政支出、法人税の特別措置、各種許認可事項など、政策決定の内容は企業の経営に大きな影響を及ぼす。企業目的の達成という点から見れば、こうした政策決定に企業の意思を反映させようと経営者が努力するのは当然とさえいえる。

しかし、もし企業のこのような行動を野放しに許したらどうなるか。その結果がロッキード事件で一部明らかになった「構造汚職」である。大企業はその経済力にものをいわせて企業目的に沿った政策決定を促すため政治権力を日常的に買い占めてきた。企業の政治献金はまさに自民党および一部野党を介しての政治権力買い占めの対価なのである。

企業の政治献金を法人の営業活動の自由の観点から肯定する議論がある。しかし、これは法人の営業活動と政治活動を混同した議論であり、個人の政治意思を代表しない企業の政治活動が民主主義の原則に反していることは明らかである。

民主主義の原則は、国民一人ひとりの政治的有意思に基づいて政治的選択を行なうことにある。だから選挙権、被選挙権といった狭義の「参政権」が個人（自然人）に限定されることはもちろん、政治的選択に影響するあらゆる政治活動（政治献金を含む）を行ないうる広義の「参政権」も、本来個人に還元され得るものではなくてはならない。

団体であっても、個人の政治意思を集団化し代表する機能が保障されている団体（たとえば、任意参加の政治団体）は、その集団化された政治意思の範囲で、個人に代わって政治活動を行なうことは容認されるべきである。

しかし、営利を目的とする企業に個人の政治的有意思を代表させる機能は予定されておらず、まったく保障されていない。現在、企業の政治献金は企業経営者によって決定され、企業の必要経費（無税扱い）として支払われている。本来、企業は株主によって所有され、株主が経営者に経営を委託するという制度である。しかし、日本の大半の大企業には所有者の個人株主は存在せず、企業間での株の持ち合い比率が高く、加えて小量の株を所有する大衆株主が存在する形になっている。そのため企業経営者は、大株主たる他の企業の経営者の了解さえあれば、多数の小株主の意思は無視することができる。

経営陣の人事も実質上経営者自身が決定し、株主総会では形式的に決議されるだけである。この形式を踏むための株主総会さえも総会屋に取り仕切られ、一般株主は発言すらできないというのが現実である。

このように株主による経営者の選任および経営権の委託は形式的であり、しかも限定された経営目的について委託するだけで、株主個人の政治意思を経営者に代表させるものでないことは明らかである。また従業員との関係においても、経営者は経営権の一環としての人事権、命令権を持つが、決して従業員の政治意思を代表するものではない。

このように、企業経営者は個々の株主や従業員の政治意思を代表する機能はまったく備えておらず、経営者によって決定される企業の政治献金は、企業目的のみを体现する政治活動である。こうした企業の政治活動は、相対的に個人の政治活動の効果を弱め、結果として個人の参政権を制限することを意味し、民主主義の原則にまったく反する行為である。

企業の政治活動を野放しにすれば、企業はその巨大な経済力、情報収集力、人材により、すべての人間をその支配下におきかねない。

この意味で、企業の政治献金は、単に政治家のモラルの問題ではなく、民主主義の根幹にかかわる問題である。企業による政治支配を防ぐため、米国でも企業の政治献金は厳しく禁止されている。日本でも企業の政治献金は禁止すべきであるし、また禁止することにより、初めて現在の政党の金権腐敗体質を一掃することが可能になると考える。

企業権力抑制のための第二の政策は、企業による市場支配を防ぐことである。

企業は安定的拡大という目的のために政治権力へ接近を図る傾向を持つとともに、企業同志の吸收・合併やトラスト契約により自由競争を制限し、市場を支配しようとする性向を持っている。

企業の巨大化は、巨額の先行投資を必要とする重工業における経済的リスクの負担能力や、国際競争力強化の点から否定できない面もあるが、それが自由競争の放棄につながることは許されない。政治による集権的調整ではなく、市場の持つ分権的調整機能を活用するためには、自由競争は必須の前提条件だからである。

特に、市場における需要・供給の関係が、具体的には個人消費者対巨大企業というアンバランス

な力量主体の間の関係であることを考えれば、供給側の企業に対しても相当厳しいチェックが必要である。たとえば、流通支配による価格維持や、寿命の短い製品による買い換え需要の喚起といった、隠れた形での“独占”を許さないためには、消費者運動などに期待すると同時に、公正取引委員会の強化が必要となる。

そして、このための法的根拠として、分割命令権を含む独禁法の強化が必要である。

経済の分権的管理

経済の分権的管理のためには、まず第一に市場機構の有効な利用が考えられる。たとえば処理に多額の費用を必要とする廃棄物をもたらす製品の製造を抑制する場合、その数量や種類を法律で直接規制するためには、行政の権限強化が必要となる。こうした直接規制の代わりに、廃棄物処理費用を製造メーカーに負担させることができれば、その製品は処理コストをまかなうため価格が上昇し、需要が減り、結果的に製造が抑えられることになる。

同様に、大都市からの人口分散を考える場合も、出てゆくべき業種や施設を政治的・法的に決定するよりも、地方都市での活動の方が大都市よりも経済的に有利となるような条件を作ることが、より有効であろう。

こうした市場機構を利用した誘導政策によって環境保全を図ってゆくためには、これまで経済価値として考えられていなかつたきれいな空気や砂浜といったものを、経済的指標として表わすための研究が必要となろう。

第二点としては、企業経営への従業員、住民、消費者の参加が考えられる。

企業の自己運動の方向が地域住民や消費者の利害と自然に調和するものではないことは、公害の発生、欠陥商品の氾濫を擧げるまでもなく明らかである。

地域住民や消費者が常設の制度、手続きを経て自己の被害を防ごうとすれば、裁判や議員→議会→行政→企業といった長いフィードバック・ループを経ることが必要となる。ここに直接要求を行なう市民（住民）運動の発生する原因がある。

しかし、市民利害の企業へのフィードバック機能を、いつまでも市民運動にのみ依存するのは酷である。市民の利害を企業経営に日常的にビルト・インする必要がある。そのため、地域住民、消費者、従業員の代表が企業経営にチェック役として参加する制度を設けることを提案したい。

第三点としては、企業情報の公開である。

情報の公開は、企業権力の濫用を防ぐ上で厳しいチェック機関以上に有効な場合が多い。

現在でも、株式市場に上場されている会社については、投資家保護の立場から毎年、財務諸表の公表が義務づけられている。しかし、これによつて公開されるのは、バランスシートの記載内容などおおまかな項目に限られ、政治献金など寄付の対象や、製品の原価などについては、まったく公表されていない。

その上、株主の質疑を踏まえて裁決されるべき株主総会は、いまや完全に形骸化し、一般株主の質問は、会社にやとわれた総会屋によつて封じられているのが現状である。こうした株主総会の現状は、株主・一般消費者からの批判を“くさいものにはあた”式に押え込む企業の態度をもつとも表されていない。

企業の社会的影響力を考えるならば、従来の投資家保護の立場に加えて、消費者保護の立場からも、寄付の対象、製品の成分・寿命など、もっと広い範囲の項目について企業情報の公開が義務づけられるべきである。

こうした企業情報の公開、株主総会の正常化を保障するため、たとえばアメリカのSEC（証券取引委員会）のような、企業に対する調査権を持つ独立した行政委員会の設置が望まれる。この委員会は、大蔵省証券局などの強化、独立によつて構成できるであろう。

二、市民福祉をめざす政策の方向

市民福祉の内容

ここ十年来、どの政党も“福祉の充実”を政策としてかかげている。しかし、“福祉”という言葉は余りにも多用されすぎて、その内容は必ずしも明確でない。

高度成長期の政策に対する批判と反省の上に立つて、これまで述べてきた分権的制度に盛り込むべき“市民福祉”について考えてみたい。

大幅ベースアップに象徴されるフローの豊かさは、高度成長の中では相当のレベルに達し、これに対応したテレビ・冷蔵庫・洗濯機・掃除機・クーラー・自動車・ファッショング製品といった消費財の豊かさは、世界でもアメリカ以外では例を見ないまでになつた。

しかし、その一方で公害の激化といった自然の生態系の破壊、薬の使いすぎ、有害食品の犯濫など、商業主義による安全の軽視をまねくとともに、狭くて異常に値の高い住宅に代表される生活関連社会資本の充実は、現在に至るまで決定的に立ち遅れている。

また、企業内福祉としてスタートした健康保険・年金といった制度も、一応、全国民をカバーするまでになつてはきたが、官公庁・大企業の従業員とそれ以外の人々との間にはまだ相当の保障格差を残しており、社会保障の本質にかかる制度的な矛盾をかかえている。

こうした観点に立って、生活の質的充実を図るための政策を提起したい。

自然との調和と人間の安全

戦後の復興・経済成長の中で潜在的に進行していた工場排水や煤煙による海・河川・大気の汚染は、六〇年代に入つて水俣病・イタタイイタイ病・四日市ゼンソクなどの公害病として一挙に顕在化するとともに、広範囲のP C B汚染・水銀汚染・ヘドロ公害・大気汚染が明らかになつてきた。まさに公害列島といった状態である。

被害者を中心とした公害反対運動に対して企業は初め、加害者であることを認めず、一時金の支払いによって運動の分断を図るなど、ごまかしと責任回避の姿勢に終始し、行政も消極的な対応しか示さなかつた。

しかし、全国的な公害反対運動の盛り上がりの前に、企業及び行政の姿勢は次第に変化はじめている。特に水俣病裁判における原告側の勝訴と莫大な補償金の支払いは、他の企業をして公害防

止に取り組まざるを得ないことを痛感させた意味で、日本の公害反対運動史上、きわめて大きな意義を持っている。しかし、これまでの、そして今後も続く被害者の犠牲と苦痛を忘れるわけにはいかない。

その後、公害規制は強化されたが、公害の発生はなくなつていない。特に瀬戸内海などの大規模な汚染や、P C Bなど分解しない化学物質による汚染が、はたして自然の回復力によつて回復するのかさえ疑問である。

公害をこれ以上発生させないために、公害被害の立証責任の転換、無過失責任の導入などと並んで、これまで外部化されてきた公害防止のための社会的費用を、企業負担として内部化するルール作りが必要である。また、そのためには、開発にあたつての環境アセスメント、きれいな砂浜などを福祉価値として評価する費用計算など、多くの試みの積み重ねが必要であろう。

また、長期的観点に立つて考えれば、自然の生態系を破壊するような生産過程は、いつかは人間の生存をも脅かすことになろう。そこで、工業だけでなく、農業と化学肥料に依存する現在の農業を含め、すべての生産関係ができるだけ自然の生態系と調和した形を作りかえてゆかなくてはならない。

そこには、たとえば都市における下水の分別処理と組み合わせた有機肥料再生システムの開発など、生態系の循環に沿つた生活・生産のための技術体系の開発が急務である。

こうした産業公害に加えて、世代を超えて人体に悪影響を及ぼす発ガン性、催奇形性の有害食品も見逃すことはできない。

本来天然物でない化学物質からなる食品添加物は、戦後の食品産業の大規模化・流通の広域化に並行して、その種類と使用量が激増してきている。こうした食品添加物は、メーカーと学者による実験データだけを根拠に、厚生省により次々と使用を許可されたものである。そして、いつたん許可された物質については、安全性を疑うべき状況証拠がでてきても、AF-2などに見られるように使用を禁止させることは非常に困難である。

こうした厚生省の行政をみると、まさに“疑わしきは禁止せず”という原則で貫かれていることがわかる。

食品添加物や薬品に対する“疑わしきは使用せず”という原則で規制を強めることが必要である。それともに、食品添加物を必要としない生産・流通の体系を確立することが必要である。同時に、インスタント食品などの“便利さ”よりも安全性を選ぶ一人ひとりの生活態度の変革が望まれる。

住宅及び生活施設の充実

戦後日本の住宅政策の跡をたどってみると、その“無策”ぶりにおどろかされる。

高度成長政策を進める上で、農村から都市への人口流入は、当然、予想されたはずであるにもかかわらず、その住宅需要に対しては、言葉だけの“持家政策”を掲げるだけで放置した。このことは、ドイツの持家政策が、平均的労働者が十分家を持てるように、地価の抑制、低利の住宅建設資金の貸し付け、税制上の優遇措置などにより、しっかり裏付けられていたのに比して対照的であ

る。

その後、都市化に伴う住宅難の激化を前に、住宅公団による住宅建設が始まる。しかし、その供給量は、地方自治体による供給量と併せても全住宅供給量の一〇%に達せず、何千倍という倍率のくじで入居者が決まるという“宝くじ的”住宅政策であった。これは、住宅供給の約半分が公的住宅であって、希望者はほぼ全員入居できるというイギリスの住宅政策と対照的である。

そして今日、住宅公団は、狭く、遠く、民間と差のない高い価格によってますますその公的住宅としての意味を失いつつある。

このように、“持家政策”も“公的住宅供給政策”も、自民党政府による“言いわけ政策”であったことは、有効な地価抑制政策が実行されなかつたこと、住宅予算が道路・港湾整備予算の一割にも達しなかつたことなどによく表われている。

私たちちは昭和四十七年に、都市に安価で良質な貸家を大量に供給するシステムとして、「土地信託公社」を提案したことがある。

これは、市街化農地に対する宅地並み課税によって地価の上昇を抑えるとともに、土地利用を促される土地所有者（農民）から、土地信託公社が十年～十五年間の信託を受けて、その土地に中層集合住宅を建設、賃貸し、地主にはその土地での農業収益の三倍程度の配当を行なった上、相当に安い（当時の試算では、70²mの住宅で月二万三千円）家賃で住宅を提供するという制度である。のように家賃が安くできるのは、土地を買収しないために地価が家賃に影響しないからであり、地主にとつても、土地を手離すことなく安定した収入が保証され、農業から貸家業への円滑な転業を

可能とするものである。

宅地並み課税の是否については、都市過密化による環境悪化の面から、また都市農業再建の立場から批判が出されている。

たしかに大都市での住宅供給が、人口流入をいつそう促進することを考えると、大都市の市街化農地は、公有化などによつてオープンスペースとして残し、住宅供給は地方の中・小都市を中心に入進めることが望ましい。

また、長期にわたつて農業に利用される予定の土地については、宅地並み課税と組み合わせて地価申告制度を採用することにより、農地としての課税を維持することができる。すなわち、土地保有税は土地所有者自身が申告した地価を基準に課税するが、もし、申告価格より高い価格で土地を売る場合には、その差額に対してほぼ一〇〇%の課税を行なうもので、農家は低い価格で申告することにより保有税負担が小さく済むと同時に、値上がり待ちの抜け道を防ぐことができる。

私たちのこうした政策提案は、まだ実施されていないため、最終的な評価は難しいが、これが実現していれば、現在のような地価の高価格状態と住宅難は相当に解消されていたと思う。

都市化に対する都市施設の遅れは、住宅だけでなく、子供の遊び場や大人のスポーツの場の決定的な不足も表われている。都市化による広場の喪失に伴つて、遠方のレジャーセンターやゴルフ場へ出かけてゆく形のレジャー構造が拡がつたが、これも過大な費用を要するため、石油ショック以後は停滞している。

本来、レジャーは生活の一部であり、その施設は生活の場に近接して地域的に配置されることが

望ましい。そのためには子供の行動半径ごとの小規模なちびっこ広場の建設、市民共用のスポーツ施設の建設などに加えて、小・中学校施設の開放が重要なテーマとなる。

つまり、これまで学校施設は学童専用の教育施設とされてきたが、放課後や休日には、市民も家庭・プール・体育館などを気軽に利用できるような新しい管理運営方法を開発し、市民施設として再構成することが必要である。

また、これからスポーツ施設の建設にあたつては複数の学校の共同利用や地域住民の利用を前提として、比較的大規模なスポーツセンターとして構成されることが望ましい。こうした構成により、イギリスのクリスタル・パレスの例に見られるような、スポーツ専門家の常駐を含む運営が可能となり、学童や住民は、施設だけでなく、そうした専門家の指導を受けることもできるからである。

これまで述べたように、今日の生活において、住宅・地域レジャー施設など生活関連社会資本の不足は、消費財の豊富さとの間にきわめて大きなアンバランスを生んでいる。そのため、フローとしての所得の上昇を追求する以上に、生活関連社会資本の充実を図ることによってこのアンバランスを是正することが“福祉の向上”にとつて重要だと思われる。

医療制度、年金制度の問題点

今日の医療制度の混迷は、薬の使いすぎ、差額ベッド、救急医療体制の不備、無医地区、私立医大の巨額な入学金、看護婦の苛酷な労働条件、健康保健の赤字、医師税制の不公平など、目をおお

うばかりである。

これらの問題は、相互に複雑にからみ合って、解決を困難にしている。ここでは、薬の使いすぎの解消と、医療保険制度及び年金制度の統合について述べてみたい。

医療費の値上げについては、中医協を構成する医師会及び大企業労組幹部・経営者からなる支払者側代表はもちろん、一般消費者も非常に大きな関心を持っている。しかし、医療費の内容、医療の質については、必ずしも十分な検討がなされているとはいえない。

薬の使いすぎに対する対しては、近年批判が高まっているが、薬の使用量は相変わらず増加の一途をたどっている。わが国の医療費総額約七兆円（51年）に占める薬剤費用は約三兆円（51年）で、その割合は四五%を超えており、欧米諸国が一〇～二〇%であるのに比べて異常に高いといわざるを得ない。

この原因を調べてみると、医者が薬剤メーカーから購入する実際の値段と、それを使用した時患者から保険を通して受け取る薬価との間に大きな差があり、医者としては薬を多用するほど利益が上がり、薬剤メーカーのほうでも、その差額の大きさをセールスポイントに、強引に大量の薬を売っているという点にその原因がある。

この解決策は、医者の購入価格と、それを使用して受け取る価格を一致させることである。そのためには薬剤メーカーの薬を一括して買い上げる公社を作り、そこから医者に対して一定の価格で薬を供給することを提案したい。

これによつて浮くことが予測される二兆円近い費用は、その一部を医者の技術料の保険点数の引

き上げに振り向けて医師会の反対を押さえ、残りを差額ベッドや付添婦など入院に必要な費用の保険扱いに振り向けることによつて、重い病気に対し冷たい従来の保険制度を改めるために役立てることができる。

また、現在の健康保険制度は、年金制度と同様、企業内福祉を中心構成されてきたため、階層別、企業別に分断されている。健康保険についていえば、大別して、大企業ごとの組合管掌健康保険、官公庁の共済組合、中小企業従業員を対象とする政府管掌健康保険、一般地域住民を対象とする国民健康保険などに分かれており、それぞれ給付率などに差がある。

長年こうした保険制度の統合が叫ばれているが、中小企業に比して平均所得が高く、しかも、平均年齢が低いことにより黒字を生んでいる大企業中心の組合健保の強力な反対により実現してない。

健康保険、年金といった社会保障は、国民全体の相互保障であるべきで、現在の階層別の制度は統合されることが望ましい。

あとがき 市民政治をめざします

日本には政治に関して二つの神話がある。一つは、政治はけがらわしいものだとする神話であり、もう一つは、政治体制は変わらないという神話である。私たち、この二つの神話に挑戦したい。第一の神話を信じている人は、私たちが市民運動を開拓してきて、その後、政治にチャレンジしたことに対して、本来の市民運動から逸脱した行動であると批判する。しかし、政治をけがらわしいものにしてきたのは誰か。われわれ市民の側にも責任があるのではないか。政治を大切にする層が薄いことが、ロッキード事件を生んだのだ。ロッキード事件以来、いつまでも政治をけがらわしいままにしておいてよいのかという反省のムードがある。今回の参院選でも、革新自由連合や日本女性党にいたるまで、政治への直接参加が行なわれている。市民選挙というモデルを作れば、運動がひとりでに拡がることが実証された。確かに政治は権力志向である。だから私たちは、その中でもまれ、うす汚れるかも知れない。しかし、政治を大切にする政治風土への可能性を求めて、私たちは挑戦をつづけていきたい。

第二の神話を信じる人は、政治体制というものは変わらないものだと思い込み、無関心になり、シラケきっている。確かに一九五五年の保守合同以降、政治は不可変なものであった。しかし、自

民党の長期単独政権の崩壊が確実となる中で、連合政権の時代が近づきつつある。このような時代こそ、市民の手の届くところに政治が来ていると言えるのではないか。それはまた、市民の政策要求が通りやすい状況もある。たとえば「分権」という政策はどの政党でも言っている。しかし、本気でその実現を目指している政治家は一人もいない。分権化は、土地改革を行なったG H Qにすら出来なかつた政策である。その実現の可能性が近づきつつあるということは、きわめて革命的なことだ。今なら市民の政策を実現しうるだろう。

私たちはこの二つの神話を破りたい。あの政党もダメだ、この政党もダメだでは、すべての可能性が失なわれてしまう。現在の政治風土の中で、その神話を挑戦すれば、はげしい批判が予想される。しかし、私たちは、市民主導の政治のきっかけを作つていきたい。市民としての責任を果たせば、手をつなぐ人も増えるはずだ。

私たちは、市民運動を開拓する中で、三年前、参院選に市川房枝さんをかつぎ出した。素人ばかりで選挙などやれるものかと笑われた。しかし、実際に戦つてみると、他の選対以上のことはできた。保革伯仲実現の一翼を担うことができた。そして先の衆院選では、有名だからこそ出来たといわれた市川選挙と同じ理想選挙方式で「金も、名も、組織もない」選挙戦をたたかいぬき、多くの市民層の支持で七万余票を獲得することが出来た。そこに集まつた連中の間に、選挙プロはいない。サラリーマン・技師・学生・主婦と性格はさまざまだが、いずれも仕事を持つたままのボランティアによる選挙だった。

を通じての全国の市民運動グループとのネットワークからなる小さな組織だ。いじでは、どんなことでも徹底的に議論する。自主性と多様性を許しあう組織が、大きなエネルギーを生みだしていく。しかし、それだけに組織運営は大変だ。私たちは時間をかけてじっくり話しあう。決定機関も、はつきりしたものはない。それでも何とかここまで運用してきた。

この方法に対しても、内部でも批判というか、将来に対する多少の危惧がある。「組織が大きくなれば、きっと官僚化してしまうだろう」という不安である。たしかに、その危険性がまったく無いとは言わない。しかし、いまそれを批判していても始まらない。企業や組合の中での疎外状況は進んでいる。官僚的にならない組織作りの可能性を、あらゆる局面で共にやってみようではないかと呼びかけたい。既成の政党が音をたてて崩壊する中で、いまこそ正規軍としての市民が動き始めなければならない。

この本作りは、七人のスタッフが手分けして進めた。第一章は宮城健一を中心に、安江満雄、藤岡郁子、菊地ひとみが担当し、第二章は大宅憲一が取材し、文章化した。第三章は菅直人が執筆した。そして、片岡勝がもっぱら連絡係をつとめた。初めての本作りであり、みんな職業を持つての作業であったため、大変苦しかったが、持ち前のチームプレーで、何とか終えることが出来た。

いまはただ、この本が硬直化し、閉塞した社会のなかで、一人ひとりの市民の政治参加の可能性を引き出すことができればと願っている。

一九七七年五月

参加民主主義をめざす市民の会（出版プロジェクトチーム）

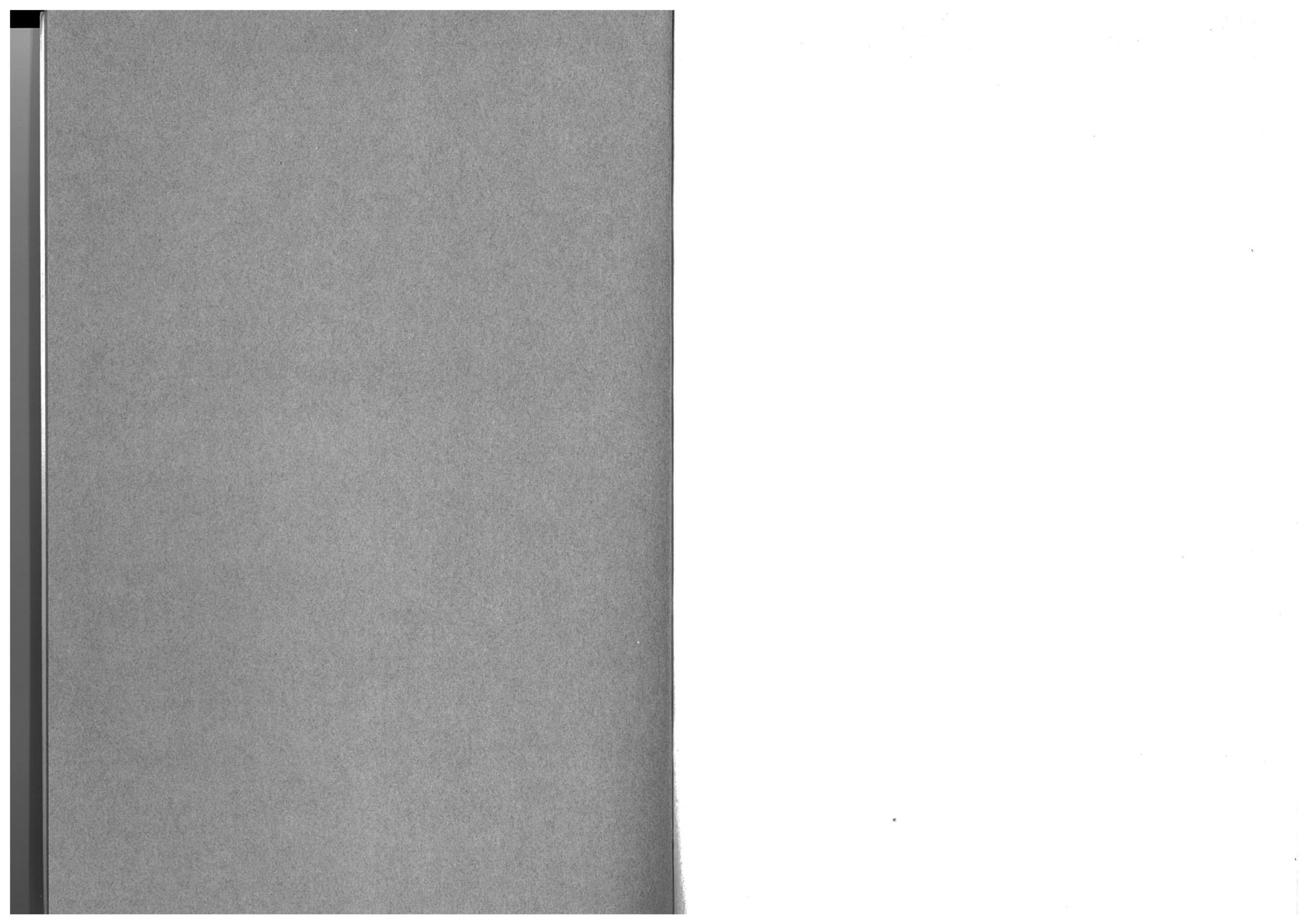
無から有への挑戦—「支持政党なし」時代の選挙 一九七七年六月一日 第一刷 定価八〇〇円

編 者／参加民主主義をめざす市民の会（出版プロジェクトチーム） 1977 装幀／池田拓

編集人／笠井晴信 発行人／深見和夫

発行所／読売新聞社

〒100 東京都千代田区大手町一―七一 〒531 大阪市北区野崎町七七 〒801 北九州市小倉北区明和町一―一
印刷所／図書印刷株式会社 製本所／寿製本 0031-503090-8715 ▷落丁・乱丁はおとりかえします△

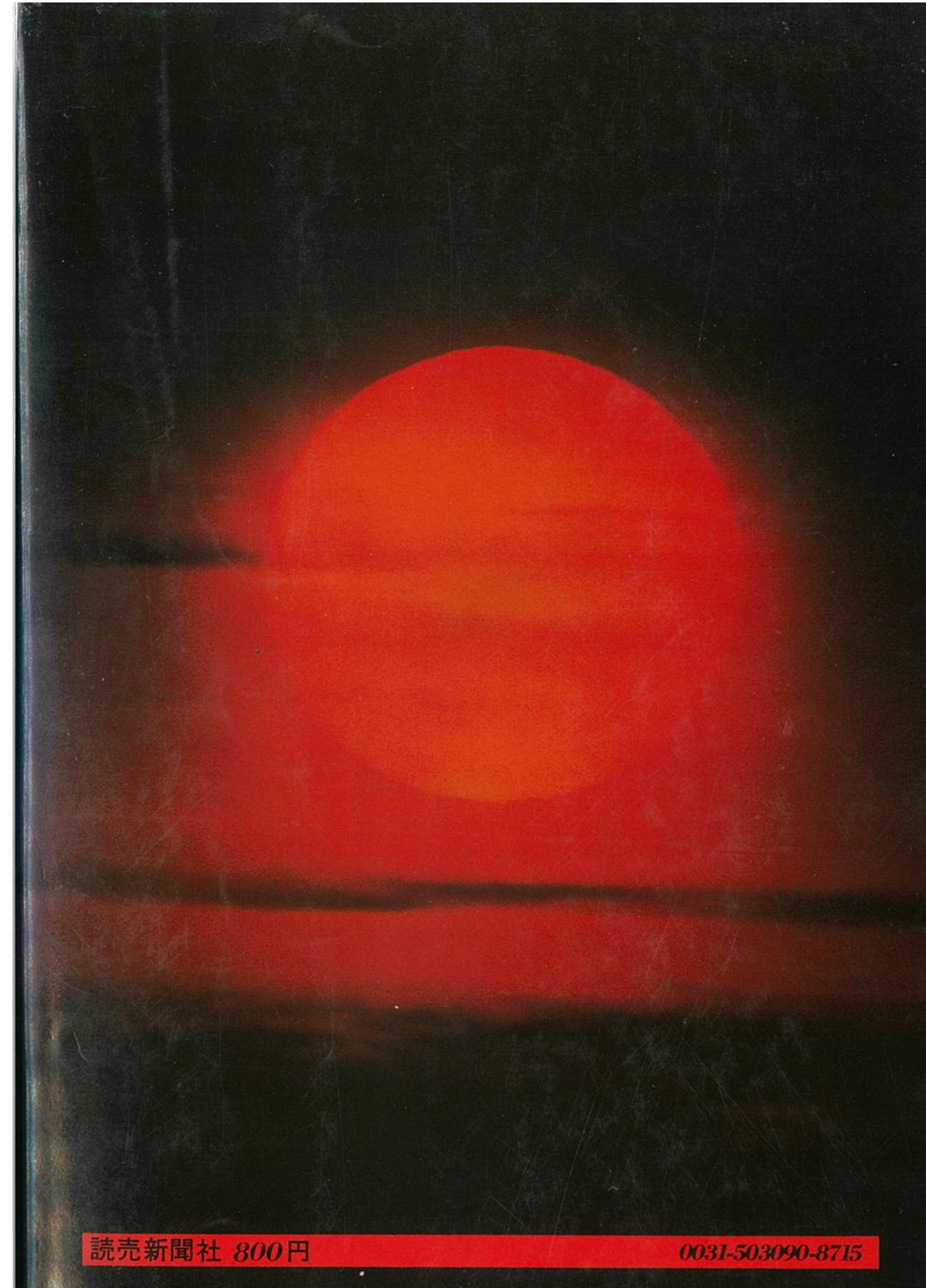


グループ年表

- 1971年秋
よりよい住いを求める市民の会
- 1973年6月
恐怖の化学物質を追放するグループ
消費を考える葛飾の会
- 理想選挙推進市民の会慶大グループ横浜支部
- 1974年3月
市川房枝さんをかけてに推薦する会
- 6月
参院選 機関誌「シビルミニマム」創刊
- 9月
草の根市民選挙研究会
ハガキニュース「みにこみ」
青空テント'74
医療をいろいろな面から考える会
- 1975年1月
議会監視のためのネーダー研究会
- 3月
市民運動草の根キャラバン
- 4月
武藏野市議選に仲間を立て次点
- 10月
市民祭準備会
- 1976年6月
あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会
- 12月
衆院選東京7区に菅直人を立て次点
- 1977年4月
社会市民連合V.S参加民主主義をめざす市民の会、
公開討論会



この本をつくった人々
左から片岡、菅、藤岡、菊地、安江、宮城、大宅



読売新聞社 800円

0031-503090-8715